一般資料

帝室制度史

第四卷

国立国会図書館蔵書

目次

第一編　天皇

第二章　皇位繼承

第三節　皇位繼承の儀禮

第一款　踐祚の儀……一

一……九
四……一四
七……一三
一〇……二七
一三……三一
一六……四二
一九……六三

二……一〇
五……二〇
八……三三
一一……二八
一四……三三
一七……四六
二〇……六二

三……三一
六……二一
九……三五
一二……二九
一五……三四
一八……五九
二一……七一

第二款　卽位の禮……七二

国立国会図書館
27.7.23
273633

一……七五
四……八八
七……一〇〇
一〇……一二五
第三款　大嘗祭……一三三
一……一三三
四……一三四
七……一三七
踐祚即位禮大嘗祭表……一九二
第四節　皇嗣
第一款　皇嗣の冊立……二〇七
一……二〇七
四……二三四
七……二五五
一〇……二六二
一三……二七四
一六……二八〇
皇太子冊立表……二八一
二……七六
五……九一
八……一一〇
三……八四
六……九五
九……一一一
二……一一九
五……一三四
八……一八九
三……一三三
六……一三七
九……一九〇
二……二一九
五……二四三
八……二八七
一一……三一〇
一四……三一七
一七……三四三
三……二三一
六……二四三
九……二九九
一二……三二一
一五……三三七
一八……三五九
第二款　皇嗣の改替……三六七
一……三七〇
四……三八五
二……三七三
五……三九九
三……三七七
第三款　皇嗣の待遇……四一二
一……四二一
四……四三七
七……四六八
一〇……四七八
一三……四八五
二……四二九
五……四四七
八……四七五
一一……四七九
一四……四八五
三……四三四
六……四五七
九……四七八
一二……四八〇
一五……四八六

凡例

一、本書は、帝室に關する諸般の制度の本質、起源及び沿革を、確實なる資料に基づき敍述することを目的とす。

一、各編は、之を章、節、款に分つ。款の下に、更に項、目を設くることあり。

一、各款(又は項、目)の首に本文として、其の款(又は項、目)の要項を述べ、次に其の典據たる資料を列擧す。

一、本文には、文中に資料の番號を附し、以て對照の便に資す。

一、本文の中に引用する典據の文には、句讀、訓點を施し、場合に依り傍訓を附す。

一、資料は、本文の中に引用する典據の外、之に關聯するものを併載し、且參考として傍證を附載す。

一、資料は、概ね原書の體裁に據り、之に句讀を施す。便宜省略することあ

るときは、其の旨を注記す。

一、資料の原書に、誤謬若しくは不明の文字あるときは、其の旨を傍注し、脱文、蠹蝕あるときは、其の字數を計り、符號□を填す。

一、資料の中には、其の性質により、編著者及び其の年代等を文末に注記するものあり。

一、資料の中、必要ありと認むる箇所には、事項の要領を欄頭に標出し、以て檢索の便に資す。

帝室制度史第三巻正誤表

頁	行	誤	正
二四	一二	祖、考	祖考、
二六	四	可關	可閣
五三	三	巳下不殘	巳下一人不殘
七二	一〇	承詔天	承給天
九〇	一二	狹狹城君	狹狹城山君
一〇七	二	をとゝ	をとゝを
一一九	一	難有參差	雖有參差
一三八	一四	息石耳命	息石耳命（一名宮根津彦伊許泥命）
一四二	五	（註）女王二	女王三
一四三	二	（註）三柱ノ下ニ（中略）ヲ加フ	
一四四	一一	瑞籬宮	於瑞籬宮
〃	一二	丁巳（二十二日）	丁巳（二日）
〃	一三	戊寅	戊寅
一五八	一二	大友皇子	大友皇子（母宅子娘、伊賀采女）
一六四	一二	太政大臣	於太政大臣
〃	一四	于時春宮帶刀舍人解陣退散ノ十二字ヲ倒ル	
一六七	六	一日	一日己丑
一七四	二	宣耀殿	宣耀殿
一七九	一	（註）年四十	年四十二
一八五	一〇	（註）良方止	良方度

頁	行	誤	正
一九二	一	貞永元年	（後堀河）貞永元年
二〇三	九	（註）十七ノ下ニ御童形ノ三字ヲ加フ	
二一五	七	正月	二月
二三六	三	橘豐日命	橘之豐日命（廿三日庚戌）十三日癸酉
二四六	一〇	十三日癸酉	
二五六	一四	つくらねば	つくられねば（調忠）
二六五	四	皇太弟	皇太弟
二六九	一三	（中略）	倒ル
二七九	三	高山	如高山
二八四	四	（註）諡號	號諡
三〇五	一一	踐祚ノ下ニ（中略）ヲ加フ	
〃	〃	太政官廳ノ下ニ十良ト註記ス	
〃	一二	踐祚也	今日踐祚也
三三三	一〇	（註）逸義第十七	逸義九
三四三	八	太子にたてまつらせ給ふ	太子にたてたてまつらせ給ふ
三四九	一四	（註）順德院	佐渡院
三六〇	九	（註）也	倒ル
三七七	三	かぎりに	かぎりにて
三九四	六	（註）弓倒の氏	弓倒氏

頁	行	誤	正
四一八	九	從五位下	從五位上
四三五	八	頃ノ下ニ二年ノ二字ヲ加フ	
四四八	七	(註)白河天皇	白河院
四五八	九	一年	元年
四六〇	五	一年	元年
四六五	標出	受ノ下ニ禪ノ字ヲ加フ	
四七五	二	(註)渡止久	渡久止
四七六	六	王等ノ下ニ臣等ノ二字ヲ加フ	
四九六	七	思ヘリケル	思ヘリケリ
四九八	七	(註)順德天皇	佐渡院
四九九	八	一年	元年
五三二	一一	廿五日ノ上ニ十一月ノ三字ヲ加フ	

第一編　天皇

第二章　皇位繼承の儀禮

第三節　皇位繼承

第一款　踐祚の儀

天皇皇位を承けたまふを踐祚と謂ふ。踐祚は、古書に、或は之を卽位、卽祚又は登極と稱し「アマツヒツギシロシメス」と訓めり(一)。中世以後、崩御の後を承けたまふ場合を踐祚と謂ひ、讓位の後を承けたまふ場合を受禪と謂ひ、之を區別するを例と爲すに至りたれども、踐祚の語は、其の何れたるかを問はざるを本義とす(二)。

上古に於いては、踐祚の儀と卽位の禮との區別なく、踐祚と卽位と

は、全く同意語として用ひられたり。令義解に「天皇卽位、謂二之踐祚一、踐祚位也」と見え、令集解に「踐祚之日、謂二卽位之日一也」とあるは、之を示すものなり(三)。之を國史に徵するに、神武天皇より齊明天皇に至る三十七代の間は、踐祚卽ち卽位にして、二者別に其の儀を行はれたることなし(四)。第三十八代天智天皇は、齊明天皇崩御の後、朝に臨み稱制したまふこと六年餘に及び、七年正月始めて卽位したまふ。皇室典範義解には「是レ踐祚ト卽位ト兩樣ノ區別ヲ爲シタルノ初ナリ」と云へりと雖も、稱制の間は尙皇太子と稱したまひ、卽位の事あるに及びて、始めて天皇と稱したまへるに徵すれば、稱制を以て踐祚なりとし、踐祚と卽位との區別が此の時に始まりたりとするは、恐らくは當らず。持統天皇も、天武天皇崩御の後、朝に臨み稱制したまふこと三年餘に及びたれども、日本書紀持統天皇四年正月

卽位の條に「奉二上神璽劍鏡於皇后一、皇后卽二天皇位一」とあるに依れば、稱制の間は尙皇位に卽きたまはざりしことを察するに足る(五)。要するに、兩天皇が稱制の後卽位したまひしは、未だ踐祚と卽位との別あるに至りしものと爲すを得ず。

踐祚の後時を隔てゝ卽位の儀ありしは、文武天皇の、元年八月一日受禪卽位したまひ、次いで同月十七日卽位の詔を宣したまひしを以て、蓋し其の最初と爲すべし(六)。後七代を經て(七)、桓武天皇の、天應元年四月三日受禪卽位したまひ、次いで十一日伊勢神宮に卽位の由の奉幣あり、同月十五日大極殿に御して卽位の詔を宣したまひてより、皇位を承けたまひて後、時を隔てゝ卽位の儀を行ひたまふこと、漸く常例を爲すに至り、平城天皇は、大同元年三月十七日神器を受けたまひ、五月十八日卽位の儀を行ひたまひ、嵯峨天皇は、大

同四年四月一日皇位を承けたまひ、同月十三日卽位の儀を行ひたまふ(八)。是より後、歷代天皇は皆其の例に倣ひたまひ、皇位を承けたまふの儀と卽位の事を公に宣示したまふの儀とが區別せられて、兩者時を異にして行はるゝことが、恆例を爲すに至れり。

されど斯かる慣例を生じたる後も、當初より一を踐祚又は受禪と謂ひ、一を卽位と謂ひ、判然之を區別したるに非ず。其の名稱の區別が、何れの時に定まりたるかは明白ならざれども、恐らくは村上天皇の頃より後のことなるべし。但し嵯峨天皇の弘仁儀式に、卽位儀と讓國儀との二儀を分ち、淸和天皇の貞觀儀式及び醍醐天皇の延喜儀式にも、之を承けて同じく讓國儀と卽位儀とを分てるに依りて見れば、其の頃に旣に儀禮に於いては、讓國卽ち受禪の儀と卽位の儀とが、明らかに區別せられたることを知るを得べし(九)。」

踐祚と卽位との區別なかりし時代に於ける踐祚の儀禮に付いては、今其の詳細を知るに由なしと雖も、古語拾遺に神武天皇卽位の事を記して「天富命攀二諸齋部一、捧二持天璽鏡劍一、奉二安正殿一、(中略)大伴來目建レ仗開レ門、令レ朝二四方之國一以觀二天位之貴一」と見え、日本書紀に持統天皇卽位の事を記して「物部麻呂朝臣樹二大盾一、神祇伯中臣大嶋朝臣讀二天神壽詞一畢、忌部宿禰色夫知奉二上神璽劍鏡於皇后一、皇后卽二天皇位一、公卿百寮羅列、匝拜而拍レ手焉」と見え、又大寶令に「凡踐祚之日、中臣奏二天神之壽詞一、忌部上二神璽之鏡劍一」とあるに依りて見れば、天神の壽詞を奏し及び神器を奉上することが、其の儀の中樞を爲し、又踐祚の儀に於いて同時に之を群臣に宣示したまひ、群臣拜賀し奉るの例なりしことを窺ふを得べし(一〇)。但し卽位に先だちて神器を奉上したる例の史書に見ゆるものなきに非ず。日本書紀淸寧天皇卽位前紀

には、雄略天皇の二十三年八月天皇崩じ、同年十月大伴大連等璽を皇太子に奉り、越えて翌元年正月皇太子卽位したまひしこと見え、同書推古天皇卽位前紀にも、崇峻天皇の五年十一月天皇崩じて嗣位空しく、群臣璽を皇后に奉り、十二月皇后卽位したまひしこと見えたり(二)。

踐祚の儀が卽位の禮と區別せらるゝに至りて後は、卽位の禮の莊重盛大なるに比し、踐祚の儀は寧ろ簡素にして、天神の壽詞を奏することは之を大嘗祭に於いてし、卽位の事を公に宣示したまふ爲には、別に卽位の禮を擧げたまふことゝなれるを以て、踐祚の儀は一に神器の傳承を其の中樞と爲すに至れり(三・四)。蓋し神器は皇位の御しるしにして、皇位の在す所神器必ず之に伴ふ。天皇踐祚と共に神器を承けたまふことが、古來不變の恆典を爲せるは此の故にして、以て踐祚の儀が皇位繼承の本義に於いて、卽位の禮よりも其の意義殊に重きことを知るに足るべし。唯壽永の亂に際し、後鳥羽天皇の神器を承けずして踐祚したまひしは、國家異常の變に處する爲已むを得ざる所なりしとは云へ、我が國史上の甚しき異例なり(三)。

神器傳承の儀は、上代に在りては鏡と劍とを奉上するの例なりしが(一一八・一〇)、平安時代踐祚と卽位との別あるに至りて後は、神鏡は別殿に奉安して動座し奉らず、劍と璽とを上る例となれり。之を劍璽渡御の儀と謂ふ。劍璽渡御の儀は、先帝と新帝との御在所異なる場合には、左右近衞府の中將若くは少將を劍璽使と爲し、先帝の御在所より移して之を新帝に上るの例なり(二三)。

踐祚の儀を行ひたまふ時日に付いては、皇位は一日も曠しくすべからざるの大義に照し、天皇の崩御又は讓位の卽日之を行ひたまふことを正則とす。されど史上必ずしも此の例に依らざるもの少からざることは、前に空位期間に付き述べたるが如し（第三卷五〇頁參照）。之を國史に徵するに、先帝崩御の卽日踐祚の儀を行ひたまへるは、平城天皇、文德天皇、淸和天皇、宇多天皇、冷泉天皇、後朱雀天皇、後三條天皇、鳥羽天皇の八代(一)、先帝讓位の卽日受禪の儀を擧げたまへるは、孝德天皇を始め五十五代なり(二)。其の外、稱德天皇は、淳仁天皇廢位の卽日踐祚の儀を行ひたまひ(三)、後白河天皇、花園天皇は、先帝崩御の翌日踐祚の儀を行ひたまへり(四)。先帝崩御の後若干の年月を隔てゝ踐祚の儀を擧げたまへるは、明治天皇に至るまで、實に五十代に達せり(五)。

皇室典範の制定に及び「天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」と明記し、以て先帝の崩御に因り、皇嗣が當然皇位を承けたまふことの大義を明示すると共に、踐祚の儀も亦、卽時之を行はせらるべく、而して神器の傳承が必ず之に伴ふべきことを、不動の恆典として定めたまへり(六)。

一日本書紀　五　崇神天皇　天皇踐祚（アマツヒツギシロシメシシテ）六十八年冬十二月戊申朔壬子（五日）崩、時年百二十歲、

日本書紀　十九　欽明天皇　天皇幼時夢、有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寤驚遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、（中略）乃令近侍、優寵日新、大致饒富、及至踐祚（アマツヒツギシロシメス）拜大藏省、

日本書紀　二十二　推古天皇　卅九歲當于泊瀨（崇峻）部天皇五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請渟中倉太珠敷（敏達）天皇之皇后額田部（推古天皇）皇女以將令踐祚（アマツヒツギシラセ）皇后辭讓之、百寮上表勸進至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔己卯（八日）、皇后卽天皇位於豐浦宮、

古語拾遺　故更令齋部氏率石凝姥神裔、天目一箇神裔二氏、更鑄鏡造劍以爲護身御

即位

璽、是今踐祚（アマツヒツギシロシメス）之日所獻神璽鏡劍也、

日本書紀　三神武天皇　辛酉（元年）年春正月庚辰朔、天皇即帝位（アマツヒツギシロシメス）於橿原宮、

日本書紀　四綏靖天皇　元年（庚辰）春正月壬申朔己卯（八日）、神渟名川耳尊即天皇位（アマツヒツギシロシメス）、

日本書紀　十二履中天皇　元年（庚子）春二月壬午朔、皇太子即位於磐余稚櫻宮（アマツヒツギシロシメス）、

日本書紀　十八宣化天皇　二年（安閑天皇）十二月、勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國押盾尊、使即天皇之位（アマツヒツギシロシメシヲシノ）焉、

日本書紀　二十五孝德天皇　天豐（皇極）財重日足姫天皇四年六月庚戌（十四日）、（中略）由是輕皇子不得固辭、昇壇即祚（アマツヒツギシロシメス）、

續日本紀　七元正天皇　靈龜元年九月庚辰（二日）、受禪即位于大極殿、詔曰、朕欽承禪命、不敢推讓、履祚登極、欲保社稷、

古語拾遺　夫尊祖敬宗、禮教所先、故聖皇登（アマツヒツギシロシメシテ）極、受終文祖、類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神、

二　名目抄

恆例諸公事臨時篇　讓位（ジヤウキ）、又遜位、有節會、

受禪（ジユゼム）、無別儀、有讓位者則有此稱矣、

踐祚（セムソ）、不讓位之時有此號歟、

代始和抄

御讓位事　踐祚といふ事は、位をふむといふ心なり、祚の字、もとは阼の字なれとも、多分祚の字を用來れり、この二字は、ひとへに新帝に懸たる名目也、受禪と讓位とは、新舊の兩主にわたれる名なり、（中略）踐祚といふ事は、別して非常の時に立王の事、或は上皇の詔命なとを以て行事也、

雜問答考

或人問、讓位といひ、踐祚といふに別有やと、或人こたふ、先帝崩御のほど忌ある故に、先踐祚なされ候、御在世の中に讓らせらるゝを讓位といふ、式正の時を即位といふと、今考るに、こは後世の俗也、先讓位とは、皇太子に御代を讓らせ給ふを申し、踐祚とは皇の御世をゆづらせ給ふを申也、かゝれば讓位の後にても、崩御の後にても、世をゆづらせ給ふは踐祚にて、即位といふに同じ、神祇令に、凡天皇即位、惣祭天神地祇云云、大嘗式に、踐祚大嘗、七月以前即位者、當年行事云云、又神祇令に、凡踐祚之日、謂天皇即位謂之踐祚、即位也、云云と有をも見ずや、

讓位の日もやがて踐祚也、即位也、かの大儀を行はるゝは、即位ありしを示さるゝ儀式のみ、俗は其大儀の日を即位と云とのみ思ふにや、〔賀茂眞淵　明和六年歿〕

扶桑略記

二十九後冷泉天皇　治曆四年戊申四月十九日庚申、寅刻天皇於高陽院中殿崩、

踐祚と受禪
踐祚の意義

即祚

登極

崩御踐祚

年卅四矣、

扶桑略記　二十九後三條天皇　後三條天皇、七十二代、諱尊仁、治五年、（中略）

後朱雀院第二皇子、（中略）治曆四年戊申四月十九日庚申、踐祚、生年廿五、

百錬抄　五堀河院　嘉承二年七月十九日、天皇崩于堀川院、廿九、即渡劍璽皇太子、（鳥羽天皇）

百錬抄　五鳥羽院　鳥羽天皇、諱宗仁、十六年、

堀川院第一皇子、（中略）嘉承二年七月十九日、踐祚、五、

滿濟准后日記　應永卅五年七月廿日、今曉卯終主上崩御、（稱光天皇）御歲廿八歲、

廿八日、今日新主御踐祚、（後花園天皇）

言成卿記　弘化三年二月六日、辰刻詰參仕、主上今（仁孝天皇）寅刻崩御云々、予直卷纓吉了、

十三日、衣冠、奴袴、垂纓、踐祚恐悅、新帝（孝明）警固固關陣儀了者、於禁中ハ卷纓、恐悅言上、附于御帳、

扶桑略記　二十八後朱雀天皇　寬德二年乙酉正月十六日癸酉、天皇讓位於皇太子親仁親（後冷泉天皇）王、

扶桑略記　二十九後冷泉天皇　後冷泉天皇、七十一代、諱親仁、治廿四年、（中略）

後朱雀天皇太子、（中略）寬德二年乙酉正月十六日癸酉、受禪、年廿一歲、

讓位受禪

百錬抄　五鳥羽院　保安四年正月廿八日、天皇讓位於第一親王顯仁、（崇德天皇）五、先爲皇太子之由載宣命、

百錬抄　六崇德院　崇德天皇、諱顯仁、十八年、

鳥羽院第一皇子、（中略）保安四年正月廿八日、受禪、五歲、

御湯殿上日記　天正十四年ひのへいぬのとし十一月七日、御しやう（正親町天皇）いあり、

壬生家四卷之日記　天正十四年十一月七日戊戌、

新帝受禪、（後陽成天皇）御諱和仁、慶長三年被改周一、去九月廿日御元服、

御湯殿上日記　享保二十年三月廿一日、御しやう（中御門天皇）位、御しゆせん（櫻町天皇）有、

桂宮日記　延享四年五月二日辛卯、今日辰刻櫻町御所遷幸、御讓位、（櫻町天皇）御受禪、（桃園天皇）劍璽渡御未刻過有之、

踐祚即ち即位

三　令義解　二神祇令　凡踐祚之日、謂、天皇即位、謂之踐祚、祚位也、福也、

令集解　七神祇令　凡踐祚之日、釋云、踐祚、天皇即位、謂之踐祚、祚位也、福也、音昨故反、禮記、文王世子曰、成王幼不能涖阼、周公相踐阼而治、注云、踐履也、代成王履阼階、攝王位、治天下也、古記云、踐阼之日、答、即位之日、賈逵注國語云、祚位也、跡云、踐祚之日、謂即位之日也、

禮記　八文王世子　成王幼不能涖阼、周公相踐阼而治、踐履也、代成王履阼階、攝王位、治天下也、

史記　三十四　燕召公世家四　成王既幼、周公攝政、當國踐祚、

國語　六　齊語　反胙于絳、賈侍中云、（中略）胙位也、（中略）昭謂、人君卽位、謂之踐胙、

文選　一　東都賦　往者王莽作逆、漢祚中缺、賈逵國語注曰、祚位也、

運歩色葉集　四　勢　踐祚、天子御卽位之義、

四　日本書紀　三　神武天皇　辛酉年春正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、是歲爲天皇元年、（中略）故古語稱之、曰於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原、而始馭天下之天皇、號曰神日本磐余彦火火出見天皇焉、

日本書紀　四　綏靖天皇　庚辰（元年）春正月壬申朔己卯（八日）、神渟名川耳尊卽天皇位、都葛城、是謂高丘宮、（中略）是年也太歲庚辰、

日本書紀　四　安寧天皇　（綏靖天皇三十三年）其年秋七月癸亥朔乙丑（三日）、太子卽天皇位、

日本書紀　四　懿德天皇　辛卯（元年）春二月己酉朔壬子（四日）、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲辛卯、

日本書紀　四　孝昭天皇　壬寅（元年）春正月丙戌朔甲午（九日）、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲丙寅、

日本書紀　四　孝安天皇　己丑（元年）春正月乙酉朔辛卯（七日）、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲己丑、

日本書紀　四　孝靈天皇　庚寅（元年）春正月壬辰朔癸卯（十二日）、太子卽天皇位、（中略）是年也太歲庚寅、

日本書紀　四　孝元天皇　辛未（元年）春正月辛未朔甲申（十四日）、太子卽天皇位、（中略）是年也太歲辛未、

日本書紀　四　開化天皇　癸酉（孝元天皇五十七年）冬十一月辛未朔壬午（十二日）、太子卽天皇位、

日本書紀　五　崇神天皇　甲申（元年）春正月壬午朔甲午（十三日）、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲甲申、

日本書紀　六　垂仁天皇　壬辰（元年）春正月丁巳（廿）朔戊寅（二日）、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲壬辰、

日本書紀　七　景行天皇　辛未（元年）秋七月己巳朔己卯（十一日）、太子卽皇位、因以改元、是年也太歲辛未、

日本書紀　七　成務天皇　辛未（元年）春正月甲申朔戊子（五日）、皇太子卽位、是年也太歲辛未、

仲哀天皇踐祚
應神天皇踐祚
仁德天皇踐祚
履中天皇踐祚
反正天皇踐祚
允恭天皇踐祚
安康天皇踐祚
雄略天皇踐祚

日本書紀　八　仲哀天皇　元年春正月庚寅朔庚子、(十一日)皇太子卽位、是年也太歲壬申、

日本書紀　十　應神天皇　元年春正月丁亥朔、皇太子卽位、是年也太歲庚寅、

日本書紀　十一　仁德天皇　元年春正月丁丑朔己卯、(三日)大鷦鷯尊卽天皇位、

日本書紀　十二　履中天皇　元年春二月壬午朔、皇太子卽位於磐余稚櫻宮、(中略)是年也太歲庚子、

日本書紀　十二　反正天皇　元年春正月丁丑朔戊寅、(二日)儲君卽天皇位、(中略)是年也太歲丙午、

日本書紀　十三　允恭天皇　元年冬十有二月、(中略)爰大中姬命仰歡、則謂群卿曰、皇子將聽群臣之請、今當上天皇璽符、於是群臣大喜、卽日捧天皇之璽符、再拜上焉、皇子曰、群卿共爲天下請寡人、寡人何敢遂辭、乃卽帝位、是年也太歲壬子、

日本書紀　十三　安康天皇　元年冬十有二月己巳朔、(允恭天皇四十二年)壬午、(十四日)穴穗皇子卽天皇位、

日本書紀　十四　雄略天皇　元年春正月己巳朔、(安康天皇三年)壬子朔甲子、(十三日)天皇命有司、設壇於泊瀨朝倉、卽天皇位、遂定宮焉、

清寧天皇踐祚
顯宗天皇踐祚
仁賢天皇踐祚
武烈天皇踐祚
繼體天皇踐祚

日本書紀　十五　清寧天皇　元年春正月戊戌朔壬子、(十五日)命有司、設壇場於磐余甕栗、陟天皇位、遂定宮焉、(中略)是年也太歲庚申、

日本書紀　十五　顯宗天皇　元年春正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下、陛下正統當奉鴻緒、爲郊廟主、承續祖無窮之烈、上當天心、下厭民望、而不肯踐祚、遂令金銀蕃國群僚遠近莫不失望、天命有屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章、在孺而勤、謙恭慈順、宜奉兄命、承統大業、制曰、可、乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮、卽天皇位、百官陪位者皆忻忻焉、(中略)是年太歲乙丑、

日本書紀　十五　仁賢天皇　元年春正月辛巳朔乙酉、(五日)皇太子於石上廣高宮卽天皇位、(中略)是歲也太歲戊辰、

日本書紀　十六　武烈天皇　十一年十二月、(仁賢天皇)(中略)於是太子命有司、設壇場於泊瀨列城、陟天皇位、遂定都焉、

日本書紀　十七　繼體天皇　元年二月辛卯朔甲午、(四日)大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符再拜、男大迹天皇謝曰、子民治國重事也、寡人不才、不足以稱、願請廻慮擇賢者、寡人不敢當、大伴大連伏地固請、男大迹天皇西向讓者再、南向讓者三、大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子(丁亥)

安閑天皇踐祚
宣化天皇踐祚
欽明天皇踐祚、敏達天皇踐祚
用明天皇踐祚

民治國最宜稱、臣等爲宗廟社稷計不敢忽、幸藉衆願、乞垂聽納、男大迹天皇曰、大臣大連將相諸臣咸推寡人、寡人敢不乖、乃受璽符、是日卽天皇位、（中略）是年也太歲丁亥、

日本書紀　十八　安閑天皇　二十五年春二月辛丑朔丁未、男大迹天皇立大兄爲天皇、卽日

（甲寅）元年春正月、遷都于大倭國勾金橋、因爲宮號、（中略）是年也太歲甲寅、

○安閑天皇踐祚に付きては、其の記載を缺くを以て明らかならず、されど元年甲寅を以て踐祚の年紀と爲すを妥當とすべし、〔第三卷四一二頁參照〕

日本書紀　十八　宣化天皇　二年十二月、勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國押盾尊、使卽天皇之位焉、

日本書紀　十九　欽明天皇　四年十二月庚辰朔甲申、天國排開廣庭皇子卽天皇位、

日本書紀　二十　敏達天皇　元年夏四月壬申朔甲戌、皇太子卽天皇位、（中略）是年也太歲壬辰、

日本書紀　二十一　用明天皇　十四年、九月甲寅朔戊午、天皇卽天皇位、宮於磐余、名曰池邊雙槻宮、

崇峻天皇踐祚
推古天皇踐祚
舒明天皇踐祚
皇極天皇踐祚
孝德天皇踐祚

日本書紀　二十一　崇峻天皇　二年八月癸卯朔甲辰、炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、

日本書紀　二十二　推古天皇　三十九歲當于泊瀨部天皇五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔己卯、皇后卽天皇位於豐浦宮、

日本書紀　二十三　舒明天皇　元年春正月癸卯朔丙午、大臣及群卿共以天皇之璽印、獻於田村皇子、則辭之曰、宗廟重事矣、寡人不賢、何敢當乎、群臣伏固請曰、大王先朝鍾愛、幽顯屬心、宜纂皇緒、光臨億兆、卽日卽天皇位、（中略）是年也太歲己丑、

日本書紀　二十四　皇極天皇　元年春正月丁巳朔辛未、皇后卽天皇位、（中略）是年也太歲壬寅、

日本書紀　二十五　孝德天皇　天豐財重日足姬天皇四年六月庚戌、（中略）天豐財重日足姬天皇授璽綬禪位、策曰、咨爾輕皇子云々、輕皇子再三固辭、（中略）由是輕皇子不得固辭、昇壇卽祚、于時大伴長德宇馬飼連帶金敭、立於壇右、犬上健部君帶金敭、立於壇左、百官臣連國造伴造百八十部羅列匝拜、

齊明天皇踐祚

天智天皇の稱制稱制の間は皇太子と稱したまふ

日本書紀　二十六齊明天皇　元年（乙卯）春正月壬申朔甲戌（三日）、皇祖母尊卽天皇位於飛鳥板蓋宮、
（中略）是年也太歲乙卯、

五

日本書紀　二十七天智天皇　天命開別天皇、（舒明）息長足日廣額天皇太子也、母曰天豐財重日足姬天皇、天豐財重日足姬天皇四年、讓位於天萬豐日天皇、（孝德）立天皇爲皇太子、天萬豐日天皇後五年十月崩、明年、皇祖母尊（齊明天皇）卽天皇位、七年（辛酉）七月丁巳（二十四日）崩、皇太子素服稱制、是月、蘇將軍與突厥王子契苾加力等、水陸二路、至于高麗城下、皇太子遷居于長津宮、稱聽水表之軍政、（中略）九月、皇太子御長津宮、以織冠授於百濟王子豐璋、復以多臣蔣敷之妹妻之焉、乃遣大山下狹井連檳榔、小山下秦造田來津、率軍五千餘衞送於本鄕、於是豐璋入國之時、福信迎來、稽首奉國朝政、皆悉委焉、

（丙寅）五年三月、皇太子親往於佐伯子麻呂連家、問其所患、慨歎元從之功、

（丁卯）六年春二月壬辰朔戊午（二十七日）、（中略）是日以皇孫大田皇女、葬於陵前之墓、高麗百濟新羅皆奉哀於御路、皇太子謂群臣曰、我奉皇太后天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、（中略）八月、皇太子幸倭京、

（戊辰）七年春正月丙戌朔戊子（三日）、皇太子卽天皇位、或本云、六年歲次丁卯三月卽位、

持統天皇の稱制

踐祚の後時を隔てゝ卽

皇室典範義解　第二章　踐祚卽位

第十條　天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

恭テ按スルニ、（中略）上古ハ踐祚卽チ卽位ニシテ兩事ニ非ス、令義解ニ、天皇卽位謂之踐祚、祚位也トアルハ是レナリ、此ノ時ヨリ踐祚ノ日ニ神器ヲ奉ラレタリ、蓋天子之位、一日不可曠、歷世ノ宣命ニ見ユ、故ニ繼體天皇群臣ノ迎フル所トナリ、未タ帝位ヲ踐ミタマハス、而シテ史臣既ニ天皇移樟葉宮ト書シタリ、藤原兼實玉海、然ルニ天智天皇重キヲ承ケテ仍皇太子ト稱ヘ、七年ノ後ニ卽位ノ禮ヲ行ヒタマヘリ、是レ踐祚ト卽位トノ兩樣ノ區別ヲ爲シタルノ初ナリ、其ノ後歷代踐祚ノ後、數年ニシテ卽位ノ禮ヲ行ハレタルコトアリシモ、神器ハ必踐祚ノ時ニ奉ラルヽコト、上古ト異ナルコトナシ、

日本書紀　三十持統天皇　朱鳥（天武天皇）元年九月戊戌朔丙午（九日）、天淳（天武）中原瀛眞人天皇崩、皇后臨朝稱制、

（庚寅）四年春正月戊寅朔、物部麻朝臣樹大盾、神祇伯中臣大嶋朝臣讀天神壽詞畢、忌部宿禰色夫知奉上神璽劒鏡於皇后、皇后卽天皇位、公卿百寮羅列、匝拜而拍手焉、

六

續日本紀　一文武天皇　八月（元年）甲子朔、受禪卽位、庚辰（十七日）詔曰、現御神止大八嶋國所知天皇

位の儀あり初例文武天皇受禪卽位

大命良麻止詔大命乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民諸聞食止詔、高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世中今至麻爾、氏天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾大八嶋國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、聞看來此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氏、此乃食國天下乎調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母隨神所思行佐止久詔天皇大命乎、諸聞食止詔、是以百官人等、四方食國乎治奉止任賜幣留國國宰等爾至麻爾、氏天皇朝庭敷賜行賜幣留國法乎、過犯事無久、明支淨支直支誠之心以而、御稱稱而緩怠事無久、務結而仕奉詔大命乎、諸聞食止詔、故如此之狀乎聞食悟而、款將仕奉人者、其仕奉禮牟良狀隨、品品讚賜上賜、治將賜物曾止詔天皇大命乎、諸聞食止詔、

元明天皇より光仁天皇に至る七代に譲祚の間と卽位との區別なし

元明天皇踐祚

七

續日本紀　四　元明天皇

秋七月壬子、（靈龜元年）（七月十七日）天皇卽位於大極殿、

元正天皇踐祚

續日本紀　七　元正天皇

九月庚辰、（靈龜元年）（二日）受禪卽位于大極殿、

聖武天皇踐祚

續日本紀　九　聖武天皇

二月甲午、（神龜元年）（四日）受禪卽位於大極殿、

孝謙天皇踐祚

續日本紀　十七　聖武天皇

秋七月甲午、（天平勝寶元年）（二月）（孝謙天皇）皇太子受禪卽位於大極殿、

淳仁天皇踐祚

續日本紀　二十一　淳仁天皇

天平寶字二年八月庚子朔、是日（淳仁天皇）皇太子受禪卽天皇位於大極

稱德天皇踐祚

光仁天皇踐祚

踐祚の後時を隔てゝ卽位の儀あり例桓武天皇受

殿、

續日本紀　二十五　淳仁天皇

天平寶字八年冬十月壬申、（九日）（稱德）高野天皇遣兵部卿和氣王、左兵衞督山村王、外衞大將百濟王敬福等、率兵數百圍中宮院、時帝遽而未及衣履、使者促之、數輩侍衞奔散、無人可從、僅與母家三兩人、步到圖書寮西北、立地山村王宣詔曰、掛末久畏朕我天先帝乃御命以天朕仁勅之久、天下方朕子伊末之仁授給、事乎之云方、王乎奴止成止毛奴乎王止云止毛、汝乃爲牟末仁、假令後仁帝止立天在人伊、立乃後仁汝米仁無禮之氏不從奈米久在牟人乎方、帝乃位仁置方許止不得、又君臣乃理仁從天、貞久淨岐心乎以天助奉侍牟之帝止在已方得止勅岐、可久在御命乎、朕又一二乃竪子等止侍天聞食天在、然今帝止之侍人乎、此年己呂見仁、其位仁毛不堪、是乃仁味不在、今聞仁仲麻呂止同心之天竊朕乎掃止謀家利、又竊六千乃兵乎發之等等乃比、又七人乃味之天關仁入牟止謀家利、精兵乎之押之天非壞亂天罰滅止云家利、故是以帝位方乎退賜天、親王乃位賜天、淡路國乃公止退賜止勅御命乎、聞食止宣、

續日本紀　三十一　光仁天皇

寶龜元年冬十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、

八

續日本紀　三十六　光仁天皇

天應元年夏四月辛卯、（三日）（中略）是日（桓武天皇）皇太子受禪卽位、壬辰、（四日）立皇弟早良親王爲皇太子、詔曰、天皇勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨

禪即位

法爾可有伎政止志弖、早良親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、(十一日)己亥、(中略)遣使於伊勢大神宮、告皇太子(桓武天皇)即位也、(十五日)癸卯、天皇御大極殿、詔曰、明神止大八洲所知天皇詔旨良麻止宣勅、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、掛畏現神坐倭根子天皇我皇、此天日嗣高座之業乎、掛畏近江大津乃宮爾御宇之天皇乃初賜比定賜部流法隨爾、被賜弖仕奉止仰賜比授賜閇婆、頂爾受賜利恐美受賜利懼、進母不知爾退母不知爾、恐美坐久止宣天皇勅、衆聞食宣、然皇坐弖、天下治賜君者、賢人乃能臣乎得弖之、天下乎婆平久安久治物爾在良之止奈母聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王始弖、王臣等乃相共奈比奉利、相扶奉牟事依弖之、此之仰賜比授賜夫食國天下之政者、平久安久仕奉倍之止奈母所念行、是以無諂欺之心、以忠明之誠、天皇朝廷乃立賜部流食國天下之政者、衆助仕奉止宣天皇勅、衆聞食宣、

平城天皇踐祚即位

日本後紀　十三　桓武天皇　大同元年三月辛巳、(十七日)(中略)有頃天皇崩於正寢、春秋七十、(平城天皇)皇太子哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衛中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、次璽幷劍櫃奉東宮、

日本後紀　十四　平城天皇　大同元年五月辛巳、(十八日)即位於大極殿、

嵯峨天皇受禪即位

日本後紀　十七　平城天皇　大同四年夏四月丙子朔、(中略)天皇自從去春寢膳不安、遂禪位於皇太弟、(嵯峨天皇)詔曰、現神等大八洲所知倭根子天皇我詔旨良末止勅御命乎、親王等、王等、臣等、百官乃人等、天下公民衆聞食止宣、朕躬劣弱弖洪業爾不耐己止乎、本自思畏利賜許止暫毛不息、加以朕躬元來風病爾苦都々身體不安志弖、經日累月弖、萬機缺懈奴、今所念久、此位波避天、一日片時毛御體欲養止奈毛所念須、故是以皇太弟止定賜流某親王爾天下政波授賜布、諸衆此狀乎悟、清眞心乎毛知、此皇子乎輔導伎、天下百姓乎可令撫育止勅天皇御命乎、衆聞食止宣、

村上天皇の頃より受禪と即位との別を生ず

日本紀略　嵯峨天皇　大同四年四月戊子、(十三日)受禪即位於大極殿、詔曰云々、

九

日本紀略　村上天皇　村上天皇

諱成明、醍醐天皇第十四之子也、母同朱雀院、(中略)天慶九年四月十三日癸酉、(二十日庚辰カ)受禪、御年廿一、廿八日即位、

即位部類記　(上文闕ク、天慶九年四月二十二日ノ條ナラン、)賀茂□告以齋內親王不替、案先例、天皇受禪之後、賀茂齋王若不替時、卜定伊勢齋(已)宮之次、同定件齋王事、令告其由、(中略)同三剋天皇御腰輿、出御建禮門、先是諸司裝束、天皇受禪之後、御此門前、被發件奉幣之例、在貞觀年、而彼年記、又不注裝束、

廿八日戊子、今日巳尅天皇卽位於大極殿、(中略)（天慶九年四月）

外記日記

天慶九年四月廿八日戊子、此日天皇卽位、春秋廿一矣、(中略)

九條殿御日記（師輔）

天慶九年四月廿八日戊子、天皇卽位、(中略)

天皇卽位李部記

天慶九年記云、四月廿八日戊子、今上卽位、

貞信公記抄　天慶九年四月廿日庚辰、有讓位宣命、事了、今上降殿拜舞、而辭讓表奉於天皇、令不許、今日雨儀也、

廿八日戊子、幸八省院卽位、

本朝法家文書目錄

一、式、(中略)

弘仁儀式一部十卷、(中略)

第四卽位儀　讓國—(中略)

卽位儀と讓國儀との別

貞觀儀式一部十卷、(中略)

第五(中略)讓國儀　天皇　卽位—(中略)

延喜儀式一部十卷、(中略)

第五卽位儀　讓國—

古語拾遺　逮于神武天皇東征之年、(中略)建都橿原經營帝宅、(中略)日臣命帥來目部、衞護宮門掌其開闔、儀速日命帥內物部、造備矛盾、其物旣備、天富命率諸齋部、捧持天璽鏡劍、奉安正殿、幷懸瓊玉、陳其幣物、殿祭祝詞、(其祝詞文在於別卷、)次祭宮門、(其祝詞亦在於別卷、)然後物部乃立矛盾、大伴來目建仗開門、令朝四方之國以觀天位之貴、

舊事本紀　(天皇本紀　七神武天皇)　辛酉爲元年、春正月庚辰朔、都橿原宮肇卽皇位、尊正妃媛蹈鞴五十鈴媛命、立爲皇后、則大三輪大神女也、宇摩志麻治命奉獻天瑞寶、乃竪神楯以齋、亦立今木、亦五十櫛刺繞於布都主劍大神、崇齋殿內藏于十寶、以侍近宿、因號足尼、其足尼之號從此而始矣、天富命率諸忌部、捧天璽鏡劍、奉安正殿、天種子命奏天神壽詞、卽神世古事類是也、宇摩志麻治命率內物部、乃竪矛楯嚴增威儀也、道臣命帥來目部、護衞宮門掌其開闔矣、竝令四方之國以觀天位之貴、亦俾率土之民以示朝廷之重者也、于時皇子大夫率

上代に於ける踐祚の儀禮

清寧天皇即位以前に神器を受けたまふ

推古天皇即位以前に神器を受けたまふ

群官臣連伴造國造等、元正朝賀禮拜也、凡厥即位賀正建都踐祚等事竝發此時矣、

日本書紀　三十　持統天皇　(庚寅)四年春正月戊寅朔、物部麿朝臣樹大盾、神祇伯中臣大嶋朝臣讀天神壽詞畢、忌部宿禰色夫知奉上神璽劍鏡於皇后、皇后即天皇位、公卿百寮羅列、匝拜而拍手焉、

令義解　二　神祇令　凡踐祚之日、謂天皇即位、謂之踐祚、祚位也、福也、中臣奏天神之壽詞、謂以神代之古事、爲萬壽之寶詞也、忌部上神璽之鏡劍、謂璽信也、猶云神明之徵信、此即以鏡劍稱璽、

二　日本書紀　十五　清寧天皇　(建略天皇)二十三年八月、大泊瀬天皇崩、(中略)冬十月己巳朔壬申(四日)、大伴室屋大連率臣連等奉璽於皇太子、

(庚申)元年春正月戊戌朔壬午(十五日)、命有司、設壇場於磐余甕栗、陟天皇位、

日本書紀　二十二　推古天皇　豐御食炊屋姬天皇、(欽明)天國排開廣庭天皇中女也、(用明)橘豐日天皇同母妹也、幼曰額田部皇女、姿色端麗、進止軌制、年十八歲立爲(敏達)渟中倉太珠敷天皇之皇后、三十四歲渟中倉太珠敷天皇崩、三十九歲當于(崇峻)泊瀨部天皇五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔己卯(八日)、皇后即天皇位於豐浦宮、

大嘗祭に於いて天神の壽詞を奏す

踐祚の儀に於いて神器を傳承す

三　儀式　四　踐祚大嘗祭儀下　辰日、辰二刻、(中略)親王已下五位以上左右相分、入自儀鸞門東西戸各就版、六位以下相續參入、立定、神祇官中臣捧賢木、(註略)入自同門東扉就版、跪奏天神之壽詞、群臣共跪、

北山抄　五　大嘗會事　辰日、卯剋、(中略)親王以下五位以上、入自儀鸞門各就版位、(註略)六位以下相續參入、(註略)立定、神祇官中臣捧賢木、(註略)入自同門東扉就版、跪奏天神之壽詞、群臣共跪、雨濕立奏、寬平雨儀、王卿立顯陽堂、五位以上立承歡堂、六位以下立兩堂東西面、中臣立顯陽堂北面云々、(中略)

台記別記　康治元年十一月十六日甲辰、知行、光房、來宿所云、(藤原忠通)攝政殿仰云、(悠紀節會)節會可被始也、(中略)祭主大中臣朝臣清親、(中略)賢木井壽詞文取副笏、昇龍尾道東階、經公卿列前着壽詞版、(祭主幷辨等可經公卿後、今經前可謂失歟、)跪、揖笏差賢木於地、披壽詞書讀之、(其音不高不微、聞堂上之程也、)中臣跪時公卿又起、中臣退出、

日本後紀　十三　桓武天皇　大同元年三月辛巳(十七日)、(中略)天皇崩於正寢、春秋七十、(平城天皇)皇太子哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衞中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、次壓幷劍櫝奉東宮、近衞將監從五位下紀朝臣繩麻呂、

從五位下多朝臣入鹿相副從之、

文德實錄　一　嘉祥三年三月己亥(二十一日)、仁明皇帝崩於清凉殿、于時皇太子(文德天皇)下殿、御宜陽殿東庭倚廬(休イ)、左右大臣率諸卿及少納言左右近衞少將等、獻天子神璽寶劍符節鈴印等、須臾鸞輦、移御東宮雅院、陣列之儀、一同行幸、但無警蹕、

三代實錄　一　清和天皇　天安二年八月己丑朔、廿七日乙卯、文德天皇崩於冷然院新成殿、從五位上守左近衞少將兼行美濃介良岑朝臣清風、從五位上守右近衞少將兼行主殿頭美濃權介紀朝臣全吉、各率將監將曹近衞等、陣於皇太子直曹、于時春宮帶刀舍人解陣退散、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、率從五位下守左近衞少將兼行備前權介坂上大宿禰當道、從五位上守右近衞少將兼行伊勢權介藤原朝臣有貞、將監已下、奉天子神璽寶劍節符鈴印等於皇太子直曹、

三代實錄　四十五光孝天皇　元慶八年二月四日乙未、太上天皇(陽成)還御二條院、遜皇帝位焉、于時天皇在東二條宮、親王公卿奉天子璽綬神鏡寶劍等、天皇再三辭讓、曾不肯受、二品行兵部卿本康親王起座跪奏言、歷數攸在、謳歌是歸、昔者漢文三讓雖高、猶當大橫之繇、遂應代邸之迎、伏願陛下在此樂推、幸聽於群臣矣、五日丙申、親王公卿引文武百官、奉迎天皇、卽日

後鳥羽天皇神器を承けずして踐祚したまふ

驚輿入御東宮、親王公卿扈從、

二三　玉葉　壽永二年八月六日戊戌、(中略)此日參院、以定能卿申入、以頭辨兼光被仰下云、立王事、所思食煩也、先可奉待主上(安德天皇)還御哉、將又且雖無劍璽、可奉立新主哉之由被行御卜之處、官寮共申可被奉待主上之由、而猶此事依所思食、重被問官寮、各數人(官寮二人)、申狀、彼是不同、但吉凶半分也、此上事、何樣可有沙汰哉、可計申者、(藤原兼實)申云、先次第沙汰、頗以依違歟、先有議定、人意不一決、偏可訪占卜之由、議奏之時、可有御卜也、而遮以被行御卜、今又被乖彼趣之條、太以無其謂、卜者不再三云々、而及度々之條、又以不可然、而於今者、偏可被用卜者、重隨良將吉神等之趣、可有斟酌歟、但愚案之所及、立王于今懈怠、愚心所傾思也、其故、先京華狼籍于今不止、是人主不御坐之令然也、(一)、次須被急征討之處、平氏等奉具主上及三神、已赴海西、不立主有征伐、於議有妨、(是二)、次我朝之習、不得劍璽踐祚、曾無例、而繼體天皇爲臣下被迎之時、如國史文書之踐祚、甲申、天皇移樟葉宮、辛卯、得璽符鏡劍卽位云々、往古雖無讓位卽位之分別、如今文者、卽位以前、已稱天皇、又謂踐祚、卽被移皇居、其後得劍璽卽位云々、然則准據尤可合之由所存也、(是三)、凡天子之位、一日不可曠、政務悉亂云々、于今遲々之條、萬事違亂之源也、早速可有沙汰、不可有異議者、左大臣同參候云々、非一所、兼光參上、小時

歸來云、所申可然、就中、爲征伐可奉立人主之條、事之肝心也、仍早可有立王之事云々者、愚案次第之沙汰、悉以違亂散々、凡不能左右々々（云々）、未曾有之事也、天下滅亡只此時也、可悲々々、

廿日壬子、此日有立皇事、高倉院第四宮、御年四歳、母故正三位修理大夫信隆卿女、（中略）先是若宮（後鳥羽天皇）於院御所、密々御着袴之後、實房卿結腰、卿渡御閑院、秉燭以後、殿上人衣冠前驅云々、公卿徘徊對南廣庇邊、此間、大刀契、鈴印等（共在大内）、被渡之、緣事所司供奉如例、其後經數刻、殆及二時許云々、子終主上出御、攝政着御前、以東對西面爲御座、補藏人、（先朝一萬、又仰公卿昇殿、勅授等皆如例、先攝政拜之後、公卿昇殿、拜又如例、左大臣已下納言等皆退出、家通卿爲上卿云々、是皆大將口狀也、子細見左大臣次第、續左、不得劍璽踐祚之例、希代之珍事也、

增鏡　（おどろのした）　御門はじまり給てより八十二代にあたりて、後鳥羽院と申おはしまし、（中略）壽永二年八月廿日、御とし四にてくらゐにつかせ給けり、內侍所神璽寶劍は、じやうゐの時かならずわたる事なれど、（安德）せんていつくしへいておはしにければ、こたみはじめて三種の神器なくて、めづらしきためしになりぬべし、

踐祚部類抄　後鳥羽院

壽永二年八月廿日壬子、踐祚、新主閑院、舊主西海、

踐祚儀不被渡三種靈寶、去月廿四日、先帝奉具神器等行幸西海、仍不御座也、之例、今度已始之歟、仍召諸道之勘文、

被糺諸卿之議定、降太上法皇詔書、被摸嘉承攝政例云云、攝政、左大臣新作進次第行其儀畢、

上卿左大臣藤原朝臣經宗公、

奮固今度令外記傳仰六府、次固關可付國司之間、被仰辨云云、

劍璽使、紛失之間不及沙汰、劍璽被渡之儀無之、御衣御笏等无沙汰、其後攝政諸卿列立有拜舞、勅授昇殿相混慶拜也、

一四　古語拾遺

至于磯城瑞（崇神天皇）垣朝、漸畏神威同殿不安、故更令齋部氏擧石凝姥神裔、天目一箇神裔二氏、更鑄鏡造劍以爲護身御璽、是今踐祚之日所獻神璽鏡劍也、仍就於倭笠縫邑、殊立磯城神籬、奉遷天照大神及草薙劍、令皇女豐鍬入姬命奉齋焉、

日本書紀　繼體天皇　十七

元年（丁亥）二月辛卯朔甲午（四日）、大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符再拜、男大迹天皇謝曰、子民治國重事也、寡人不才、不足以稱、願請廻慮擇賢者、寡人不敢當、大伴大連伏地固請、男大迹天皇西向讓者三、南向讓者再、大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子民治國、最宜稱、臣等爲宗廟社稷計不敢忽、幸藉衆願、乞垂聽納、男大迹天皇曰、大臣大連、將相諸臣咸推寡人、寡人敢不乖、乃受璽符、是日卽天皇位、

上代に在りては鏡と劍とを奉上するを例とす

神鏡を別殿に奉安す

劍璽渡御の儀

日本書紀　十八宣化天皇　二年十二月、（安閑天皇）勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國押盾尊、使卽天皇之位焉、

一古今著聞集　一神祇　內侍所は、むかしは清涼殿にさだめをかれまいらせられけるを、をのづからぶれいの事もあらば、そのおそれ有べしとて、溫明殿にうつされにけり、此事いづれの御時のことにかおぼつかなし、かの殿、清涼殿よりさがりたる便なしとて、內侍所にさだめられたる方をば、板敷をたかくしきあげられたりけるとぞ、

撰集抄　九內侍所御事　內侍所をは、御誓の御詞に任て、主と同殿におはしましけり、崇神天皇御位の時、恐をなし奉らせ給て、別の殿に移奉にけり、宇多帝の御時より、溫明殿にいらせ給へりけり、

儀式　五譲國儀　今帝下自南階、去階一許丈、拜舞訖步行歸列、內侍持節劍追從、所司供奉御輿、皇帝辭而不駕、衞陣警蹕、少納言一人率大舍人等、持傳國璽櫃追從、次少納言一人率大舍人闈司等、持鈴印鑰等進於今上御所、次近衞少將率近衞等、持供御雜器進同所、訖今上御春宮坊、諸衞警蹕、侍衞如常、

北山抄　五譲位事　當日早旦、（中略）皇太子御休所、近仗陣階下、天皇御南殿、內侍召人、大臣取宣命文參上、付內侍奏之、（中略）皇太子起座而立、當座前、宣命使就版、宣制二段、群臣再拜舞踏、（註略）宣命使復本列、群臣退出、中務取版、无御拜者不可取之、闈司還入、近衞開門、近仗引退、今上降從南階、去階一許丈、北向當階中央拜舞、畢東行、還御休所、所司預敷緣道、此間閉敷政門之由、見吏部王記、天慶九年、內侍二人典侍掌侍各一人、持神璽寶劍候前後、今上降南階之間、內侍降東階、待候還御、儀式云、少納言一人率大舍人等、持傳國璽櫃追從、次少納言一人率大舍人闈司等、持鈴印鑰等進於今上御所云々、

江次第　十四御譲位　踐祚上　天皇御南殿（中略）

內侍二人執神璽寶劍候、（中略）

新帝下拜舞、（註略）內侍等以神璽等相從新帝、就御在所奉置、（中略）少納言二人、大舍人二人、持傳國璽櫃追從、少納言、大舍人、闈司持鈴印進今上御在所、

代始和抄　御譲位事　御譲位の時は、警固固關、節會、宣制、劍璽渡御、新主の御所の儀式等あり、是は毎度の事也、（中略）次に劍璽渡御の事あり、舊主の御所より三種の神器を新帝へ渡さるゝ義なり、掃部寮路の間に筵道をしきて、近衞次將兩人劍璽を持て筵道のうへをあゆむ、關白已下皆扈從す、行幸のことし、近衞の次將階をのぼりて內侍に是を授く、內侍二人をの〳〵劍璽をとりて夜御殿に安置す、

劍璽渡御の例

西宮記　十二侯爵前田利爲氏所藏　寛平御記（裏書）　仁和三年八月廿六日丁卯、巳二刻（光孝）先帝登霞、卽尚侍藤原淑子賜璽筥及御劍、請太政大臣申其由、持進於麗景殿、少納言、左近少將等遣賣鐘（鈴）印、公卿候常寧殿南廊、典侍給（給カ）子鐘（鈴）印奉御座邊、卽公卿侍務固關、事訖太政大臣率（公卿カ）万事云々、

扶桑略記　二十五裡書　朱雀天皇　延長八年九月廿二日壬午、有讓位（醍醐天皇）事、左大臣貞信公在陣座、右大臣定方起座爲內辨、中納言恆佐爲宣命使、依御藥急、俄有此事、人々拭淚、宣制後、大臣已下退下、閇諸門、掌侍藤灌子、同明子等參麗景殿、贈璽綬劍笏幷服御物等、爲忌方角、自常寧殿先還御此殿、參宣耀殿、奉授新帝（朱雀）、爲避方忌、先御此殿、亥時事了、新帝自宣耀殿遷御弘徽殿、

山槐記　治承四年三月九日辛酉、（中略）延長八年、朱雀院受禪日、綾綺殿爲舊（醍醐）主御在所、宣耀殿爲新帝御所、內侍持參劍璽等於宣耀殿、件年李部王記云、右少辨公忠、傳左大臣奏曰、宣耀殿迫窄不足備所々、將遷御在所弘徽殿、上允許之云々、亥二剋今上、皇后遷弘徽殿、先天子遷御於常寧殿、不鋪緣道、右兵衞佐藤原朝臣師輔抱御、左兵衞佐藤原朝臣敦忠持御衣後、左大臣及大納言仲平卿

在後陣、女藏人次之、殿侍下（臣カ）亦次之、左權中將藤原伊衡朝臣、右權中將藤原實賴朝臣秉燭前行、內侍二人持劍璽在御前者、遷御他舍儀如此、爲見先跡聊注之、

權記　寛弘八年六月十三日乙卯、（一條天皇）御讓位也、（中略）太子（三條天皇）退下自南階、去階一許丈拜舞、太子退下之間、典侍一人、掌侍一人、執御劍璽筥、出自母屋簾中、下西階、候軒廊、拜舞訖、御々休所之時、供奉前後如常、訖退入西軒廊、所司鋪莚道布單等、經右近陣西廊東簀到休廬、

小右記　長和五年正月廿九日甲戌、（中略）今日有讓（三條天皇）國之事、其儀見新式、（中略）藪立陣後、內大臣已下列左仗前、相待寶劍神璽、次第行列、前後陣、及傳國璽鈴印漏剋等如指圖、不可違（違）監之事、可被戒仰之由、被示內大臣、々々々仰外記、左大臣、余、（藤原實資）左大將參上殿上、左大臣進居御前簀子敷、余及左大將居年中行事御障子下、大臣召左中將資平、舊主頭着平絹下襲、右中將雅通相共參上、執寶劍璽筥等、出自母屋御几帳中、資平先進受執寶劍、次雅通執璽筥、出侍所、左大臣、左右大將相副、以紫綾覆寶劍幷璽御筥、件覆儲置殿上、覆之、兩次將帶壺胡籙、不持弓、弓賜隨身、次將等持之、歷南殿前、左大臣、左右大將相副左右東行、左右近衞陣列行如行幸、內大臣諸卿次第前行、從東門至新帝宮南門、所司敷長莚於路中、又通路立幔、

出東門、經陽明門大路、入自上東門院南門、外衞留門、外諸衞左右相分供奉、少納言率左右

近衞將監各一人及大舍人等、令持太刀契櫃、（左大臣仰辨宮、率將監等、就内侍所令請出、内侍臨檻、少納言一人率大舍闈（人脫カ）司等、取鈴印鎰等櫃追從、陰陽寮取漏剋具、内竪持時簡杭等從之、左右近陣留巽橋南頭、諸卿列立東對前、左大臣、左右大將相副寶劍璽筥等、渡寢殿前、（母后御在所、）就西對南階、（左大臣云、昇自東階如何、余答云、用南階可宜、）兩頭先昇、次左大臣、次左右大將、内侍二人進出□取寶劍璽筥等、左右將監相副傳國大刀啓櫃（契）、□掃部女官、々々昇之、納南池南殿、（號書殿、）鈴印鎰等櫃安東廊、左大臣、左右大將度南庭、到東對前、内大臣已下列立、左大臣着陣座、（以東對南庇爲陣座、）諸卿同着有□、

三長記　建久九年正月十一日己酉、今日有御讓位（後鳥羽天皇）事、午上參内、（註略）于時御大炊御門殿、（大炊御門北、富小路西、富小路（讀字アラン）南、前齋院式子御所也、而以閑院殿可爲新帝皇居、仍暫被借用此御所也、）（中略）皇子諱爲仁、（今上第一宮、母儀尊勝寺執行法印能圓女、）彼御門大納言爲養女、以今日渡御殿下御所、及晩陰渡御于閑院殿、（中略）次改南殿撤節會御裝束、爲御殿通用、南庇懸御簾下之、敷畫御座如例、御座當間一間上御簾、左右擧燈、自南階下至東門敷筵道、殿下令參畫御座給、次掌侍二人（加賀内侍、讃岐内侍、）取璽劍、（各有紫緒、内藏寮獻之、）出自夜御殿戶立御戶、立御帳左右柱下、（後日由、土御門大納言示之云々、内侍可居、次將乍立可取之云々、内侍不可居歟、可尋、）次藏人頭左近衞中將公經朝臣、左近衞中將成定朝臣入自當間、（公經朝臣雖爲位階下、爲藏人頭取璽云々、）下自南階經筵道、出自中門、（中門外也、）幷東門、次將左右相分相從、（他次將不入中門、先是公卿先行、參仕公卿皆悉御儲候中門外、可供奉、然而或前行、右府被參會歟、）路頭行列、先左衞門、次左兵衞、次上達部、（爲先下萬、雜色等取松明、藤大納言前行如常、次右近衞次將相分供奉、次攝政殿、（前駈取松明、御隨身府生以下褐垂纏壺胡籙、）次太刀、次契、次鈴印等、次少納言監物、鈴鎰等、（左右相並、）次漏刻器、次時簡杭、（相並、）次陰陽寮、次版位、次内豎奏時、次辛櫃等、次右兵衞、次右衞門、次辨、（左中辨、）次外記、次史、（註略）其路大炊御門大路西行至東洞院、南折至二條大路西行、南折至西洞院、入自東門、（左衞門陣也、）

宮槐記　承元四年十一月廿五日己酉、今日御讓位（土御門天皇）也、（順德天皇）皇太弟十四歲、可被渡璽劍於皇舊主十六歲、

太弟御在所云云、節會儀如常、宣命使中納言雅親、其體如獼猴云々、給宣命間無揖云々、總不足言云々、大臣以下頗被早練云々、夜陰之上、公事重疊尤可然、劍璽出給寢殿、先自南階前敷筵道、（此筵道及新帝御在所、路間卷取又敷也、長和初敷之、實資公之議也、劍璽渡他所儀耶、）□筵道進云々、里内無階下、力不及歟、但進候堂上、相從降階先例歟、雅行持璽先行、宗經持劍有後、每辻引幔、以同幔相連歟云々、大藏省下部等持手引張之云々、此外劍璽邊如几帳垂之、只覆紫絹各持之許也、至于新帝御在所、公卿列南庭、左右大將留階下持劍璽、將昇南階立簀子云々、關白同被昇南階、内侍進出取之、頃之主上出御晝御座、（御引直衣、）關白候簀子召藏人、坊一藏、右衞門尉長宗進居砌下、奉仰後去砌五六尺拜舞、博陸帶劍降中門奏慶、次公卿

奏昇殿慶、衞府公卿左大將外皆拜許不舞踏云々、

中務內侍日記　(弘安十年十月)二十一日、節會はてぬれば、劍璽入らせおはします、たゞ御幸の儀式のやうなり、筵道敷きて、御劍は左近中將むねさだ、璽は右近中將信基、先に公卿供奉、左右大將公卿(鷹司冬忠、久我通基)のすけは、劍璽の左右の御後に供奉す、左右衞門つかさ中門の外に留りて列に立ちたり、劍璽は端の間より入御なれば、左右大將さうこんの木の下に立つ、母屋の御簾すべらかして、御帳の前に御引直衣にて渡らせ給ふ、勾當左より御劍をうけとる、次に璽を渡す、右より少將內侍璽をうけとるありさま、ゆ〳〵しくめでたし、とかく式久しくて、あくるほどにぞ內侍所は入らせ給ふ、

資朝卿記　文保二年二月廿六日戊午、今日天皇(花園)御讓位也、予秉燭之間參土御門殿、東帶、節會事、藏人兵部少輔成輔奉行、於事遲引之間及半更、雨又頻降、仍劍璽渡御、雨儀可爲如何樣哉旨、俄及仗議云々、此間事不能口入之間、於便宜所暫休息、雖無先規、可爲雨儀之由治定、供奉近衞司等取唐笠交候云々、於御路天曙、內裏儀了、人々歸參、

滿濟准后日記　正長元年七月廿八日、今日新主(後花園天皇)御踐祚、自仙洞渡御三條前右府(公光)亭、御車、(八葉)供奉少々、非殊御行粧云々、未宮御儀也、御裝束御半尻云々、次劍璽渡御、自內裏西

四足門御出、次將以下供奉、執柄等公卿殿上數輩令供奉云々、御路次樣、自四脚御出南行、土御門東行、高倉南行テ、奉渡踐祚御所云々、次內侍所、其儀如前々、但執柄無供奉之儀云々、供奉卿相雲客悉各別云々、次新主令着御裝束、御引直云々、踐祚之儀在之、攝政先慶ヲ奏申サル、云々、次諸卿一列、又拜在之云々、無風雨難、每事無爲珍重、內裏四足ヨリ踐祚御所マテ管領警固云々、仙洞門武衞警固云々、室町(足利義教)殿樣於土御門高倉御見物云々、

後法興院記　明應九年十月廿五日丙午、今夜踐祚(後柏原天皇)云々、後日可尋記之、定每事爲新儀歟、武家可有見物云々、

廿八日己酉、午刻參武家、踐祚御禮也、花山院(政長)前左府外無人、直垂衆三四人歟、有對面、折烏帽子也、

頭辨守光(廣橋)朝臣來、踐祚散狀持來、令對面、踐祚儀委細相尋之、關白(一條冬良)拜任後未拜賀也、當日不及拜賀、參上御前圓座、直被仰關白如元之由、降庭上被拜舞云々、次召六位諸卿、昇殿帶劍上敷筵道、奉渡新主之御方、關白以下供奉云々、

弘誓院記　慶長十六年三月廿七日丁卯、

讓位政仁親王、(後陽成上皇)院第二皇子、聖算御十六才、去年十二月廿三日、御元服、

新帝(後水尾)受禪、新上東門院御所爲若宮御殿、劍璽渡御有之、次行幸、奉行職事藏人頭中將實有朝臣、

劍璽渡御、御劍右少將重定朝臣、璽左中將季繼朝臣取之、

百一錄　貞享四年三月廿一日、辰刻(靈元天皇)御讓位儀初、上卿左大臣(近衞基凞)、奉行頭中將基勝(綱)朝臣、未下刻劍璽被渡新帝(東山)、出四足經南門前至日之門前、着中宮御殿、于時中宮御殿爲新帝居、劍璽渡御奉行宣定(烏丸)勤之、劍雅元(白川)持之、璽基輔(持明院)持之、實久(正親町三條)副之扶持、但紫之帕掛之、武官老懸、卷纓、弓箭帶之、尤帶劍、大官勅授以後帶劍、有拜舞、先使布衣持大刀、供奉輩少々任覺悟記之、次第不同、左右大將、左大臣(九條輔實)、右大臣(三條實通)、內大臣(鷹司兼熙)、關白(近衞家凞)、(二條冬經)醍醐大納言(冬基)、萬里小路(通誠)、菊亭(淳房)、三大納言(伊季)、日野中納言(資茂)、正親町中納言(公通)、姉小路(實松)、裏松(意光)相公、東坊城(長詮)相公、油小路(隆貞)相公、時香(交野)、季緣(河鰭)、雅豐(飛鳥井)、隆安(四條)、博意(東久世)、韶光(勘解由小路)、石井少納言(行豐)、鈴之役勤之、員從(萩原)、爲經(下冷泉)、史生官掌六府地下人等供奉、路中設筵道、劍璽役人、并關白之行云々、事畢後、新主與院皇居爲御交代云々、

御讓位禁祕抄　文化十四年三月廿二日、子刻公卿殿上人以下、地下官人に至までの行幸に供奉、劍璽渡御、供奉院司等に參役候輩、前後をあらそひ令參內給ふ、先大臣の方々、左右番長、近衞雜色等召し具給ひ、轅に乘り給ひ御出門、路次松明を照らし靜行す、先

陽明門代置石の外にて御下車、門代置石之內南扉代より入給ふ、右番長前行、左番長御裾に相從ひ、前駈近衞等北扉を入、夫より建春門入給ひ、直に諸大夫間より御昇殿御休息あり、諸卿殿上人以下、具近衞雜色等、御步行にて令參內給了、寅刻過云々、未刻頃劍璽渡御之御催しに付、車寄より御下殿、如前中門內東上北面御列立、自下臈進出前行、(應司政通)右府公中門被爲出、次左府(近衞基前)、次劍璽渡御、唐門外被爲出、路頭御行列奧に有、御靜步あり、先唐門前地へ建春門御入、尤陽明門より置路等御通行、仙院廣御所前より禁中清涼殿迄路頭不殘道なり、且筵道は劍璽計御通行なり、供奉司々筵道左の方行なり、劍璽舊主(光格天皇)より新主(仁孝天皇)江御授あるなり、(中略)右劍璽禁中江渡御、新主授之給ひて、夫より吉書御覽之式始り、子の刻に終り、公卿殿上人又々仙洞御所江御步儀あり、(中略)寅刻頃事終り、みな〳〵退出いたされけり、

一六　日本後紀　十三　桓武天皇　大同元年三月辛巳(十七日)(中略)天皇崩於正殿、春秋七十、(平城天皇)皇太子哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衞中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、次璽幷劍橫奉東宮、近衞將監從五位下紀朝臣繩麻呂、從五位下多朝臣入鹿相副從之、

文德實錄　一　嘉祥三年三月己亥(廿一日)、仁明皇帝崩於清凉殿、于時皇太子(文德天皇)下殿、御宜陽殿

先帝崩御の卽日踐祚したまへる例　平城天皇踐祚

文德天皇踐祚

清和天皇踐祚

宇多天皇踐祚

東庭倚(休イ)廬、左右大臣率諸卿及少納言、左右近衞少將等、獻天子神璽寶劍符節鈴印等、須臾駕鑾車、移御東宮雅院、陣列之儀、一同行幸、但無警蹕、

三代實錄　清和天皇　天安二年八月己丑朔、廿七日乙卯、文德天皇崩於冷然院新成殿、從五位上守左近衞少將兼行美濃介良岑朝臣清風、從五位上守右近衞少將兼行主殿頭美濃權介紀朝臣全吉、各率將監將曹近衞等、陣於皇太子直曹、于時春宮帶刀舍人解陣退散、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、率從五位下守左近衞少將兼行備前權介、坂上大宿禰當道、從五位上守右近衞少將兼行伊勢權介藤原朝臣有貞、將監已下、奉天子神璽寶劍節符鈴印等於皇太子直曹、從五位上行少納言兼侍從橘朝臣清蔭、左衞門佐從五位上兼行少納言侍從藤原朝臣基經、從四位上行中務大輔清原眞人瀧雄、幷主鈴等相從焉、太政大臣從一位藤原朝臣良房、左大臣從二位源朝臣信、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相、侍於皇太子直曹、

日本紀略　宇多天皇　仁和三年八月廿六日丁卯、立爲(宇多天皇)皇太子、卽日受天祚、年廿一、今日巳二刻、光孝天皇晏駕于仁壽殿、仰警固三關諸衞等、(藤原基經)太政大臣率諸公卿、令賫天子神璽寶劍等、奉皇太子直曹、

冷泉天皇踐祚

後朱雀天皇踐祚

後三條天皇踐祚

鳥羽天皇踐祚

日本紀略　冷泉天皇　康保四年五月廿五日癸丑巳時天(村上)皇崩於清凉殿、年四十、子息奉璽劍於皇(冷泉天皇)太子直曹、襲芳舍、或云、凝華舍、固三關警諸衞、

日本紀略　後一條天皇　長元九年四月十七日乙丑、戌刻天皇落飾、崩于清凉殿、春秋廿九、在位廿年、去三月以來、御體不豫、子刻諸卿近衞以璽劍奉皇(後朱雀天皇)太子於昭陽舍、依有遺詔、暫祕喪事、以如在之儀、今日讓於位皇(後朱雀天皇)太弟、大床子、並小御厨子、時簡、殿上御倚子等、運新帝御所、

扶桑略記　二十九　後冷泉天皇　治曆四年戊申四月十九日庚申、寅刻天皇於高陽院中殿崩、年卅四矣、

扶桑略記　二十九　後三條天皇　後朱雀院第二皇子、母三條院之女、皇太后禎子也、治曆四年戊申四月十九日庚申、踐祚、生年廿五、戊剋關白左(藤原敎通)大臣以下公卿侍臣等、歷左衞門陣步行、參儲皇御所閑院第、神璽寶劍等賫左近權中將源信宗、右近少將藤原師兼獻之、

百鍊抄　五　堀河院　嘉承二年七月十九日、天皇崩于堀川院、廿九、卽渡劍璽皇(鳥羽天皇)太子、

百鍊抄　五　鳥羽院　鳥羽天皇、諱宗仁、十六年、

堀川院第一皇子、母女御茨子、(中略)嘉承二年七月十九日、踐祚、五、

先帝讓位の即日受禪したまへる例
孝德天皇受禪
文武天皇受禪
元正天皇受禪
聖武天皇受禪
孝謙天皇受禪
淳仁天皇受禪
桓武天皇受禪
嵯峨天皇受禪

一七　日本書紀　二十五　孝德天皇

天皇授璽綬禪位、策曰、咨、爾輕皇子云々、（中略）由是輕皇子不得固辭、昇壇卽祚、

續日本紀　一　文武天皇

高天原廣野姫天皇十一年、（中略）八月甲子朔、受禪卽位、

續日本紀　七　元正天皇

九月庚辰、受禪卽位于大極殿、

續日本紀　九　聖武天皇

二月甲午、受禪卽位於大極殿、

續日本紀　十七　孝謙天皇

天平勝寶元年秋七月甲午、皇太子受禪卽位於大極殿、

續日本紀　二十一　淳仁天皇

天平寶字二年八月庚子朔、高野天皇禪位於皇太子、（中略）是日皇太子受禪卽位、

續日本紀　三十六　光仁天皇

天應元年夏四月辛卯、詔云、（中略）天皇自從去春寢膳不安、遂禪

日本後紀　十七　平城天皇

大同四年夏四月丙子朔、（中略）天皇不許、丁丑、天皇避御於東宮、上未敢

日本紀略　淳和天皇

弘仁十四年四月庚子、受讓爲天子、

續日本後紀　一　仁明天皇

天長十年春二月戊午朔乙酉、皇帝於淳和院讓位于皇太

三代實錄　三十　陽成天皇

貞觀十八年十一月廿九日壬寅、受讓爲帝、時年九歲、是日出自

三代實錄　四十五　光孝天皇

元慶八年二月四日乙未、太上天皇還御二條院、遙皇帝位焉、于

淳和天皇受禪
仁明天皇受禪
陽成天皇受禪
光孝天皇受禪

有也、但以君唱臣和、上下之分、綸詔忽降、敢不對揚、苟欲遂志、還懼稽命、臣冀咨詢公卿、擁攝萬機之務、穆卜有效、當待翌日之寮、然後臨學齒貴、□道終年、在臣至願、實爲欣幸、無任悚戰之至、謹重詣闕奉表以聞、詔不許、天皇遂傳位、

醍醐天皇受禪

日本紀略　醍醐天皇　寬平九年七月三日丙子、卯二刻於清凉殿加元服、年十三、午三刻太上皇（宇多）讓天祚于紫宸殿、

朱雀天皇受禪

延長八年九月廿二日壬午、天皇逃位、讓於皇太子寬明親王、（中略）內侍執劍璽參宣耀殿、先帝（醍醐）御春秋卅六、今上（朱雀）八、

村上天皇受禪

日本紀略　朱雀天皇　天慶九年四月廿日庚辰、天皇逃位於皇太弟成明親王、詔止太上天皇號、還御綾綺殿、年二十四、今上廿一、新帝（村上）上表再謝推讓、勅不許、

圓融天皇受禪

日本紀略　村上天皇　天慶九年四月十三日（廿日）癸酉（庚辰）、受禪、御年廿一、

日本紀略　圓融天皇　安和二年八月十三日戊子、冷泉院天皇逃位讓於天皇、于時新帝（圓融）年十一、新主於襲芳舍受禪、（中略）其時令賣劍璽於內侍參凝華舍、先帝遷御弘徽殿、天皇上表謝之、不許、

花山天皇受禪

日本紀略　花山天皇　永觀二年八月廿七日、先皇（圓融）讓位於今帝（花山）、先帝廿六、今帝十七、（中略）先皇自堀河院、今帝自閑院第移堀河院受禪、卽日入新造內裏、行幸儀也、

一條天皇受禪

日本紀略　一條天皇　寬和二年六月廿三日庚申、花山天皇偸出禁中、奉劍璽於新皇（一條）、年七、外祖右大臣（藤原兼家）參入、令固禁內警備、翌日行先帝讓位之禮、

三條天皇受禪

日本紀略　三條天皇　寬弘八年六月十三日乙卯、一條院天皇逃位於新皇（三條）、春秋三十二、（中略）新皇上表謝之、勅不許、

後一條天皇受禪

日本紀略　後一條天皇　長和五年正月廿九日甲戌、未尅三條院天皇逃位讓皇太子（後一條天皇）、于時皇太子春秋九歲、（中略）宣制畢、大臣以下諸衞等奉劍璽等、

後冷泉天皇受禪

扶桑略記　二十九　後冷泉天皇　後冷泉天皇、治廿四年、（註略）

後朱雀天皇太子、（中略）寬德二年乙酉正月十六日癸酉、受禪、年廿一歲、

後朱雀天皇　二十八　後朱雀天皇　寬德二年乙酉正月十六日癸酉、天皇讓位於皇太子親仁親王、

白河天皇受禪

扶桑略記　二十九　後三條天皇　延久四年壬子十二月八日壬午、戊時天皇春秋三十九、讓位於皇太子貞仁親王、

堀河天皇受禪

扶桑略記　三十　白河天皇　六條天皇、治十四年、（中略）

後三條天皇太子、（中略）延久四年壬子十二月八日壬午、踐祚、年二十歲、

扶桑略記　三十　堀河天皇　今上皇帝、七十四代、諱善仁、（註略）

應德三年丙寅十一月廿六日庚辰、天皇讓位於第二皇子善仁親王、號太上皇、春秋三十四、

崇德天皇受禪

近衞天皇受禪

二條天皇受禪

六條天皇受禪

六條天皇第二子、(中略)應德三年丙寅十一月廿六日庚辰、亥時踐祚、八歲、(中略)亥時神璽寶劍受取、

百錬抄 五 鳥羽院　保安四年正月廿八日、天皇讓位於第一親王顯仁、五、

百錬抄 六 崇德院　崇德天皇、諱顯仁、十八年、

鳥羽院第一皇子、(中略)保安四年正月廿八日、受禪、五歲、

永治元年十二月七日、天皇讓位於皇太弟、(近衞天皇)于時土御門殿、

百錬抄 七 近衞院　近衞天皇、諱體仁、十四年、

鳥羽院第六皇子、(中略)永治元年十二月七日、受禪、

百錬抄 七 後白河院　保元三年八月十一日、讓位於皇太子、(二條天皇)

百錬抄 七 二條院　二條天皇、諱守仁、七年、

後白川院第一皇子、(中略)保元三年八月十一日、受禪、十六、

永萬元年六月廿五日、讓位於第二親王順仁、二歲、

百錬抄 七 六條院　六條天皇、諱順仁、三年、

二條院第二皇子、(中略)永萬元年六月廿五日、受禪、

高倉天皇受禪

安德天皇受禪

土御門天皇受禪

順德天皇受禪

仁安三年二月十九日、讓位於皇太子、(高倉天皇)東宮行啓閑院、

百錬抄 八 高倉院　高倉天皇、諱憲仁、十二年、

後白河院第三皇子、(中略)仁安三年二月十九日、受禪、八歲、

治承四年二月廿一日、天皇讓位於皇太子、被渡劍璽於新帝(安德)御在所、五條南、東洞院西、

百錬抄 九 安德天皇　安德天皇、諱言仁、三年、

高倉院第一皇子、(中略)治承四年二月廿一日、受禪、三、

百錬抄 十 後鳥羽院　建久九年正月十一日己酉、讓位於第一皇子、春秋四歲、御名爲仁、無親王宣旨立坊事、先是渡御閑院、戌時被渡劍璽、關白以下步儀、警固固關如常、(中略)璽劍渡御之間、見物車濟々焉、無先規事歟、

百錬抄 十一 土御門院　土御門院、諱爲仁、十二年、

後鳥羽院第一皇子、(中略)建久九年正月十一日、受禪、閑院、四歲、

承元四年十一月廿五日、有御讓位事、

百錬抄 十二 順德院　佐渡院、諱守成、十一年、

後鳥羽院第二皇子、(中略)承元四年十一月廿五日、受禪、

仲恭天皇受禪　後堀河天皇受禪　四條天皇受禪　後深草天皇受禪　龜山天皇受禪

承久三年四月廿日甲戌、今日有御讓位事、申刻(源通光)內大臣以下參入炊殿、大皇太子(仲恭天皇)懷成御閑院、被渡劍璽、新攝政(藤原道家)已下諸卿相從之、

七月八日庚寅、今日(中略)主上(仲恭天皇)密々渡御九條殿云々、九日辛卯、持明院入道宮(後堀河天皇)御子御年十歲、有御踐祚事、

百錬抄　十三　後堀河院　後堀河天皇、諱仁、茂十一年、

高倉院御孫、後高倉院御子、(中略)承久三年七月九日、踐祚、

貞永元年十月四日、有讓位事、依彗星之變爲攘也、十月之例無先規歟、今度始也、上皇猶御禁裏、

百錬抄　十四　四條院　四條院、諱秀仁、十一年、

後堀河院第一皇子、(中略)貞永元年十月四日、於閑院受禪、二歲、

百錬抄　十五　後嵯峨院　寬元四年正月廿九日己未、有御讓位事、東宮(後深草天皇)御歲四、

百錬抄　十六　後深草院　正元元年十一月十七日乙酉、東宮(龜山天皇)行啓冷泉殿、來廿六日可有御讓位之故也、廿六日甲午、御讓位也、右大臣已下參入之、

一代要記　壬　龜山天皇　龜山天皇(第八十九)、(註略)

諱恆仁、後嵯峨帝三子、(中略)正元元年十一月二十六日甲午、受禪富小路第、壓劍等從萬里小路殿被渡之、

後宇多天皇受禪　伏見天皇受禪　後伏見天皇受禪

文永代始公事抄　文永十一年正月廿六日甲辰、天皇(龜山)讓位於皇太子(後宇多天皇)、諱世仁、春秋八歲、

一代要記　壬　後宇多天皇　今上(第九十)皇帝、後宇多、(註略)

諱世仁、龜山第一子、(中略)文永十一年甲戌正月二十六日、受禪于高倉里、年八歲、壓劍等自押小路殿被渡之、

伏見院御記　讓位　弘安十年十月廿一日戊寅、今日讓位(後宇多天皇)也、

新抄　五　弘安十年十月廿一日戊寅、今日讓位(伏見天皇)也、春宮(九條忠教)(近衞家基)(鷹司)踐祚、右大臣、內大臣、左大將兼忠、以下參行之、

公秀公記　永仁六年七月廿二日丁未、今日讓位(伏見天皇)也、

官公事抄　二

後伏見院、諱胤仁、

後二條天皇受禪　後醍醐天皇受禪　後村上天皇受禪

永仁六年戊戌
七月廿二日丁未
受禪、於冷泉富小路、

繼塵記　正安三年正月廿一日壬戌、早旦參仙洞(後伏見上皇)未了退出、於今日讓位節會也、(九條師教)左大臣殿申剋參陣令行事給云々、然而每事頻遲々、寅終剋劍璽渡御、奉行實音朝臣未練惘然故云々、

吉口傳　一、正安踐祚事、正安三年正月廿一日壬戌、今日皇(後二條天皇)太子踐祚也、

公敏卿記　文保二年二月廿六日、今日讓位(花園天皇)也、於土御門東洞院被行節會、劍璽渡御、以下缺、

官公事抄　二

後醍醐院諱尊治、後字多第二皇子、
文保二年戊午
二月廿六日戊子
受禪、於冷泉富小路、當日渡御本萬里小路、

神皇正統記　第九十五代、第四十九世、後醍醐天皇、諱は尊治、(中略)扨も舊都には、

戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける、芳野の宮には本の延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の年號なり、(中略)されど四とせにもなりぬるにや、大日本島根は本より皇都也、內侍所神璽も芳野におはしませば、いづくか都にあらざるべき、さても八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給ひて、かくれまし〳〵ぬとぞ聞えし、(中略)かねて時をもさとらしめ給ふにや、前の夜より親王(義良)をば左大臣の第へうつしたてまつられて、三種の神器をつたへ申さる、後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す、第九十六代、第五十世の天皇、諱は義良、(後村上)(中略)つちのと(延元四年)の卯の年三月、又芳野へいらせたまふ、秋八月中の五日ゆづりをうけて天日嗣をつたへおはします、

椿葉記　さてだいり(後小松天皇)は、御治天卅年、政務おぼしめすまゝにておりさせ給ふ、同十九年八月廿九日、一の宮(稱光天皇)に御くらゐゆづり申さる、御治世はもとのごとくにて、よろづめでたく渡らせ給、

讓位要覽　後小松　稱光、後小松第一皇子、
應永十九年壬辰八月廿九日、受禪、十二、

宗賢卿記　寬正五年(奧書)七月十九日、御讓位(後花園天皇)、少納言宗賢眞人、長淸朝臣等參之、

後陽成天皇受禪

讓位要覽　後花園　後土御門、後花園第一皇子、
寛正五甲申年七月十九日庚午、受禪、三十三、

御湯殿上日記　天正十四年ひのへいぬのとし十一月七日、はるる、(正親町天皇)御しやういあり、おとこたちのこらすしこう、女中ものこらす御ともなり、てんきよくて、めてたし、めてたし、

後水尾天皇受禪

讓位要覽　正親町　後陽成、(正親町天皇)第一皇子、
天正十四丙戌年十一月七日戊戌、受禪、十六、

光豐公記　慶長十六年三月廿七日、今日御(後陽成天皇)讓位各早參、築地固有之、東宮坊被用女院御所、節會、次劒璽渡御、

明正天皇受禪

讓位要覽　後陽成　後水尾、後陽成第三皇子、
慶長十六辛亥年三月廿七日戊辰、受禪、十六、

時慶卿記　寛永六年己巳十一月八日
一、御(後水尾天皇)讓位俄也、誰モ無知人、中御門大納言(宣衡)計ニテ各驚計也、

讓位要覽　後水尾　女明正、(朱書)後水尾第二皇女、
寛永六己巳年十一月八日己丑、受禪、七、(中略)讓位節會、

後光明天皇受禪

道房公記　寛永廿年十月三日甲子、此日有御(明正天皇)讓位事、新主(後光明天皇)御年十一、御母京極局、前中納言基音卿姉也、女院爲御子立親王也、先是行幸新造御所、當內裏土御門殿、北々面御殿也、自彼可被渡寶劒璽也、

讓位要覽　明正　後光明、後水尾第五皇子、
寛永廿癸未年十月三日甲子、受禪、十一、

靈元天皇受禪

忠利宿禰記　寛文三年正月二十六日乙未、今日御(後西天皇)讓位、劒璽渡御、早天大外記令同道參內、諸役人同前、(中略)午刻御讓位節會之作法相濟、劒璽渡御之儀被催也、奉行甘露寺右少辨方長、

讓位要覽　後西　靈元、後水尾皇子、
寛文三癸卯年正月廿六日乙未、受禪、十、

東山天皇受禪

基熙公記　貞享四年三月廿一日己亥、今日有(靈元天皇)讓位事、

讓位要覽　靈元　東山、靈元第四皇子、
貞享四丁卯年三月廿一日戊戌(己亥)、受禪、十三、

中御門天皇受禪

定基卿記　寶永六年六月廿一日、此日皇帝(東山)讓位於皇太子(中御門天皇)、諱慶仁、御年九歲、聖壽卅五、

櫻町天皇受禪　桃園天皇受禪　後桃園天皇受禪

讓位要覽　東山　中御門、東山第五皇子、
寶永六己丑年六月廿一日庚申、受禪、九、

御湯殿上日記　享保二十年三月廿一日、(中御門天皇)御しやう位、(櫻町天皇)御しゆせん有、

讓位要覽　中御門　櫻町、中御門第一皇子、
享保廿乙卯年三月廿一日辛卯、受禪、十六、

桂宮日記　延享四年五月二日辛卯、今日辰刻櫻町御所遷幸、(櫻町天皇)御讓位、(桃園天皇)御受禪、劍璽渡御未剋過有之、

讓位要覽　櫻町　桃園、櫻町第一皇子、
延享四丁卯年五月二日、受禪、六、

後櫻町天皇宸記　明和七年十一月廿四日、一、卯のこくちんの義(儀)はしまる、さうもん長はしまいる、(中略)東宮御かゝりゆめして小御所へなる、小御所ニテ御ふく也、(中略)東宮御拜舞ノ刀有、すみてすくに新主へけんしわたしまいらす、(中略)何かするすると、すませられ候て常御殿へ入御、萬々歲、めて度し〳〵、

執次詰所本御系譜

後桃園院　治十年、諱英仁、桃園院皇子、(中略)
第百十九代

明和七年十一月廿四日、受禪、十三歲、

山科忠言卿傳奏記　文化十四年三月廿二日乙丑、一、(光格天皇)御讓國日也、丑刻參內、(中略)
一、行幸兩役已下御門內御見送、忠言、甘露寺大納言(國長)、菊亭等列外供奉參于櫻町殿、節會了劍璽渡御之後、忠言、甘露寺等參新主(仁孝天皇)御所、一統申恐賀訖、

執次詰所本御系譜
第百廿一代(仁孝天皇)
今上、諱惠仁、(中略)

文化十四年三月廿二日、受禪、御歲十八、劍璽渡御、

續日本紀　二十五　淳仁天皇　天平寶字八年冬十月壬申(九日)、高野天皇(稱德)遣兵部卿和氣王、左兵衛督山村王、外衛大將百濟王敬福等、率兵數百圍中宮院、時帝遽而未及衣履、使者促之、數輩侍衛奔散、無人可從、僅與母家三兩人、步到圖書寮西北之地、山村王宣詔曰、掛(末久毛)畏朕我天先帝乃御命以天、朕仁勅之久、天下方朕子伊末之仁授給事乎之云方、王乎奴止成止毛、奴乎王止云止毛、汝乃爲牟末仁、假令後仁帝止立天在人伊、立乃後仁、汝(乃多米仁)無禮之旦、不從奈米久在牟人乎方、帝乃位仁置許止不得、又君臣乃理仁從天、貞久淨岐心乎以天、助奉

仁孝天皇受禪　稱德天皇踐祚

侍卒之、帝止在己方止得止勅岐、可久在御命乎、朕又一二乃豎子等止侍天聞食天在然今帝止之天止之侍人乎、此年已呂見仁、其位仁毛不堪、是乃仁味不在、今聞仁仲麻呂止同心之天、竊朕乎掃止謀家利、又竊六千乃兵乎發之等等等乃比、又七人乃味之天關仁入卒止毛謀家利、精兵乎之天押之天、非壞亂天罰滅止云家利、故是以、帝位乎方退賜天親王乃位賜天、淡路國乃公止退賜止勅御命乎聞食止宣、事畢、將公及其母、到小子門虜(庸イ)道路鞍馬騎之、右兵衞督藤原朝臣藏下麻呂、衞送配所、幽于一院、勅曰、以淡路國賜大炊親王、國內所有官物調庸等類、任其所用、但出擧官稻、一依常例、

水鏡　下

一　四十八代　大炊(淳仁)天皇(註略)

次ノ御門ヲ大炊天皇ト申キ、(中略)サテ同九月廿日(天平寶字八年)、太上(稱德)天皇宣ク、仲丸ハ前ノ東宮ノ兄コノカミノ鹽燒ノ王子ヲ位ニ付テ、我養君ノ大炊ノ王子ヲ退ケントスル事ヲイカリテ、太政官ノヲシテヲサシ國々ニ遣テ、人ノ心ヲタブラカシ、兵ヲ發シ鬪ヲカタメシガ、養君ノ大炊ノ王子ノ位ニアラバ、我世ニ出デンズル事ヲ思テ、罪モ無リケル兄コノカミノ豐成ガ大臣ノ位ヲ讒シ申テ其位ヲ退タリケリ、此事仲麿ガ僞ル事ナリケリト知ヌ、然レバ豐成ヲ本ノ如大臣ノ位ニ納ベシト也、又此禪師道鏡僧都、朝夕ツトメ行法ヲ仕レルアリサマヲ見ルニ、イトタウトシ、ワレ頭ヲ剃テ佛ノ御袈裟ヲキテアレドモ、世ノ政ヲセザルベキニアラズ、佛モ經ニモ經ニ國王ノ位ニ付給ハンヲリハ、并戒ヲ請ヨトゾ說置キ給タル事ナレバ、是ヲ思ニ并戒ノ身ノ尼ト成テモ世ノ政ヲセンニ、何ノ障カアルベキ、シカレバ御門ノ出家シテ居センニ、又出家シテアラン大臣モアルベシト覺タリト宣セテ、此道鏡禪師ヲバ、大臣禪師ト云位ヲ授ケ奉ル也ト宣キ、又イク程モ無テ、鑓テ其移リノ天平寶字八年十月九日、太上天皇ハ兵ヲ發シ給テ、大炊天皇ノ內裏ヲ打圍シメ給シカバ、宮ノ內ニ候シ人々皆々逃失ニシカバ、御門ハ御母ト又仕マツリ人二三人計トヲ相具シ給テ、御カチニテ圖書寮ノ方ニ御座シテ立給ヘリシニコソハ、臣家ノ少納言向奉テ、御位ヲヲロシ奉ルヨシノ宣命ヲ讀懸奉シニ、其宣命ノ御詞ニハ、位ヲ持給ベキ器ニハ御座ズシテ、仲丸ト同心ニテ我ヲ傾ケソコナワント計給ケリ、シカレバ御門ノ位ヲ退ケ奉テ、親王ノ位ヲ給ト讀懸奉テ、淡路國ヘ流シ奉給テ、忽ニ廢帝ト成シ奉リ給フ、

一　四十九代　稱德天皇(註略)

次ノミカドヲ稱德天皇ト申キ、コレハ孝謙天皇ノマタカヘリツキ給ヘリシナリ、天平

寶字八年十月九日位ニツキ給、

一九 百錬抄 七 近衞院　久壽二年七月廿三日、天皇崩于近衞皇居、春秋十七、年來御不豫也、空王位一日、

百錬抄 七 後白河院　後白河天皇、諱雅仁、三年、

鳥羽院第四皇子、（中略）久壽二年七月廿四日、踐祚、年廿九、

增鏡 十五うら千鳥　かくて八月のはじめつかたより、內のうへれいならずおはしますとて、（中略）いとかひなく、廿五日ねの時ばかりにはてさせ給ぬ、（中略）春宮は正親町殿へ行啓なりて劍璽わたさる、八月廿六日踐祚なり、十二にぞならせ給ふ、

二〇 日本書紀 三 神武天皇　七十有六年春三月甲午朔甲辰、天皇崩于橿原宮、

日本書紀 四 綏靖天皇　元年春正月壬申朔己卯、神渟名川耳尊卽天皇位、

日本書紀 四 安寧天皇　其年秋七月、癸亥朔乙丑、太子卽天皇位、

三十八年冬十二月庚戌朔乙卯、天皇崩、

日本書紀 四 懿德天皇　元年春二月己酉朔壬子、皇太子卽天皇位、

三十四年秋九月甲子朔辛未、天皇崩、

日本書紀 四 孝昭天皇　元年春正月丙戌朔甲午、皇太子卽天皇位、

八十三年秋八月丁巳朔辛酉、天皇崩、

日本書紀 四 孝安天皇　元年春正月乙酉朔辛卯、皇太子卽天皇位、

百二年春正月戊戌朔丙午、天皇崩、

日本書紀 四 孝靈天皇　元年春正月壬辰朔癸卯、太子卽天皇位、

七十六年春二月丙午朔癸丑、天皇崩、

日本書紀 四 孝元天皇　元年春正月辛未朔甲申、太子卽天皇位、

五十七年秋九月壬申朔癸酉、大日本根子彥國牽天皇崩、

日本書紀 四 開化天皇　冬十一月辛未朔壬午、太子卽天皇位、

六十年夏四月丙辰朔甲子、天皇崩、

日本書紀 五 崇神天皇　元年春正月壬午朔甲午、皇太子卽天皇位、

六十八年冬十二月戊申朔壬子、崩、

日本書紀 六 垂仁天皇　元年春正月丁巳朔戊寅、皇太子卽天皇位、

九十九年秋七月乙巳朔戊午、天皇崩於纒向宮、

孝安天皇踐祚　孝靈天皇踐祚　孝元天皇踐祚　開化天皇踐祚　崇神天皇踐祚　垂仁天皇踐祚　景行天皇踐祚

先帝崩御の翌日踐祚したまへる例　後白河天皇踐祚

先帝崩御の後若干の年月を隔てゝ踐祚したまへる例　綏靖天皇踐祚　安寧天皇踐祚　懿德天皇踐祚　孝昭天皇踐祚

成務天皇踐祚　仲哀天皇踐祚　應神天皇踐祚　仁德天皇踐祚　履中天皇踐祚　反正天皇踐祚　允恭天皇踐祚

日本書紀　七　景行天皇　元年秋七月己巳朔己卯、（辛未）（十一日）太子卽天皇位、
六十年冬十一月乙酉朔辛卯、（庚午）（七日）天皇崩於高穴穗宮、
日本書紀　七　成務天皇　元年春正月甲申朔戊子、（辛未）（五日）皇太子卽位、
六十年夏六月己巳朔己卯、（庚午）（十一日）天皇崩、
日本書紀　八　仲哀天皇　元年春正月庚寅朔庚子、（壬申）（十一日）×皇太子卽天皇位、
九年春二月癸卯朔丁未、（庚辰）（五日）天皇忽有痛身、而明日（六日）崩、（中略）一云、天皇親伐熊襲、中賊矢而崩也、
日本書紀　十　應神天皇　元年春正月丁亥朔、（庚寅）皇太子卽位、
四十一年春二月甲午朔戊申、（庚午）（十五日）天皇崩于明宮、（中略）一云、崩于大隅宮、
日本書紀　十一　仁德天皇　元年春正月丁丑朔己卯、（癸酉）（三日）大鷦鷯尊卽天皇位、
八十七年春正月戊子朔癸卯、（己亥）（十六日）天皇崩、
日本書紀　十二　履中天皇　元年春二月壬午朔、（庚子）皇太子卽位於磐余稚櫻宮、
六年三月壬午朔丙申、（乙巳）（十五日）天皇玉體不悆、水土不調、崩于稚櫻宮、
日本書紀　十二　反正天皇　元年春正月丁丑朔戊寅、（丙午）（二日）儲君卽天皇位、
五年春正月甲申朔丙午、（辛亥）（二十三日）天皇崩于正寢、

安康天皇踐祚　雄略天皇踐祚　清寧天皇踐祚　顯宗天皇踐祚　仁賢天皇踐祚

日本書紀　十三　允恭天皇　元年冬十有二月、（壬子）妃忍坂大中姬命、苦群臣之憂吟、而親執洗手水、進于皇子前、仍啓之曰、大王辭而不卽位、位空之、既經年月、（中略）爰大中姬命仰歡、則謂群卿曰、皇子將聽群臣之請、今當上天皇璽符、於是群臣大喜、卽日捧天皇之璽符、再拜上焉、皇子曰、群卿共爲天下請寡人、寡人何敢遂辭、乃卽帝位、
四十二年春正月乙亥朔戊子、（癸巳）（十四日）天皇崩、
日本書紀　十三　安康天皇　十二月己巳朔壬午、（丙申）（十四日）（允恭天皇四十二年）（安康天皇）穴穗皇子卽天皇位、
三年秋八月甲申朔壬辰、（丙申）（九日）天皇爲眉輪王見弑、
日本書紀　十四　雄略天皇　十一月壬子朔甲子、（安康天皇三年）（十三日）天皇命有司、設壇於泊瀨朝倉卽天皇位、
二十三年八月庚午朔丙子、（己未）（七日）天皇疾彌甚、與百寮辭訣、並握手歔欷、崩于大殿、
日本書紀　十五　清寧天皇　元年春正月戊戌朔壬子、（庚申）（十五日）命有司、設壇場於磐余甕栗陟天皇位、
五年春正月甲戌朔己丑、（甲子）（十六日）天皇崩于宮、
日本書紀　十五　顯宗天皇　元年春正月己巳朔、（乙丑）（中略）乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮卽天皇位、百官陪位者皆忻忻焉、
三年夏四月庚辰、（丁卯）（二十五日）天皇崩于八釣宮、

仁賢天皇踐祚

武烈天皇踐祚

日本書紀　十五仁賢天皇　元年春正月辛巳朔乙酉、(五日)(仁賢天皇)皇太子於石上廣高宮卽天皇位、
十一年秋八月庚戌朔丁巳、(八日)天皇崩于正寢、

日本書紀　十六武烈天皇　十二月、(仁賢天皇十一年)大伴金村連平定賊訖、反政太子、(武烈天皇)請上尊號曰、今億計天
皇子、唯有陛下、億兆攸歸、曾無與二、又賴皇天翼戴淨除凶黨、英略雄斷、以盛天威天祿、日本
必有主、主日本者、非陛下而誰、伏願、陛下仰答靈祇、弘宣景命、光宅日本、誕受銀鄕、於是太子
命有司、設壇場於泊瀨列城陟天皇位、
八年冬十二月壬辰朔己亥、(八日)天皇崩于列城宮、

繼體天皇踐祚

日本書紀　十七繼體天皇　元年二月辛卯朔甲午、(四日)大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符、再
拜、(中略)乃受璽符、是日卽天皇位、
二十五年春二月、天皇病甚、丁未、(七日)天皇崩于磐余玉穗宮、

安閑天皇踐祚

日本書紀　十八安閑天皇　二十五年春二月辛丑朔丁未、(七日)(繼體)男大迹天皇立大兄爲天皇、(安閑天皇)卽日
男大迹天皇崩、
元年春正月、遷都于大倭國勾金橋、因爲宮號、(中略)是年也太歲甲寅、〔一八頁竝びに第三
〔卷四一二頁參照〕

欽明天皇踐祚

日本書紀　十八宣化天皇　四年春二月乙酉朔甲午、(十日)天皇崩于檜隈廬入野宮、

敏達天皇踐祚

日本書紀　十九欽明天皇　四年冬十二月庚辰朔甲申、(五日)(欽明天皇)天國排開廣庭皇子卽天皇位、
三十二年夏四月戊寅朔壬辰、(十五日)天皇寢疾不豫、皇太子向外不在、驛馬召到、引入臥內、執其手
詔曰、朕疾甚、以後事屬汝、(中略)是月、(日カ)天皇遂崩于內寢、

用明天皇踐祚

日本書紀　二十敏達天皇　元年夏四月壬申朔甲戌、(三日)(敏達天皇)皇太子卽天皇位、
十四年秋八月乙酉朔己亥、(十五日)天皇病彌留、崩于大殿、

崇峻天皇踐祚

日本書紀　二十一用明天皇　十四年九月甲寅朔戊午、(五日)天皇卽天皇位、
二年夏四月癸丑、(九日)天皇崩于大殿、

推古天皇踐祚

日本書紀　二十一崇峻天皇　二年八月癸卯朔甲辰、(二日)炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、
五年十一月癸卯朔乙巳、(三日)馬子宿禰詐於群臣曰、今日進東國之調、乃使東漢直駒殺于天皇、

舒明天皇踐祚

日本書紀　二十二推古天皇　五年冬十二月壬申朔己卯、(八日)(推古天皇)皇后卽天皇位於豐浦宮、
三十六年三月癸丑、(七日)天皇崩之、

皇極天皇踐祚

日本書紀　二十三舒明天皇　元年春正月癸卯朔丙午、(四日)(舒明天皇)村皇子、(中略)卽日卽天皇位、
十三年冬十月己丑朔丁酉、(九日)天皇崩于百濟宮、

齊明天皇踐祚
天智天皇踐祚
弘文天皇踐祚
天武天皇踐祚
持統天皇踐祚

日本書紀　二十四　皇極天皇　元年春正月丁巳朔辛未(十五日)皇后卽天皇位、

日本書紀　二十五　孝德天皇　五年冬十月壬子(十日)、天皇崩于正寢、

日本書紀　二十六　齊明天皇　元年春正月壬申朔甲戌(三日)皇祖母尊卽天皇位於飛鳥板蓋宮、七年秋七月甲午朔丁巳(二十四日)天皇崩于朝倉宮、

日本書紀　二十七　天智天皇　七年春正月丙戌朔戊子(三日)皇太子卽天皇位、或本云、六年歲次丁卯三月卽位、十年十二月癸亥朔乙丑(三日)天皇崩于近江宮、

扶桑略記　五　天智天皇　十年辛未十二月三日、天皇崩、同月五日、大友皇太子卽爲帝位、

日本書紀　二十八　天武天皇　元年秋七月壬子(二十三日)、男依等斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟津市、於是大友皇子走無所入、乃還隱山前、以自縊焉、

日本書紀　二十九　天武天皇　二年二月丁巳朔癸未(二十七日)天皇命有司、設壇場卽帝位於飛鳥淨御原宮、

朱鳥元年九月丙午(九日)、天皇病遂不差、崩于正宮、

日本書紀　三十　持統天皇　四年春正月戊寅朔、物部麤朝臣樹大盾、神祇伯中臣大嶋朝臣讀天神壽詞畢、忌部宿禰色夫知奉上神璽劍鏡於皇后(持統天皇)、皇后卽天皇位、

元明天皇踐祚
光仁天皇踐祚
後嵯峨天皇踐祚
後花園天皇踐祚
後柏原天皇踐祚

續日本紀　三　文武天皇　慶雲四年六月辛巳(十五日)、天皇崩、

續日本紀　四　元明天皇　慶雲四年秋七月壬子(十七日)、天皇卽位於大極殿、

續日本紀　三十　稱德天皇　寶龜元年八月癸巳(四日)、天皇崩于西宮寢殿、

續日本紀　三十一　光仁天皇　寶龜元年冬十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、改元寶龜、

百錬抄　十四　四條院　仁治三年正月九日壬辰、自夜半天下物忩、諸社被進御誦經、及曉更御絕入(四條天皇)云々、

百錬抄　十五　後嵯峨院　仁、諱邦仁、四年、正月廿日踐祚、

滿濟准后日記　應永卅五年(正長元)七月廿日、今曉卯終主上(稱光)崩御、御年廿八歲、皇子一人モ無御座、珍事々々、崩御在所黑戶也、於彼殿者可被造替歟云々、

後法興院記　明應九年九月廿八日庚辰、未明自方々告示云、去曉寅刻主上(後土御門)崩御云々、

未宮御儀也、御裝束御半尻云々、次劍璽渡御、

廿八日、今日新主(後花園天皇)御踐祚、自仙洞渡御三條前右府(公光)亭、御車、八葉、供奉少々、非殊御行粧云々、

後奈良天皇踐祚
正親町天皇踐祚
後西天皇踐祚
後櫻町天皇踐祚
光格天皇踐祚
孝明天皇踐祚

十月廿五日丙午、今夜(後柏原天皇)踐祚也云々、

二水記　大永六年四月七日、卯刻遂以(後柏原天皇)崩御也、

廿九日、今日有(後奈良天皇)踐祚亶、

康雄記　弘治三年九月四日、今曉刁刻當今崩御也、御歳六十二歳、號後奈良院、

十月廿七日(正親町天皇)踐祚、

宣順卿記　承應三年九月廿日、(中略)聞、昨夜自子剋許御增氣、明方ニ(後光明天皇)崩御、

十一月廿八日、(中略)今日(後西天皇)踐祚、

愚紳　寶曆十二年七月十二日癸酉、早旦自葉室大納言賴卿要御違例旨一統被觸之、(中略)未剋斗近臣各可參御前者參入御前、(註略)已(桃園天皇)崩御後也、只今御閇眼云々、忙然如夢、

賴言卿記　寶曆十二年七月廿七日戊子、今日(後櫻町天皇)智子內親王踐祚也、

愚紳　安永八年十月廿九日己卯、今曉寅剋於源氏八景繪間崩云々、主上(後桃園)崩御之旨內々聞之、

言成卿記　弘化三年正月廿七日、御違例御機嫌伺附御帳了、(中略)日々御同樣御容體被告云々、眞實廿六日曉(仁孝天皇)御事切、了、故別段御容體不變也、

二月十三日、衣冠、奴袴、垂纓、踐祚恐悦、新(孝明)帝(註略)恐悦言上、附于御褄、

言成卿記　慶應二年十二月廿五日、主(孝明)上御樣子密々奉傳之處、兎角未安心御容體、恐懼、偏御順快奉祈者也、(中略)風聞、眞實今晚丑刻許御大切云々、恐懼千萬、血淚迫喉、心底闇夜、

廿九日、小番御免廻文、主上今廿九日辰刻崩御候、

三年正月九日、辰刻衣冠、奴袴、(註略)今日(明治天皇)踐祚、

明治天皇踐祚

二　皇室典範義解

天皇崩ずるときは皇嗣卽ち踐祚し祖宗の神器を承く

第十條　天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

卽位

恭テ按スルニ、神祖以來、鏡、劍、璽三種ノ神器ヲ以テ皇位ノ御守ト爲シタマヒ、歷代卽位ノ時ハ、必神器ヲ承クルヲ以テ例トセラレタリ、(中略)本條ハ、皇位ノ一日モ曠闕スヘカラサルヲ示シ、及神器相承ノ大義ヲ揭ケ、以テ舊章ヲ昭明ニス、若乃繼承ノ大義ハ、踐祚ノ儀文ノ有無ヲ問ハサルハ固ヨリ本條ノ精神ナリ、

第二款　卽位の禮

上代に於いては、踐祚と卽位との區別なかりしが、後世に至り、天皇踐祚の後若干の時日を隔てゝ卽位の事を祖宗に告げ、又之を萬民に宣示したまふ爲に、更に莊重の儀典を擧げたまふの例を爲せり。之を卽位の禮と謂ふ(一)。踐祚と卽位との區別せらるゝに至りて後は、卽位の禮は天皇始めて皇位に卽きたまふの儀に非ずして、既に皇位に卽きたまひて後、之を天下に公示したまふの大儀と爲れり。

卽位の儀禮の詳細は、後編に述ぶべき所なるが、先づ勅使を伊勢神宮に差遣し、幣帛を奉りて卽位の由を告げたまひ、又告陵使をして卽位の由を山陵に告げしめたまふの儀あり、前日大極殿の儀飾を爲し、當日親王以下文武百官大極殿の前庭に參列し、天皇冕服を著し、高御座に登らせたまひ、宣命使版位に就きて卽位の旨を宣し、王公百官再拜舞踏し、武官は旆を振り萬歲を稱するを以て、其の儀大綱とす(二)。其の儀禮は時代に依り多少の變遷を免れざれども、大體に於いては、近代に至るまで存續せるものなり。

卽位の禮は大極殿に於いて擧げたまふの例なりしが(三)、陽成天皇は大極殿の燒亡に因り、豐樂殿に於いて擧げたまひ、冷泉天皇は不豫に因り、紫宸殿に於いて擧げたまひ、後三條天皇は大極殿再び燒亡したるに因り、太政官廳に於いて擧げたまひ、安德天皇亦大極殿の燒亡に因り、紫宸殿に於いて擧げたまへり(四)。爾後大極殿造營のことなく、後鳥羽天皇以後は專ら太政官廳に於いて擧げたまふの例を爲し(五)、更に後柏原天皇以後は專ら紫宸殿に於いて擧げた

まふの例と爲れり(六)。

踐祚の後卽位の禮を擧げたまふに至るまでの期間は、歷代其の例一ならざれども、年を超えずして行はれしもの最も多く、翌年に及べるもの之に次ぐ。後柏原天皇の踐祚後二十年餘、後奈良天皇の踐祚後九年餘を經て、卽位の禮を擧げたまひしは、當時皇室の用度足らず、幕府の財政亦窮乏して、其の資を獻ずること能はざりしに因るものにして、大なる異例なり(七)。更に仲恭天皇の踐祚の後、世變の爲に遂に卽位の禮を行ふに至らずして皇位を去りたまひしは、特に異例として見るべきものなり(八)。

明治天皇は慶應三年正月九日踐祚したまひ、越えて翌明治元年八月二十七日卽位の禮を擧げたまひしが、其の儀は中古以來の恆例に比し著しく異なるものありたり(九)。蓋し我が固有の舊儀を復

興し、以て新に其の典式を定めんことを期したまへるなるべし。明治二十二年皇室典範の制定に及び「卽位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」と定めたまひ、中古以來の古例に則り、踐祚の後時を隔てゝ卽位の禮を行ふことを恆典としたまふと共に、桓武天皇以來の舊都たる京都の皇宮を以て、卽位の禮を行ふべき場所と定め、以て本を忘れざるの義を示したまひ、次いで明治四十二年登極令の制定あり、卽位の禮を行はせらるべき時期を一定したまひ、又古例に鑑み新意を加へ、以て其の詳細の典式を定めたまへり(一〇)。

一名目抄　恆例諸公事臨時篇　卽位（ショクヰ）

名目抄鈔　臨時　卽位

名目ニハシヨクヰトアリ、今世ソクヰト云、シヨクヰニ通ズルナリ、

下學集　下　態藝　卽位（ソクヰ）、御字之始也、

代始和抄　御卽位事　卽位といふは、天子受禪の後、まさしく南面の位につかせ給

て、はしめて百司萬民に龍顏を見えさせ賜ふよし也、

弘化御即位次第　御即位次第

に始めて見え給ふ日をしよく位と云、

二　淳和天皇御即位記　弘仁十四年四月廿七日辛亥、（淳和）今皇帝大極殿即位記、儀同元正、

前一日辨官率所司裝束大極殿、其五位已上着標禮服幷諸衞服大儀、立大儀仗、中務省率內舍人、列左近仗南、大舍人主殿寮執威儀物立東西、圖書、主殿寮燒香、及立八咫烏日月形、十八之女孺、威儀之命婦等、供設一如元正儀、但依雨下庭濕、略有改行、皇太子幄設昭訓門北廊第四間、大臣幄設同門南廊第三間、親王位設延休堂、宣命大夫幷參議已上位昌福堂、五位已上位含章含嘉二堂、六位已下位承光、明禮等堂、被敍位人位暉章、修式二堂、（式部修式堂、）（式部兵部堂、）

平旦大臣就幄、辰三剋皇帝出常宮、御大極殿後房、次皇太子就昭訓門廊外幔、（雖參入不拜、仍被版位）幷謁者（位記持位記莒、置大臣前、召式兵二省給下名、又召給位記莒、即出於朝集堂以南先令撤、）內召式部列刀禰、（位記持位記莒、置大臣前、召式兵二省給下名、又召給位記莒、即出於朝集堂以南位已上於朝集堂前庭列、而此度於堂上列、六位已下於朱雀門南庭列、而此度於朝集堂以南列、）訖閤門外大臣令樋外辨鼓、諸門鼓皆應、（殿下鼓不應、）乃開章德、興禮兩門、大伴、佐伯兩氏、自先左大伴、右佐伯、（卷繼嗣、）率門部坐於會昌門、少納言入立殿上、大伴、佐伯開會昌門、閤內大臣令樋召鼓、諸門鼓皆應、于時式部權大輔橘朝臣常主、權少輔大枝綱成、兵部權少輔安倍藏嗣引被敍人、入會昌門東西扉、（式部兵部東西扉、）各併自廊直趍移於堂上、（堂與廊間度板、）于時殿下擊鉦一下、皇帝服冕服就高座、十八女孺奉翳復本所、宸儀初見、仗（執脫カ）者俱稱警、群官磬折、典儀曰、再拜、贊者承傳、宣命大夫□（脫カ）位宣制云云、群官稱唯、拜舞如常、訖典儀曰、再拜、如先振萬歲旗、次掃部寮取位記机、安暉章、修式兩堂上退出、次式兵兩省承位記莒、置机上退出、（掃部式兵等三司、須入會昌門東西扉、）小門旅、直出置□了、式部就机授位記、兵部亦如之、訖式兵掃部等撤机莒、被敍者於堂上拜舞、訖殿上侍從進、當御前稱禮畢、十八女孺奉翳垂帳、次殿下擊鉦、樋退鼓、群官退出、御輿還宮、

儀式　五　天皇即位儀

前一日整設太極殿、當日諸衞服大儀、各勒所部立大儀仗於殿庭左右及諸門、（中略）大臣以下自含耀、章義兩門就朝集堂床、（大臣以下參議以上在東、親王以下非參議三位以上在西、若太政大臣就列者右大臣就西、）（中略）辰一刻皇帝出自建禮門御太極殿後房、（中略）親王入自顯親門就位、（中略）皇帝服冕服即高座、命婦四人分在御前、至高座下立、御座定命婦引還時、殿下擊鉦三下、其儀鼓吹正申大臣云、令擊褒御帳、大臣宣、令擊、頭稱唯、召鼓師令擊、二九女孺執翳、左右分進奉翳、命婦二人褒御帳復

伊勢神宮奉幣の儀

本座、女孺還本座、宸儀初見、執仗者俱稱警、式部錄以下省掌已上共稱面伏、群官磬折、諸仗坐、主殿圖書各二人以次東西就爐燒香、訖典儀曰、再拜、贊者承傳、王公百官再拜、訖宣命大夫進自位就、宣命位、宣制云、明神止大八洲國所知天皇詔良萬止宣敕乎衆聞食止宣、群官共稱唯再拜、掛畏岐明神坐天皇我云云宣、群官稱唯再拜、然皇止大坐氐天下治賜君波賢人乃云云宣、群官稱唯再拜、舞踏再拜、武官俱並振旆稱萬歲、其聲謁、不拜舞、待宣命大夫退復本列而止、式部就案下喚授位記、兵部亦如之、訖被敍親王以下立列再拜舞踏、典儀曰、再拜、贊者承傳、群官俱再拜、群官、謂百官及被敍之人、訖殿上侍從進當御前傍行數步、北折進跪膝行數步、稱禮畢、膝行却退、乃立傍行、還如初進儀復本位、殿下擊鉦三下、其儀鼓吹正申大臣云、令擊垂御帳鉦、大臣宣、令擊、正稱唯、召鼓師令擊之、二九女孺奉翳、二人命婦垂御帳、皇帝還入後房、

北山抄　五　伊勢太神宮告卽位由事、諒闇時、只告事由、不奉幣、

卽位事（中略）

前一日裝飾太極殿、中務置典儀贊者版、式部置宣命及親王以下行立版、當日儀式一同朝賀、（中略）天皇御太極殿高座、（註略）命婦四人相分在御前、至高座下立、（註略）內侍二人、同著禮服、持御劍璽匣、候御前左右、（註略）御座定、置劍璽御座左邊退下、御前命婦同候高座北、

告陵の儀

伊勢神宮奉幣

告陵使

女藏人等又同候御後、殿下擊鉦三下、（註略）二九女孺奉翳、（註略）天皇端笏、把牙御笏、南面、命婦昇東西階褰御帳、（註略）復本座、女孺相分退入、宸儀初見、執仗者稱警、群臣官イ磬折、式部先稱面伏、諸仗共居、主殿圖書就爐燒香、主殿先出生炭火イ、圖書次出燒香、訖典儀、唱曰一本再拜、一兩步進稱之、贊者承傳、百官再拜、次宣命使就版、仗起、宣制三段、百官每段再拜、又辭別一段、百官拜舞、武官不拜舞、振旗稱萬歲、待宣命大夫復本列而止、仗居、二省召給位記、訖卿輔復本位不先出、被敍親王以下共拜舞、典儀唱曰一本再拜、贊者承傳、群官被敍人等共再拜、訖左侍從在北者、儀式云、在南者、進稱禮畢、退復本位、殿下擊鉦、其儀見上、但垂御帳鉦云云、奉翳垂帳、諸仗稱蹕、天皇還入後房、大臣令擊退鼓、（下略）

先陵告卽位由事　山一本

延長八年十一月十八日、六イ發使告山陵以廿一日可卽位由、陵六所、山階、嵯峨、深草、柏原、田邑、後山階、墓二所、堀川太（基）政（經）大臣、後贈太政大臣等也、（時平）康保四年十月五日、已下一本別行陵墓使立、延長天慶例、陵六所、此度如先帝陵、墓二所、天慶例、昭宣公同室、此度止之、九條右大臣一所也、山階、柏原、中納言、自餘參議、次官如常、右大臣墓、山城守藤原朝臣爲輔、此條依私一本安和記載之、近例御卽位以後有此事、先陵可尋注、一本、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年三月辛卯（四日）、天皇御大極殿、奉幣伊勢大神宮、爲應卽位也、壬辰（五日）、頒遣中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發、從三位行權中納言藤原朝臣

即位

吉野、從四位下因幡守高枝王、從四位下式部大輔安倍朝臣吉人等於柏原(桓武天皇)(桓武天皇皇后乙牟漏)長岡二山陵、豫告可即位之狀曰、天皇恐恐毛申賜部止申久、後太(淳和)上天皇厚矜乎垂賜天、天之日嗣乎授賜閇利、不堪流狀再比三比申賜閇止許賜波須、故是以大御座處乎掃潔侍而、天之日嗣乎戴荷知、守仕奉倍支事乎、恐恐毛申賜久止奏、又申久、掛畏支柏原御門乃天朝矜賜波牟厚慈乎蒙戴天之、天之日嗣乃政者平久、天地日月止共爾、守仕奉部之思食事乎、恐恐毛申賜久止奏、(中略)癸巳(六日)、天皇即位於大極殿、詔曰、明神止大八洲國所知天皇我詔旨良万止宣勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆諸聞食止宣、掛畏支倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業乎、掛畏支近江大津乃宮爾御宇之天皇(天智)乃初賜比定賜部留法隨爾仕奉止、仰賜比授賜布大命乎受賜利、恐美受賜利懼利、進毋不知爾退毛不知爾、恐美坐久止宣布勅乎、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得旦之、天下乎波平久安久治賜爾在止奈毛聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等乎始氏、王等、臣等乃相穴奈比奉利相扶奉牟事依天之、此乃仰賜比授賜閇留食國乃天下之政波、平久安久仕奉倍止之所念行、是以以正直之心天、天皇朝庭乎衆助仕奉止宣天皇勅、衆聞食止宣、辭別宣久、仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾給位一階、又僧綱及京

即位

告陵使

伊勢神宮奉幣使

畿内乃諸寺僧尼乃知行有聞流、并年八十已上爾施物布、萬又五位已上子孫乃年廿已上奈留爾賜當蔭之階布、左右京五畿内乃鰥寡孤獨不能自存人等爾給御物天、天下給侍留高年爾給御物布、力田之輩乃其業超衆者爾賜爵一階布、孝子順孫義夫節婦乎波終身爾勿事禮、又外國僧尼乃年八十已上奈留爾施物之賜波久止宣、

三代實錄　一清和天皇　天安二年十一月戊午朔、遣從四位下行越中權守房世王、内藏頭從五位上兼行神祇大副中臣朝臣逸志等於伊勢大神宮、告以天皇將即位也、(中略)五日壬戌、以正三位行中納言源朝臣定、從四位下行左馬頭在原朝臣行平爲山陵(文德天皇)使、參議左大辨從四位上兼行左衛門督伊豫權守藤原朝臣氏宗、從四位上行中務大輔清原眞人瀧雄爲柏原山陵(桓武天皇)使、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、中務少輔從五位上源朝臣包爲嵯峨山陵(嵯峨天皇)使、參議從三位行中宮大夫伴宿禰善男、大舍人頭從五位上島江王爲深草山陵(仁明天皇)使、參議勘解由長官兼左近衛中將從四位下守右大辨行讃岐守藤原朝臣良繩、從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善爲眞原山陵(文德天皇)使、從四位上行右兵衛督源朝臣勤爲今上外祖母源氏(潔姬)愛宕墓使、並告以天皇即位也、七日甲子、天皇即位於大極殿、時年九歲、詔曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨良万止宣勅乎、親王、

伊勢神宮奉幣使

諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、掛畏支平安宮爾御宇之倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業乎、掛畏近江（天智）大津宮爾御宇之天皇乃初賜比定賜倍留法隨爾仕奉止、仰賜比授賜比之大命乎、受賜利恐美、受賜利懼利、進母不知爾退母不知爾恐美坐久止宣天皇勅乎、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得天之、天下乎波平久安久治物爾在止奈聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等乎始天、王等、臣等乃相共奈比奉利、相扶奉牟事依旦之、此乃仰賜比授賜閇留食國乃天下之政波、平久安久可奉仕止奈所念行、是以正直之心天、天皇朝庭乎衆助仕奉止宣天皇勅乎、衆聞食止宣、辭別宣久、凡人子乃蒙福麻久欲爲流事波、於夜乃多米爾止奈聞行須、故是以朕親母藤原（明子）氏乎皇太夫人爾奉利治奉流、又仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾給位一階、又僧綱乎始天、諸寺知行有聞流、幷天下僧尼乃年八十已上施物賜、又左右京五畿內乃鰥寡孤獨不能自存者、及天下給侍留人等爾給御物布、又內外官乃未得解由輩免賜、又天下百姓乃半徭免給、仁壽元年以往調庸未進、在民身者免賜波止久勅天皇大命乎、衆聞食止宣、

三代實錄　四十五光孝天皇　元慶八年二月十九日庚戌、天皇御朝堂院小安殿、遣散位從五位上興我王、向伊勢大神宮奉幣、告以將卽位也、廿一日壬子、（中略）是日遣中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有於山階山陵、參議正四位下行皇太后宮大夫兼備中守藤原朝臣山陰於深草山陵、告以可卽位也、廿三日甲寅、天皇卽位於大極殿、

告陵使

卽位

告陵使策文

卽位

文德實錄　一　嘉祥三年四月癸亥（十六日）遣權中納言橘朝臣岑繼、告深草山陵以卽位之由、其策文曰、掛畏支天皇朝廷爾、恐見毛恐見毛申賜久、遺多萬倍留詔乃隨爾、天日嗣爾仕奉倍支狀乎、公卿等屢勸請天、而日月毛近久、心神毛哀迷爾依旦、不堪流狀、再比三比懼利辭止毛、御命旨止言旦、固勸强禮波、己志爾波從己止不得、故是以、大御坐處乎拂潔侍旦、天之日嗣乎戴荷知、守供奉倍支事乎、恐見恐見毛申賜久止奏、又申久、掛畏支天皇朝廷乃矜賜幸厚慈乎蒙戴旦之、天之日嗣乃政者平久、天地日月止共爾、守仕奉倍之思食事乎、恐見恐見毛申賜久止奏、甲子（十七日）、帝卽位於大極殿、其日晨旦快雨、百官以雨日儀從事、至日中時天晴、策命曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨良萬止宣勅、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、掛畏支平安宮爾御宇之倭根子天皇、我皇、此天日嗣高座之業乎、掛畏近江（天智）大津乃宮爾御

宇之天皇乃初賜比定賜倍留法隨爾、仕奉止仰賜授賜比之大命乎、受賜利恐美、受賜利懼利、進母不知爾退母不知爾、恐美坐久止宣天皇勅、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得天之、天下乎波平久安久治物爾在止奈毛聞行須、故是以、大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等始天、王等、臣等乃相共奈比奉利、相扶奉牟事依天之、此乃仰賜比授賜倍留食國乃天下之政波、平久安久仕奉倍之止奈毛所念行、是以以正直之心天、天皇朝廷乎衆助仕奉止宣天皇勅、衆聞食止宣、辭別宣久、凡人子乃蒙福萬久欲爲留事波、於夜乃多米爾止奈母聞行須、故是以朕親母藤原氏乎（刀自子）皇太夫人爾上奉利治奉流、又仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾給位一階、又僧綱乎始天、諸寺知行有聞流、幷天下僧尼乃年八十以上爾施物太布、萬及天下給侍留人等爾給御物布、力田之輩乃超衆者爾賜爵一階、又諸國言上、承和九年以往租稅未納者、先帝御坐之時爾免給倍止勅支、今天皇我御意止爲天、去年以往未納毛、復盡免給波久勅天皇御命乎、衆聞食止宣、

三　續日本紀　三十六　光仁天皇

天應元年夏四月（三日）辛卯、（中略）是日皇太子（桓武天皇）受禪卽位、（中略）癸卯（五日）、天皇御大極殿、詔曰、〔二四頁參照〕

卽位の禮を大極殿に於いて擧げたまへる例

桓武天皇卽位

平城天皇卽位

嵯峨天皇卽位

淳和天皇卽位

仁明天皇卽位

文德天皇卽位

淸和天皇卽位

光孝天皇卽位

宇多天皇卽位

醍醐天皇卽位

日本後紀　十四　平城天皇　大同元年五月辛巳（十八日）卽位於大極殿、

日本紀略　嵯峨天皇　第五十二代　嵯峨天皇

諱賀美能、桓武天皇第二子、（中略）大同四年四月戊子（十三日）受禪卽位於大極殿、詔曰云々、

日本紀略　淳和天皇　第五十三代　淳和天皇

諱大伴、桓武天皇之第三子也、（中略）弘仁十四年四月辛亥（二十七日）（中略）皇帝卽位、詔曰、明神止云々、此日、零雨庭濕、群臣百官皆悉陣列八省（大極殿）殿上、行拜禮事、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年三月癸巳（六日）、天皇卽位於大極殿、

文德實錄　一　淸和天皇　嘉祥三年夏四月甲子（十七日）、帝卽位於大極殿、

三代實錄　一　淸和天皇　天安二年十一月七日甲子、天皇卽位於大極殿、

三代實錄　四十五　光孝天皇　元慶八年二月廿三日甲寅、天皇卽位於大極殿、

日本紀略　宇多天皇　第五十九代　亭子院

諱定省、光孝天王（皇）第三之子也、（中略）仁和三年十一月十七日丙戌、今日辰一剋鳳輦出東宮南門（宮脫カ）幸八省、御小安殿、申剋還東、天皇卽位於大極殿、

日本紀略　醍醐天皇　醍醐天皇

朱雀天皇卽位

諱敦仁、(宇多)亭子天皇第一之子也、(中略)寬平九年七月十三日丙戌、天皇卽位於大極殿、

日本紀略　朱雀天皇　朱雀院

諱寬明、醍醐天皇第十一之子也、(中略)延長八年十一月廿一日、天皇卽位於大極殿、

村上天皇卽位

扶桑略記　二十五代、諱成明、村上天皇　村上天皇、六十三代、治廿一年、(中略)

(天暦九年四月)同月廿八日、於大極殿卽位、

圓融天皇卽位

日本紀略　圓融天皇　圓融院

諱守平、村上天皇第五之子也、(中略)安和二年九月廿三日丁卯、天皇卽位於大極殿、

花山天皇卽位

日本紀略　花山天皇　花山院

諱師貞、冷泉院天皇第一之子也、(中略)永觀二年十月十日丙戌、天皇卽位於大極殿、宣命如常、

一條天皇卽位

日本紀略　一條天皇　一條院

諱懷仁、圓融天皇第一之子也、(中略)寬和二年七月廿二日戊子、天皇卽位於大極殿、

三條天皇卽位

日本紀略　三條天皇　三條院

諱居貞、冷泉院天皇第二子也、(中略)寬弘八年十月十六日乙卯、天皇卽位於大極殿、

後一條天皇卽位

日本紀略　後一條天皇　後一條院

諱敦成、一條院天皇第二之子也、(中略)長和五年二月七日壬午、天皇卽位於大極殿、

後朱雀天皇卽位

扶桑略記　二十八代、諱敦良、後朱雀天皇　後朱雀天皇、七十代、諱敦良、治九年、(中略)

長元九年丙子七月十(卅)四日丙戌、卽位大極殿、

後冷泉天皇卽位

扶桑略記　二十九代、諱親仁、後冷泉天皇　後冷泉天皇、七十一代、諱親仁、治廿四年、(中略)

寬德二年乙酉四月八日甲午、天皇卽位於大極殿、儀式如常、

白河天皇卽位

扶桑略記　三十代、諱貞仁、白河天皇　六條(白河)天皇、七十三代、諱貞仁、治十四年、(中略)

延久四年壬子十二月廿九日癸卯、卽位大極殿、

堀河天皇卽位

扶桑略記　三十一代、諱善仁、堀河天皇　今上(堀河)皇帝、七十四代、諱善仁、(中略)

應德三年丙寅十二月十九日辛卯、天皇年始八歲、卽位於大極殿、儀式如常、

鳥羽天皇卽位

中右記　嘉承二年十二月一日壬午、今上(鳥羽)御卽位也、(中略)申刻御卽位大極殿、

崇德天皇卽位

師元記　保安四年二月十九日癸卯、(中略)是日天皇(崇德)卽位、于時春秋五歲、仍前一日、(中略)裝飾大極殿、

近衞天皇卽位

一代要記　戊近衞天皇　第七十三　近衞天皇、(註略)

後白河天皇卽位

諱體仁、鳥羽第八皇子、（中略）永治元年十二月二十七日、卽位于大極殿、

兵範記　久壽二年十月廿六日庚子、今日有御卽位事、于時御一本御書所、豫爲此儀、去廿日所遷幸也、（中略）午剋天皇出御南面、（中略）自美福門大路南行、自待賢門大路西行、直經昭慶門著御大極殿後房、（中略）此間主上（後白河）召禮服御高座、

二條天皇卽位

兵範記　保元三年十二月廿日丙午、今日有御卽位事、（中略）先向八省、檢知大極殿儀、裝束司左中辨雅賴朝臣、左大史小槻永業宿禰令供奉、諸司奉仕御裝束、（中略）皇輿出御承明建禮門西行、入御昭慶門、著御後房、（中略）此間御前命婦四人列高御座左右、天皇（二條）渡御、于時申一點、關白（藤原基實）殿下令候于御裾給、內侍取劍璽候于前後、女房扈從、

六條天皇卽位

山槐記　長寬（永萬元）三年七月廿七日甲戌、今日有御卽位、（中略）未始刻自高倉殿行幸小安殿、（中略）入光範門昇大極殿、見御裝束體、（中略）刻限申二點已到、內辨猶不被參、仍不待次第、幼主（六條天皇）著御高御座、（中山忠親卿記）

高倉天皇卽位

俊經卿記　仁安三年三月二十日、御卽位大極殿、南榮上十一間懸獸形繡帳額、（大藏省懸之、）

陽成天皇卽位禮を豐樂殿に於いて擧げたまふ

四

三代實錄　二十八　清和天皇　貞觀十八年夏四月十日丁巳、（中略）是夜子時大極殿災、延燒小安殿、蒼龍白虎兩樓、延休堂及北門北東西三面廊百餘間、

冷泉天皇卽位の禮を紫宸殿に於いて擧げたまふ

三代實錄　三十　陽成天皇　元慶元年春正月癸酉朔三日乙亥、天皇卽位於豐樂殿、（大極殿未作、故用豐樂殿云云、）

後三條天皇卽位の禮を太政官廳に於いて擧げたまふ

日本紀略　冷泉天皇　冷泉院　諱憲平、（四）冷泉院　冷泉天皇、諱憲平、二年、

豫不御大極殿、

百錬抄　康保四年十月十一日丙寅、天皇於紫宸殿卽位、依不

古事談　一王道后宮　冷泉院ノ御卽位者、於大內紫宸殿被行云々、神妙儀也、主上頗例ザマニモ不御座、於大極殿以行此事者、定見苦歟、小野宮（藤原實頼）殿高名此事也云々、

康保四年十一月十一日卽位于紫宸殿、十八、（紡カ）此殿卽位始也、

扶桑略記　二十九　後冷泉天皇　天喜（康平元）六年戊戌二月廿六日、內裡幷中和院、大極殿、東西樓、廻廊、朝集堂等皆悉燒亡、

後三條天皇　七十二代、諱尊仁、治五年、（中略）

扶桑略記　二十九　後三條天皇　後朱雀院第二皇子、（中略）治曆四年戊申七月廿一日辛卯、行幸太政官、未二剋天皇卽位官廳、大極殿未造故也、

安德天皇卽位の禮を紫宸殿に於いて擧げたまふ

百錬抄（四後冷泉院）　康平元年二月廿六日、新造內裏幷中和院、大極殿、東西樓、朝集堂等燒亡、

百錬抄（五後三條院）　後三條天皇、諱尊仁、四年、

後朱雀院第二皇子、（中略）治曆四年七月廿一日、卽位卅五、于太政官廳、大極殿未成之故也、

百錬抄（八高倉院）　治承元年四月廿八日、亥刻火起自樋口富小路、火焰如飛、八省、大極殿、小安殿、青龍、白虎樓、應天、會昌、朱雀門、大學寮、神祇官、八神殿、眞言院、民部省、式部省、南門、大膳職、勸學院等拂地燒亡、大內免其難、此外公卿家十餘家爲灰燼、皇居閑院、依近々、主上駕腰輿、行幸正親町邦綱卿第、凡東限富小路、西限朱雀、南限樋口、北限二條、凡百八十餘町、此中人家不知幾萬家、希代火災也、近年連々有火事變異、果而如此、

大極殿燒亡例、

清和天皇　貞觀十八年四月十日丁巳

後冷泉院　天喜六年二月廿六日丁卯、（造畢之後經百八十年、）

高倉院　治承元年四月廿八日、（延久四年造畢之後經百十二年、）

此後無造營

治承四年四月廿二日、（安德）天皇卽位紫宸殿、當時大極殿未被造畢、任治曆之例、於太政官廳可被行哉否、兼日有其議、被問才卿、康保之例雖非規模、可被用南殿（紫宸殿）之由、右大臣（藤原兼實）被計申也、

玉葉　治承四年四月廿二日甲辰、此日天皇卽位於紫宸殿、奉秋三歲、大極殿火災以後、未企土木之故也、粗撿先規、於他所卽位之例、古來三ヶ度、所謂陽成院、（依大極殿災、於冷泉院、依惱、於紫宸殿有此禮、）後三條院（大極殿及紫宸殿共災、仍於官廳有此禮、）依豐樂院有此禮、等也、今度紫宸殿與太政官廳、於何處可被行此儀哉之由豫以議定、被問公卿九人及兩大外記、大夫史等、遂所被用此殿也、

五山承記　元曆元年七月廿八日甲寅、今日天皇（後鳥羽）卽位於太政官廳、（遒治曆之佳例、改門戶用此所、紫宸殿兩代例依不快也、）〔藤原定長建久六年卷〕

玉葉　壽永二年九月十九日辛巳、今日宮內權少輔親經（五位藏人、）來、余隔簾謁之、親經云、御卽位藏人方事所奉行也、然而條々事、被問人々之間事、爲兼光朝臣奉行、而依有病者、近日不出仕、仍渡文書了、先日於攝政直廬人々議定、然而未事切、若十月被遂卽位者、明日可有卽位定、仍今日承令申御狀可奏院、先日議定も未奏聞、且ハ兼光朝臣參上可承之由依令申、所參上也云々、（中略）

卽位の禮を太政官廳に於いて擧げたまへる例　後鳥羽天皇卽位

一、可被移紫宸殿高座於官廳哉否事、

申云、紫宸殿卽位、彼處不吉、何故可被執高御座哉、（中略）

一、列見、定考、於何處可被行哉事、

申云、（中略）抑被忌南殿卽位之條、中心鬱陶、然而不能上奏、治承之度、依下官議奏被用彼殿了、其例已不吉、今猶申此旨、只依執申先度之議、不顧例之吉凶歟之由、諸家各可難之、殆可爲議奏之因緣、仍雖有憚、上疏愚心之所欲、又難默止、仍粗示聞事趣於親經了、（中略）

廿九日辛卯、（中略）抑卽位猶可被用紫宸殿之由事、定有天下之嘲歟、然而全非執議奏之旨、歸爲存政教之道理令申之由申了、又申云、今般被用正殿之條、非啻貽聖意無私之美、抑又省民力有煩之愁者也、重欲奏達者可招謗難、退欲默止者難遁不忠、進退之間、偏任賢慮可被相計之狀如件者、

十月二日癸巳、（中略）御卽位之間、人々申狀、去夜返遣親經之許、返事今日到來、可用紫宸殿之由、有院宣、而依方角事其沙汰未切云々、

廿三日甲寅、（中略）

一、御卽位所幷方角事、

申云、去十四日有其沙汰、初無異議、可被用官廳之由有沙汰、而今度猶紫宸殿可宜之由議出來、而無移徙之禮之條如何之由有評定、（中略）

廿六日丁巳、申刻五位藏人親經來、問御卽位之間事、先本人々所定申者、於官廳可被行此禮之由也、

元曆元年七月廿八日甲寅、此日有卽位事、依治曆四年例、於太政官正廳被行之、

親經卿記　元曆元年七月廿八日甲寅、今日御卽位也、大極殿未復舊基、仍任延久例於官廳有此事、去年御卽位之由沙汰之時、官廳修理以下事、依不可叶康保治承等例、雖不吉時、尙以吉例可用官廳之由有議云々、而天下大事出來之間御卽位、但今度沙汰之

玉蘂　承元四年十二月廿八日壬午、此日天皇（順德）卽位太政官廳、〔九條道家建長四年薨〕

承久三年四年日次記　承久三年十一月一日庚辰、天皇（後堀河）於太政官廳卽位、早旦自閑院行幸朝所、

岡屋關白記　貞永元年十二月五日庚辰、是日天皇（四條）卽位於太政官廳、貞親、康保、治曆、治承等之外、代

土御門天皇卽位
順德天皇卽位
後堀河天皇卽位
四條天皇卽位

後嵯峨天皇即位
後深草天皇即位
龜山天皇即位
後宇多天皇即位
伏見天皇即位
後伏見天皇即位
後二條天皇即位

々於大極殿有此事、元〔近衞兼經曆以來於此官皆行之、〔正元元年薨〕

葉黃記　仁治三年三月十八日庚子、今日皇帝(後嵯峨)即位於太政官廳、道虛幷歸忌日也、然而今月日次難得之間被宥用之、於道虛者仁明、平城天皇御時之例云云、但彼上古例諸事幽玄事歟、件日尋常政猶不行之、何況天子南面之初例乎、猶可有議歟、然而庚子之壽、建久佳例可爲規模云云、

經光卿記　寬元四年三月十一日庚子、建久、仁治兩代支干相應、(中略)今日於太政官廳被行即位(後深草天皇)之大禮、

關白兼平公記　正元元年十二月廿八日、天皇(龜山)登壇踐祚之儀也、左大臣(西園寺公相)參陣奏宣命、無草、御覽了被返下、其次給位記筥、下名插筥上、即參官廳、次有行幸召仰事、幸路、留守如恆、供奉人遲參之間、及午時行幸太政官廳、御束帶如恆、出御南殿、南殿御殿通用、今日裝南殿御裝束、反閉、鈴奏有之、少納言等參官廳之間、少將伊定勤奏、乘御之間警蹕、三位中將公宗卿相交四五位居地上、是本儀歟、然而近代多立隱階腋、(下略)

文永代始公事抄　文永十一年三月廿六日癸卯、天皇(後宇多)即位于太政官廳、

大外記師顯記　弘安(正應元)十一年三月十五日庚子、是日天皇(伏見)即位於太政官廳、春秋廿四、

實躬卿記　永仁六年十月十三日丁卯、今日天皇(後伏見)春秋十一才、御即位官廳也、

一代要記　癸後二條天皇　第九十三後二條天皇、(註略)

諱邦治、後宇多院第一子、(中略)正安三年三月二十四日甲子、即位於太政官廳、

花園天皇即位
後醍醐天皇即位
稱光天皇即位
後花園天皇即位
後土御門天皇即位
即位の禮を紫宸殿に於いて擧げたまへる例
後柏原天皇即位

後伏見天皇御記　延慶元年十一月十六日庚子、今日皇帝(花園)爲即位行幸于太政官廳、

繼塵記　文保二年三月廿九日庚寅、今日於太政官廳、依可有即位(後醍醐天皇)之儀也、

滿濟准后日記　應永廿一年十二月十八日丁亥、官司行幸(稱光天皇)、十九日戊子、御即位節會酉半刻始云々、還幸子半刻計歟、

管見記　永享元年十二月廿六日、爲明日御即位(後花園天皇)行幸官司、廿七日、於官廳被行即位禮、御年十二、

大乘院日記目錄　二　寬正六年十二月廿六日(七)、御即位(後土御門天皇)、太政官廳、廿四日、

六

皇年代私記　後柏原院今上　諱勝仁　後土御門院第一皇子、(中略)

後法興院記　文龜元年閏六月廿八日甲戌、(中略)藏人頭右中辨賢房爲勅使、就御即位事條々有勅問、仰詞如此、

御即位條々、

一、由奉幣事、神祇官造立當時難叶之間、發遣之儀可如(爲脫カ)何樣哉、以准據之例、自禁中可被奉遣歟、爰康保度雖無行幸、於幣裏者於八省有之云々、然者本官搆幄屋可有發遣歟、若猶

里內立假屋可有幣裏哉否事、

一、同御拜事、准一社奉幣出御南殿（紫宸殿）可有御沙汰哉、但旬儀以前如何、非節會出御者、强不可有子細哉事、

一、今度以紫宸殿擬官正廳、可被行大禮之事、雖舊例無庶幾、澆季無力者歟、就其本御帳狹少、褰帳女房等參昇難叶間、假可被立高御座哉、御裝束色目、官調進大宮之間、隨事之體用捨可爲如何樣哉事、

一、後房事、以清凉殿東面搆御裝束、可有御禮服之着御歟、如例節會御服之時被用常御所、於御禮服之着御者可爲晴儀、御殿東面外不可有便宜所哉事、

一、堂下御裝束事、旗桙幄屋等數多可立之間、南庭狹少可爲如何樣哉、仍壞南築垣立南門代、如本式、外辨幄、外衞陣等可被搆門外哉事、

右條々大概如此、用捨可爲如何樣哉、且守舊規且以今案宜被計申矣、

七月二日戊寅（中略）

御卽位條々　勅問申詞、今日付奉行辨、

余申詞如此、注折紙如例、

御卽位條々

一、由奉幣事、當時神祇官造立誠以難計歟、准據例爲連綿上者、目禁中發遣之儀不可有豫儀哉、

一、同御拜事、准一社奉幣出御南殿御沙汰之儀何事之有乎、

一、今度以紫宸殿擬官正廳可被行大禮之處、本御帳狹少之間、可被立高御座哉否事、褰帳女房等參昇之儀於難叶者、便宜可然樣可有沙汰條不可有子細也、

一、後房事、今度之儀每年以缺略可被逐（遂カ）其節段爲肝要歟、然上者清凉殿東面最可有其便歟、

一、堂下御裝束事、壞南築垣可被立南門代條、今年南方當大將軍方幷金神方歟、雖爲假議可有其憚哉、輙難計申、可被決群議矣、

御湯殿上日記　天文五年二月二十六日

つぎよなる、けん（劍）、こうたうのないし殿、し（誰）、新ないし殿、

續史愚抄　四十九　正親町院上　永祿三年正月廿七日甲午、（正親町）天皇十四、御年四

禮、吉時未、言繼卿記、公卿補任、紹運錄、皇（中略）年私記、年代略記、家抄、往年記、

後陽成天皇卽位
後水尾天皇卽位
明正天皇卽位
後光明天皇卽位
後西天皇卽位
靈元天皇卽位
東山天皇卽位

續史愚抄　五十一後陽成院上　天正十四年十一月廿五日丙辰、(後陽成)天皇御年十六、於紫宸殿被行卽位禮、(中略)公卿補任、言經卿記、皇年私記、本朝通鑑、紹運錄、或記、年代略記、

京都御所東山御文庫記錄　(後水尾天皇)御卽位次第、慶長度、

御卽位次第

前一日裝飾紫宸殿、其裝束在指圖、

孝亮宿禰日次記　慶長十六年四月十二日壬午、御卽位、政仁、關白九條殿忠榮公、內辨應司內大臣殿信尙公、

明正院寬永御卽位記　寬永七年秋九月十二日、(明正天皇)御卽位ノ御コトアリ、(中略)大極殿ノ粧ヲウツシテ紫宸殿ニテ行ル、

道房公記　寬永廿年十月廿一日壬午、此日(後光明)天皇卽位於紫宸殿、御年十一、

宣順卿記　明曆二年正月廿三日、(後西)天皇登壇卽位日也、(中略)出御紫宸殿、御路如節會、

忠利宿禰記　寬文三年四月廿七日乙丑、今日(靈元天皇)御卽位、(中略)御卽位次第、前一日裝飾紫宸殿、一如元會儀、

永貞卿記　貞享四年四月廿八日、辰刻(東山天皇)御卽位、(中略)刻限出御于淸凉殿、(中略)着御

中御門天皇卽位
櫻町天皇卽位
桃園天皇卽位
後櫻町天皇卽位
後桃園天皇卽位
光格天皇卽位
仁孝天皇卽位

御禮服、(中略)次出御于南殿、(中略)御高御座、

御卽位記　寶永七年十一月十一日、(中御門天皇)御卽位の儀式あり、大極殿の粧をうつして紫宸殿にて行はる、

八槐記　享保二十年十一月二日丁酉、(中略)抑裝束司史生紀春淸、自去月廿六日率工匠參上、飾高御座已下、今日裝畢、里內狹少、無大極殿之間用紫宸殿、又其例不可枚擧、(中略)後土御門院以來代々用紫宸殿、(依及官司等也、依無大極殿)

三日戊戌、(中略)次(櫻町)天皇卽高御座給、

八槐記　延享四年九月廿一日戊申、此日(桃園)天皇昇壇卽位之日也、(中略)紫宸殿裝束、(中略)後土御門院以來代々用此殿立高御座、是依無別殿也、

定晴卿記　寶曆十三年十一月廿七日庚辰、今日(後櫻町天皇)卽位也、於紫宸殿被行大禮、近代連綿也、

定晴卿記　明和八年四月廿八日戊戌、是日(後桃園)天皇卽位日也、於紫宸(宸)殿被行之、

忠言卿記　安永九年十二月四日戊申、今日於紫宸殿被行(光格天皇)卽位禮、

定祥卿記　文化十四年九月廿一日辛戌、此日(仁孝)天皇被行卽位之禮、於南殿有此事、

孝明天皇卽位

明治天皇卽位

稱光天皇踐祚の後二年餘を經て卽位の禮を擧げたまふ

後柏原天皇踐祚の後二十年餘を經て卽位の禮を擧げたまふ

卽位用途の調達

菅葉　弘化四年九月廿三日己亥、天(孝明)皇御諱統仁、今日卽位也、(中略)午刻許出御于南殿、禮畢之後入御、〔五條爲定文久二年薨〕

廣橋胤光日記　慶應(明治元)四年八月廿七日辛未、天(明治)皇卽位于紫宸殿、

七　常永入道記

應永十九年八月廿九日壬午、今日讓位(後小松天皇)也、

滿濟准后日記　應永廿一年十二月十九日戊子、御卽位(稱光天皇)節會酉末刻始云々、

拾芥記　明應九年十月廿五日、今夜親王(後柏原天皇)御方踐祚、

(大永元)永正十八年三月七日、來十七日敍位、同廿一日御卽位之由被定日之處可延引否、廿一日、今日可有御卽位之處雨降之間御延引、廿二日、天晴、御卽位也、〔五條爲學天文十二年薨〕

元長卿記　文龜元年三月十二日、入夜參御前種々御雜談、御卽位事、先可及御沙汰歟、雖難成立、就其儀、彌不可被打置題目也、惣用事、國役等可爲有名無實、所詮於愚意者、唐船事可被申武家歟、此儀有入服(眼カ)者、雖爲何事、一方可成立歟、唐船事、調法大方就先年儀所令存知也、仍如此申入、誠有興申狀之由有仰、數刻之後退御前了、

和長卿記　文龜元年十二月二十三日、御卽位日次、凡爲今日歟、雖然國役之事、爲武家雖被下知、一向不致沙汰之間、如今者大禮之義(儀)急速不可事行歟、諸人呑氣畢、

元長卿記　永正八年二月十五日、廣橋中納言(守光)來、有勅問之事、御卽位反錢去年自越前到、五萬疋之外無相續之儀、御修理等先且可有沙汰歟否事也、予申云、此事舊冬從武家被申時、御談合時、若且御修理等有其沙汰者、外聞可有疑心、非御卽位併御修理料也、非實儀由無案內之者、於有巷說者、諸國之儀可致疎略、先被閣待相殘依到來可有其沙汰歟之由申入了、於于今者、雖經數日、諸國之儀無一途、所詮御修理高御座禮服方等、少々有沙汰者可爲諸國之催歟、可有計御沙汰之由申入了、

宣胤卿記　永正十四年丁丑(大將在西)、軍正月大、一日丁丑、今夜節會再興云々、(中略)御卽位依未被行無出御、被垂御簾、御在位已十七年、御卽位依無惣用不被行、末代至極、爲之如何、

十月十六日、早朝廣橋中納言(守光)卿爲禁裏御使來云々、忩出逢、仰旨、御卽位惣用近日自武家可被進之由被申之、(中略)

一、此惣用事、大內左京大夫(義興)以唐船荷物千貫可進之由申入、事及數年、猶難澁無實事、當御代已十七年也、如此延引、末代之至極、前代未聞事也、

十五年十二月三十日、御卽位事、依無惣用不及沙汰、以前十萬疋被進在御念、尤不可事足

273633

之間、不及且下行歟、傳奏廣橋大納言(守光)也、當御代御在位已十八年也、如此延引無先規、末代之至極也、

二水記　永正十七年七月十八日、從日野有使者、來月廿七日御卽位必定云々、去年御訪已拂底沈事也、

八月四日、或人語云、御卽位又可有延引歟、其謂者、武家御裝束、夏分御新調不事行、又三十萬疋之殘用途猶以闕如也、又近日右京大夫可遣勢於播磨國云々、然者不可有御警固之儀、旁先可有御延引之由、以伯三位(雅業王)今日從室町殿被申入云々、勅答之趣、延引及度々、外聞實儀、餘以不可然、就是非可有申沙汰之旨及御問答云々、有無未定也、度々延引、誠以勝事也、但武家更無御疎略事也、

十日、午刻向甘露寺亭、御卽位間事申談了、御延引十月治定云々、

十八年二月十四日、(中略)從武家萬疋被進、來月御卽位可爲治定之由傳奏令伺公申入了、

三月三日、(中略)今日御卽位、南門代柱立之、其外四神旗柱等各立之、明日入土用之間、今日立之云々、

八日、去夜武家(足利義稙)密々御出奔云々、子細何事哉、各仰天、物念無是非、但實否未定之處、伯三位馳參申入事之由了、實正定當時不隨御成敗事等多端、此儀御退屈之故歟、又式部少輔無遠慮之所爲歟、言語道斷之次第也、御卽位期日已迫之處、又可爲御延引哉、然天運未到之故也、不堪嗟嘆者也、何人不息此儀乎、晩頭候番、正親町代也、少時參御前、庭田中將同候、世上之儀被仰下、御卽位間事、不可有御延引之由被仰了、延引無盡期之間、勅定之旨尤之由存候、但對武家可有如何事哉、

廿一日、今日可有御卽位分也、早旦令用意之處、雨時々下、仍實否未定也、見物衆男女簇參、物念無是非、至巳刻許而尙添鑿、仍被延引了、

廿二日、天未晴、雖然各令用意、有無如何之由相尋奉行之處、治定之由示之、仍念參內了、老若男女如雲霞、御警固之事、右京大夫被官人圍四方御門了、午前屬晴、大慶々々、則被始行、申刻許令退出了、公私大慶何事如之、珍重々々、參仕無事、自愛此事也、

實隆公記　大永六年四月廿九日壬午、今日踐祚(後奈良天皇)也、秉燭程先入御本殿云々、

後奈良院宸記　天文五年二月廿六日、今日卽位、(中略)入夜畢、無爲無事珍重也、神慮又者聖天應護無疑、旁以種々立願也、千秋萬歲々々、

後奈良院宸記　天文四年正月三日乙丑、(中略)舊冬大內左京大夫義隆卽位總用

二十萬疋進上之由、兩傳奏右大辨宰相(勸修寺尹豐)、頭辨申(廣橋兼秀)、其返事日次在富被仰、來五日吉日之由申間、兩人可參之由被仰、

五日丁卯、右大辨宰相、頭辨祗候、去年大內左京大夫卽位總用進上之御返事被仰、又頭中將召而卽位御點人數被仰出、珍重々々、

十八日庚辰、(中略)大內左京大夫當年卽位總用進上、然共女院御事指合、然間先當年延引之由被文出也、

二月廿五日丙辰、卽位早可行之由、關白又今日所被申、雖然延引之由返答也、

四月廿三日癸丑、今度卽位總用京著之、使壽梁西堂、武家へ仰ニ而爲長老、御禮ニ香筥小檀紙十帖進上、

九月三日辛酉、大內左京大夫義隆內々申、日花門御修理、以音密萬疋進上、

關八州古戰錄

(天文)同十年七月十九日、氏綱五十五才ニテ卒去セラル、(中略)氏綱辱モ後奈良院ノ勅命ヲ蒙リ、御卽位ノ料米ニ黃金貳拾枚ヲ添テ代官ノ專使ヲ差立、豆州ノ浦邊ヨリ伊勢ノ國へ渡海ナサシメ、帝都へ進獻有之ニ付、主上叡感斜ナラス、氏綱左京大夫ニ任セラレ、且ハ執奏ノ競望ニ任セラレ、歿後ニ及共、早雲寺ヲ勅願所ニ被成下旨薄墨ノ綸旨ヲ賜フ、

正親町天皇踐祚の後二年餘を經て卽位の禮を擧げたまふ

康雄記

弘治三年十月廿七日、(正親町天皇)踐祚、(中略)踐祚次第略之、

御湯殿上日記

永祿三年正月廿七日、けふはてんきよく、御しよくゐする〳〵とめでたし〳〵、

卽位用途の調達

京都御所東山御文庫記錄

甲百九十八

(見返シ)ゑいろく二年二月十六日

御しよくゐれ事、いろやうふもとおふしめし候はきとも、むろまちとのハくつ(朽木)きにおハしまし候、御ちろらも候ハす候つるまゝ、そのゑん〳〵にちそう候へとおほをいさされ候つるにつきて、大(大友義鎭)ともも(毛利元就)のむまのろしゑやうろのため申はさいさし候ハんするやうに申候、さりなろらむろまち殿よりおほをいさされ候ハてきにて候ふとこふやう申され候へく候、とふあきの國よりハこのふろ、さつしやうのふせ候よし申候まゝ、むろまちとのよりきとおほをいさされ候ハゝ、よろこひおほしめし候へく候、まへ〳〵申入らき候おもむきも、このゑひへちき御入候ハねむ、いよ〳〵御しよくゐおなしく御しゆりろさあひとゝのふり候やうに、このたりふしゐつして御ちそう候ハ

ゝ、てうろの御さいこうにて候ハんするよし、よく〳〵申入らき候へのよし心えて申とて候、

（廣橋國光）
はろハし大納言

御そくゐ此事、大ろさろい下行ともおほをつけられ、まんてうにやうに候、それにつきて御しゆりにろさ〳〵とも、あまさいらをおハしまし候、そにうちへいしてこんと御そくゐとりおこなむれ候所む、いそき〳〵させられ候ハてハろない候ハぬ事にて候、御しゆりまての事ハ、そりろさよりも申つけさたよし申候ふとニ、むろまち殿として、きとおほをつけられ候て、あひとゝのへられ候やうに候ハゝ、めてさくよろこひおふしめし候へき、十月にとおほしめし候へハ、むや日もかき事にて候、いそきおほをられ候やうニ、よく申入られ候へく候よし、心えて申とて候、

はろハし大納言とのへ

（見返シ）
ゑいろく二年
七月十一日

正親町天皇綸旨　公爵毛利元道氏所藏

今度即位大禮無事被遂其節訖、近代送年序之處、早速被申調候、天下之美譽、國家之芳聲、何事如之、時運既到、忠勤嚴重、叡感不淺者、天氣如此、仍執達如件、

（永祿三年）
二月十二日　右少辨晴豐

毛利陸奥守殿（元就）

正親町天皇女房奉書　公爵毛利元道氏所藏

（端裏書）
仰　永祿三、二、十二、

こんを御しよく位の事、をは〳〵ととけおこかむれ候、しろしかろら、そりちそう申候いるゆへ、しやうしゆ候ぬる、ちうをつろたりもかき事にて、よろこひおふしめし候、もと就にさいしてをんしをかされ候、おかしくむつのろしをん下に事おふをいさけき候、猶御をさくしより、よく〳〵御心え候て、おほを下され候へく候よし、心え候て申とて候、ろしこ、

（切封ウハ書）
くをんしゆ寺一位（尹豐）とのへ

正親町天皇綸旨　公爵毛利元道氏所藏

後西天皇踐祚の後一年餘を經て即位の禮を擧げたまふ

今度即位大禮無事被遂其節訖、近代送年序之處、早速被申調候、天下之美譽、國家之芳聲、何事如之、時運既到、忠勤嚴重、　叡感不淺者、天氣如此、仍執達如件、

（永祿三年）二月十二日　　右少辨晴豐

毛利大膳（隆元）大夫殿

正親町天皇女房奉書　公爵毛利元道氏所藏

（端裏書）仰　永祿三、二、十二、

こんを御しよくゐの事、をる〳〵とおこかはれ候、しろしかから、そりちそう申候ける
ゆへ、むや〳〵としやうしゆ候ぬる、ちうしうろたりもなき事にて、よろこひおふしめ
され候、あらもとにさいしてをんしをかされ候、おかしく大せんの大夫此事おほをい
さされ候、猶御をたくしより、よく〳〵御心え候て、おほを下され候へく候よし、心え候
て申とて候、らしこ、

（切封ウハ書）くをんしゆ寺一位（尹豐）とのへ

宣順卿記　承應三年十一月廿八日、今日踐祚（後西天皇）、（中略）未刻許劍璽渡御、

明曆二年正月廿三日、天皇登壇即位日也、

宣順卿記　承應二年六月廿三日、午刻內裏不殘炎上、

三年十一月十八日、自今日禁裏御造營始、

明曆元年十月十一日、自今夜被行安鎭大法、

十七日、安鎭結願、

廿一日、巳刻內裏上棟、

十一月十日、巳刻遷幸土御門殿、

忠利宿禰記　承應二年六月廿三日巳、至午刻人來申云、大內炎上也、

廿七日、（中略）

南殿御裝束幷節會具等炎上紛失之覺　行事官

一、御帳臺　一組

一、同御帷　四帖內貳帖破殘申候

一、御倚子　一脚

一、御臺盤　一脚

伸恭天皇卽位の禮を擧げたまはず

一、御火櫃　一口
一、劔璽御案　貳脚但是ハ紛失歟
一、大宋御屛風　一双
一、通障子　一基
一、壁代　五帖
一、御卽位四神旗　七組
右之分炎上仕候
（中略）
承應貳年六月廿七日　行事官忠治上

八百錬抄　順徳天皇

承久三年四月廿日甲戌、今日有御讓位事、申刻（久我通光）内大臣以下參入、
天皇（仲恭天皇）大炊殿、皇太子懐成御閑院、被渡劔璽（九條道家）新攝政已下諸卿相從之、
七月八日庚寅、今日、（中略）（仲恭）主上密々渡御九條殿云々、九日辛卯、持明院入道宮（後堀河天皇）御年十歳、
有御踐祚事、關東申行之、

皇帝紀抄　八順徳院　皇太子懐成親王、（中略）承久三年四月廿日、受禪、七

承久三年四月廿九日、廢之、不登壇卽位、

一代要記　庚順徳天皇　太子廢帝

諱懐成、順徳院太子、號前春宮、（中略）承久三年四月二十日甲戌、受禪於閑院殿、年四歳、同七月九日、退位、在位八十二日、無卽位大嘗會等、仍不入王代、

歴代編年集成　二十四　第八十五諱懐成、第八十五代後廢帝諱懐成、（中略）

承久三年四月二十日甲戌、受禪於閑院會不被行以前退下、世稱半帝、

類聚大補任　七　第八十五諱懐成、廢帝

戊、受禪、四歳、不及卽位大祀、同七月八日退下、東國武士沙汰、

神皇正統記　廢帝、諱は懐成、順徳の太子、（中略）承久三年春の比より、（後鳥羽）上皇おぼしめし立事ありけれは、俄に讓國し給ふ、順徳御身をかろめて合戰のことをもひとつ御心にせさせ給はん御はかりことにや、（仲恭）新主に讓位ありしかと、卽位登壇までもなくて軍やふれしかは、外舅攝政道家の大臣の九條の第へのかれさせ給ふ、三種神器をは閑院の內裏にすてをかれにき、讓位ののち七十七ケ日の間、まはらく神器を傳え給ひしかとも、日嗣にはくはへ奉らす、飯豐の天皇の例になそらへ申にこそ、

九言成卿記　慶應三年正月九日、辰刻衣冠、奴袴、垂纓、助所勞詰參仕了、今日踐祚（明治天皇）當日恐

悦新帝江申上、附于御帳了、改指袴候詰、

明治元年辰年八月廿七日、今日卽位大禮被行云々、然而天皇以下尋常御束帶不被着禮服、奇代之次第、總テ今案事云々、參仕公卿已下、去廿五日任傳聞注置了、可見合、御作法雨儀云々、可尋、依重服萬事不知之、諸官人着衣冠一拜云々、公卿承明門內東間列立、西上北面也、拜舞云々、

高御座、日月旛幡以下、嘉永燒失云々、以御帳臺爲高御座代、萬歲幡以榊替之振之云々、禮畢親王稱之云々、

總而今案異先例云々、末代亂世無是非了、

公卿內辨內府忠禮、親王本人參仕、新例云々、

大納言季知、重胤、中納言爲理、宣命使、依雨儀無練歩、宣命高稱讀云々、

新規

參議勝長　大將代云々　信堅、定國、　少納言宣定朝臣

宰相中將通益

辨長邦朝臣　階下次將左宗有　公香　公義

右通致　保建　師前

橋本實麗手記　慶應三年正月九日甲子、今日踐祚也、

明治元年八月廿七日辛未、今日天皇卽位也、(中略)大名東庇、輔相已下東西廻廊云々、式井庭上之儀惣而新儀、尙委尋可記、

廣橋胤光日記　慶應四年八月二十七日辛未、天皇卽位于紫宸殿、被廢中古之禮服、

無高御座、黑漆臺有朱欄杆幷彫物、上置御帳臺、庭上置地球圖、被用雨儀御作法、建五色旗十二、上附鏡劍幷榊葉志手、其御作法略如先例、只九等之人々列座是異、

速見家日記　慶應四年八月廿七日

一、今日主上御卽位御當日也、今度被廢唐禮、和樣ノ古義ヲ被用云々、

上下一同禮服ニ無之、尋常束帶也、高御座代平常之御帳臺御用ヒ云々、萬歲ノ旗以下無之、主上香ヲ被燻、天帝御拜も無之旨也、承明門下ニ地球混天掛ヲ被設云々、

卽位新式抄　子爵福羽發三氏所藏

古來天皇陛下卽位ノ御儀式、上古ハ上古ノ式アリ、中古ハ中古ノ式アリ、近古ハ近古ノ式アリ、(明治)今上陛下御卽位ニ付キ大禮行ナハセラレシ場合、卽チ舊儀ノアル所ト新ニ設ケラルベキ儀式トヲ併セテ行ナハセラルベク治定セリ、是ニ依テ其新式ヲ取調ブベ

キ旨命ヲ蒙リ美靜（細羽）謹デ之ヲ務メタリ、（中略）

御卽位中最モ重キモノハ、高御座御登壇ノ場合、其御儀式之ヲ重ンズベキコトス、其高御座ノ式、上古ノ儀式、自カラアリシコトナルハ明カナレドモ、其明細ナルコヲ知ルニ由ナシ、中古ノ儀式之ハ近古迄モ其形ヲ同ジクシタルモノニテ充分結構ナルモノナリ、其圖別ニアリ、其之ヲ造ルノ日月又久シキヲ要ス、故ニ今般ハ其御式ノ高御座ヲ止メラレ、御帳臺ヲ以テ高御座ニアテラレタリ、是ハ今後ノ儀ハ別ニ御定メアルベキコトナリ、今般ノ圖、御裝飾方、御登壇ノ次第別紙ニアリ、

御儀式鋪設整ヒテ奏スル時、出御直チニ高御座ノ壇ニ登ラセラル、其御前ニ設ケアル所ノ地球儀、我日本國ノ正面ヲサシテ御足ヲ上ゲ給フコト左右左ナリ、コレ御卽位式中ノ最モ重キ所ナリ、此時彼ノ御卽位ノ宣命及壽詞等ノ式アリ、委細ハ別冊ニ之ヲ記載ス、此高御座今度ハ至急ナル儀ニ付キ、假リニ御帳臺ヲ以テ用キサセラル、此式畢リテ入御ナリ、

今度ノ御儀式ハ、彼ノ上代ノ高御座ノ御登壇ハ、專ラ古事ヲ擧ゲサセラレ、其結構ハ後世ノ美ヲ用キ給フコトナガラ、右御登壇ノ節、服御ハ、中古ハ衮冕十二章ノ御服ナリシヲ、

卽位の禮及び大嘗祭は京都に於いてこれを行ふ

此儀ハ今般廢止ニ御治定ナリ、其他唐土ノ歷史ヲ以テ用キサセラレタル旗、其他夫々ニ類スル品々ハ、悉ク廢止ニ御治定ナリ、偖之ニ代フルニ、專ラ我國固有ノ道ヲ取調ブベキ定メニテ、彼ノ榊ノ枝ニ鏡劍璽等モ付ケサセラレ、夫レヲ以テ神代以來ノ大禮ニ用キサセラレタルナレバ、之ヲ以テ宜シト方圖ノ如シ、但シ前ニ述ルガ如ク、今般ノ御方、決シテ至レリ盡セリトハ云ヒ難シ、將來ノ御次第ハ至急ノ儀ニ付キ、其儀ヲ飾ルノ設ケテ、尙宜シキヲ加ヘサセラルベキコトナルベシ、

10 皇室典範義解　第二章　踐祚卽位

第十一條　卽位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

恭テ按スルニ、天智天皇稱制ノ後、更ニ卽位ノ禮ヲ行ハレシ以來、歷代相因ルノ大典トナレリ、文武天皇紀ニ載セタル卽位ノ詔ニ、集侍皇子等、王、臣、百官人等、天下公民諸ゝ聞食ト詔ルトアルハ、蓋上代ノ遺例ニシテ、皇族以下百官人民ヲ集メテ詔命ヲ天下ニ布キタマヒシナリ、卽位ノ古禮ノ史乘ニ見エタルハ、持統天皇紀ニ、物部麻呂朝臣樹大盾、神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢、忌部宿禰色夫知奉上神璽劍鏡於皇后、皇

后卽天皇位、公卿百僚羅列、匝拜而拍手焉トアルヲ始トス、此ノ前孝德紀ニ見エタレトモ備ハラス、卽位ノ式ハ太極殿ニテ行ハレ、冕服ヲ服シ、高御座ニ卽キタマフ、貞觀儀式、冷泉天皇御惱ニ由リ紫宸殿ニテ行ハル、其ノ後太極殿災廢シテ、或ハ太政官廳ニテ行ハレ、或ハ南殿卽紫宸殿、ニテ行ハレタリ、武門政ヲ專ニスルノ時、用度供給セスシテ、踐祚ノ後數年ヲ經ト雖、猶大禮ヲ行ハレサルコトアリシ、維新ノ後、明治元年八月二十七日卽位ノ禮ヲ擧行セラレ、臣民再ヒ祖宗ノ遺典ヲ仰望スルコトヲ得タリ、十三年車駕京都ニ駐マル、舊都ノ荒廢ヲ嘆惜シタマヒ、後ノ大禮ヲ行フ者ハ、宜ク此ノ地ニ於テスヘシトノ旨アリ、勅シテ宮闕ヲ修理セシメタマヘリ、本條ニ、京都ニ於テ卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行フコトヲ定ムルハ、大禮ヲ重ンシ、遺訓ヲ恪ミ、又本ヲ忘レサルノ意ヲ明ニスルナリ、

官報　號外　明治四十二年二月十一日

皇室令第一號

登極令

第四條　卽位ノ禮及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ（第二項略ス）

第五條　卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行フトキハ其ノ事務ヲ掌理セシムル爲宮中ニ大禮使

ヲ置ク（第二項略ス）

第六條　卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行フ期日ハ宮內大臣國務各大臣ノ連署ヲ以テ之ヲ公告ス

第七條　卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行フ期日定マリタルトキハ之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮神武天皇山陵竝前帝四代ノ山陵ニ奉幣セシム

第十一條　卽位ノ禮ヲ行フ期日ニ先タチ天皇神器ヲ奉シ皇后ト共ニ京都ノ皇宮ニ移御ス

第十二條　卽位ノ禮ヲ行フ當日勅使ヲシテ之ヲ皇靈殿神殿ニ奉告セシム（第二項略ス）

第十五條　卽位ノ禮及大嘗祭訖リタルトキハ大赦ヲ賜フ

第十六條　卽位ノ禮及大嘗祭訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮神武天皇山陵竝前帝四代ノ山陵ニ謁ス

第十七條　卽位ノ禮及大嘗祭訖リテ東京ノ宮城ニ還幸シタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁ス

第十八條　諒闇中ハ卽位ノ禮及大嘗祭ヲ行ハス

第三款　大嘗祭

天皇卽位の後、始めて新穀を以て皇祖及び天神地祇を請饗したまふの儀を大嘗祭と謂ふ。或は踐祚大嘗祭又は大嘗會とも謂へり。大嘗は「オホニヘ」又は「オホムベ」と訓む。上古は大嘗卽ち新嘗にして、其の區別なかりしが、中世以後、毎年行はるゝ新嘗祭に對し、一代に一たび行はるゝを大嘗祭と稱するの例を爲せり。大嘗祭は之を他の祭祀と區別して特に大祀と稱す(一)。

大嘗祭の起原は、遠く之を神代に求むべきことは、日本書紀に、天照大神、天忍穗耳尊を斯土に君臨せしめたまはんとするに當り、神器と共に齋庭の瑞穗を授けたまひ、瓊瓊杵尊の皇妃吾田鹿葦津姫は、ト定田の稻を以て新嘗を行ひたまひしことを記せるに依り、之を察することを得べく、又台記別記康治元年十一月大嘗祭の條所載の天神壽詞に「皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉弖天降坐之後仁」とあるに依りても、其の由來する所を徵すべし(二)。

上古に於いて、天皇卽位の後、大嘗祭を行ひたまひしことは、日本書紀淸寧天皇紀二年十一月の條に「依大嘗供奉之料遣於播磨國司(下略)」と見え、同書顯宗天皇紀卽位前紀には「白髮(淸寧)天皇二年冬十一月播磨國司(中略)親辨新嘗供物」と見え、又同書用明天皇紀二年四月の條に「御新嘗於磐余河上」と見え、同書皇極天皇紀元年十一月の條に「天皇御新嘗」と見ゆるに依り、之を窺ふを得べく、又當時に於いては、未

だ大嘗と新嘗とを區別せざりしことを知るに足る(三)。

大嘗と新嘗との區別の史に見えたるは、天武天皇の二年十一月に卽位の大嘗祭を行ひ、五年及び六年に新嘗祭を行ひたまへるを以て其の最初とす。大嘗祭を行ひたまふに、悠紀主基二國の新穀を以てしたまふ例となりしも亦、此の時に始まれるが如し(四)。

大嘗祭の次第を記せる古儀式書の今日に傳はれるは、貞觀儀式を以て其の最古のものとす。之に依れば、其の儀を行ひたまふに先だち、天皇卽位の年、豫め悠紀主基の二國を卜定し、其の國に產する新穀を以て大嘗祭の神饌に充てたまふ。大嘗祭を行ふ年には、八月下旬奉幣使を差遣して、伊勢神宮を始め五畿七道の官國幣社に幣帛を奉らしめたまふの儀あり。十一月の卯日を大嘗祭の第一日とし、當夜天皇廻立殿に渡御、御浴湯の儀終りて後、祭服を著したまひ、大嘗宮に御し、先づ悠紀殿、次に主基殿に於いて、徹宵親ら皇祖及び天神地祇を祭り、神饌を供し、又躬ら御饌を聞食したまふ。次いで辰巳兩日に悠紀主基の節會を、午日に豐明節會を行はせらる。之を大嘗祭の儀典の大綱とす(五)。

大嘗祭を行はせらるゝ神殿に付いては、貞觀儀式には、朝堂院内大極殿龍尾道の前に於いて行ふを其の制と爲せども(六)、之を史に徵するに、必ずしも一定せず。或は太政官院に於いて、或は豐樂院に於いて、或は紫宸殿の前庭に於いて行ひたまふ等種々の例あり。明治天皇は東京遷都に由り、宮城内吹上御苑に於いて行ひたまへり(七)。

大嘗祭を行はせらるゝ時期に付いては、弘仁式、貞觀儀式、延喜式及び北山抄等に據るに、七月以前に卽位の禮を擧げたまふ場合は其

の年に於いて、八月以後に及ぶ場合は其の翌年に於いて行ひたまひ、諒闇中は行はせられず、諒闇薨るを待ちて行ひたまふを常例とす(六)。されど古來異例なきに非ず。淳仁天皇は八月卽位の儀ありて十一月に大嘗祭を行ひたまひ、後白河天皇、後伏見天皇は十月卽位の儀ありて十一月に大嘗祭を行ひたまへり。又宮城造營、遷都、上皇又は女院の崩御、將軍の薨去、兵亂、災異等種々の事情に因りて、大嘗祭を延引したまひし例も亦尠からず(七)。

天皇重祚の場合には、重ねて大嘗祭を行ひたまへり。蓋し大嘗祭は、一代に必ず一たび之を行ひたまふを定例と爲すに因る(七)。

大嘗祭は、後土御門天皇の文正元年十二月之を行ひたまひてより後、兵亂相踵ぎ、朝儀亦隨ひて衰へ、其の儀中絕すること、後柏原天皇より靈元天皇に至る九代に及べり。東山天皇の貞享四年十一月

に至り、其の儀を再興したまひしが、次代中御門天皇の時には又行はれず。次いで櫻町天皇の元文三年十一月に至り、更に之を復興したまひ、爾後再び恆例と爲り、以て今日に及べり(七)。

皇室典範の制定に及び「卽位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」と定めたまひ、又登極令の制定に依り、古例に基づき、大嘗祭を行はせらるべき時期と、其の典禮とを詳細に規定したまひ、以て大嘗祭が、皇位繼承に伴ふ大祀として、卽位の禮と共に必ず之を行はせらるべきことを明らかにしたまへり(九)。

一令義解　職員令　神祇官

伯一人、掌神祇祭祀、祝部、(註略)神戸名籍、(註略)大嘗、謂嘗新穀、以祭神祇也、朝諸神之鎭魂、(註略)御巫、卜兆、(註略)惣判官事、(註略)　相嘗祭、夕者供新穀於至尊也、

代始和抄　大嘗會事　大嘗會は一代一度の大神事なり、(中略)嘗はなむる也、新穀

をなめんとして、まつ神祇にこれを供するを嘗の祭といふ、和漢の義その心おなし、大嘗も新嘗も共に十一月中の卯の日也、さたまれる例也、（中略）卯日は神膳を供せらる、（中略）祕事口傳さま〴〵なれは、たやすくかきのする事あたはす、主上のしろしめす外は、時の關白、宮主なとの外は、曾てしる人なし、まさしく天照おほん神をおろし奉りて、天子みつから神食をすゝめ申さるゝ事なれは、一代一度の重事これにすくへからす、

大嘗會儀式具釋　一　元文三年大嘗會

ら天神地祇へ供し、天子も亦きこしめしたまふ儀なり、大は大小の義には非す、尊稱なり、大嘗と云ふは御嘗の義なり、訓してはオホンベと云ふ、又新穀を供するが故に新嘗とも云ふ、

皇室典範義解　第二章　踐祚卽位

第十一條　卽位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

恭テ按スルニ、（中略）大嘗ノ祭ハ、神武天皇元年以來歷代相因テ大典トハセラレタリ、蓋天皇位ニ卽キ、天祖及天神地祇ヲ請禱セラルヽノ禮ニシテ、一世ニ一タヒ行ハ

ル、者ナリ、

令義解　二　神祇令　仲冬　下卯大嘗祭

延喜式　十一　太政官　凡踐祚之初、有大嘗祭、

文德實錄　三　仁壽元年十一月辛卯（二十三日）、帝有事於八省院、緣大嘗祭也、

平戸記　仁治三年十一月十三日辛卯、（中略）今夜大嘗祭也、

永享大嘗會記　後花園　永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、

嵯峨實愛日記　明治四年十一月十七日癸卯、（中略）今日被行大嘗祭、

儀式　二　踐祚大嘗祭儀

延喜式　一四　時祭上　凡踐祚大嘗祭爲大祀、

玉葉　元曆元年十一月十八日癸卯、此日踐祚大嘗祭也、

八槐記　元文三年十一月十九日丁卯、今夜踐祚大嘗祭也、

名目抄　恆例諸公事臨時篇　大嘗會

下學集　下　態藝　大嘗會（ジヤウエ）天子卽位之年、以其新米獻伊勢大嘗會、十一月卯日也、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年三月己酉（二十二日）、卜定大嘗會事、

大新嘗

大嘗會祭　オホニヘ

オホムベ

日本紀略　後一條天皇　長和五年十一月十五日乙卯、大嘗會、

百錬抄　十三　後堀河天皇　貞應元年十一月廿三日、大嘗會也、

滿濟准后日記　永享二年十一月十六日、今日丑日　大嘗會被始行之云々、

季連宿禰記　貞享四年十一月十六日辛卯、今日大嘗會也、

青山御所御納戸日記　明治四年十一月十七日、(中略)大嘗會御當日、

續日本紀　二十六　稱德天皇　天平神護元年十一月庚辰(二十三日)詔曰、(中略)大嘗乃政事乎取以天奉供良之念行天奈位冠賜久止宣、(中略)又詔曰、今勅久、今日方大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日仁在、

三代實錄　四十六　光孝天皇　元慶八年十月廿八日乙卯、行幸鴨河、大修禊事、天皇踐祚之年十一月、修大嘗會祭、

古事記　上　爾速須佐之男命、(中略)亦其於聞看大嘗(オホニヘ)之殿屎麻理此二字以音、散、

日本書紀　二十九　天武天皇　二年(甲戌)十二月壬午朔丙戌(五日)侍奉大嘗(オホニヘ)、(下略)

釋日本紀　二十一　祕訓六　大嘗(オホニヘ)私記說

類聚名義抄　十　雜　大嘗、オホムベ、

上古大嘗と新嘗との區別なし

古今和歌集　二十　大歌所御歌

まがねふくきびの中山おびにせる細谷川の音のさやけさ

此歌は、承和のおほむべのきびの國の歌、

八雲御抄　三下　神　大嘗會はおほんべと云

古事記　上　爾速須佐之男命白于天照大御神、我心清明故、我所生之子得手弱女、因此言者、自我勝云而、於勝佐備此二字以音、離天照大御神之營田之阿此阿以音、字埋其溝、亦其於聞看大嘗之殿屎麻理此二字以音、散、

日本書紀　一神代上　是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀、何則天照大神以天狹田長田爲御田、時素戔嗚尊春則重播種子、重播種子、此云磨枳、且毀其畔、毀此云波那豆、秋則放天斑駒、使伏田中、復見天照大神當新嘗(ニハナヒノミヤ)時、則陰放屎於新宮(ニハナヒノミヤ)、

古事記傳　八　大嘗、書紀には新嘗とあり、同じことなり、續紀廿六(二十五丁)には大新嘗ともあり、何れも意富爾閉(オホニヘ)と訓べし、(中略)さて後世には、踐祚大嘗を大嘗と云、每年のを新嘗と分て云ども、古は通し云て同事なり、

令義解　二神祇令　凡大嘗者、每世一年國司行事、以外每年所司行事、謂所司者、在京諸司預祭事者也、

大嘗祭と新嘗祭との區別

弘仁式斷簡　式部上公爵九條道秀氏所藏　踐祚大嘗會

卯日質明、掃部司設輔以下坐(座)於便處、點撿五位以上、如賀正儀、錄攣史生省掌置大掌(嘗)宮南庭版位、辰日、撿(點檢カ)點五位以上、所司供備各如掌(常カ)儀、事見儀式、

每年大嘗會

辰日質明、掃部司設座於便處、輔已下就座、五位已上就版受點、事見儀式、

儀式　二　踐祚大嘗祭儀

儀式　五　新嘗會儀

延喜式　一神祇四時祭上　凡踐祚大嘗祭爲大祀、祈年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等祭爲中祀、

代始和抄　大嘗會事　大嘗會は一代一度の大神事なり、令書にはおほむへと訓せり、每年に行はるゝをは是を新嘗會といふ、新嘗の二字、日本紀にはにゐなめとよめり、

大嘗會儀式具釋　一元文三年大嘗會　令より後の國史、貞觀、延喜等の書に至りては、御一世に一度づゝの事大なるばかりを大嘗と云ひて、每年のは新嘗と云ひ別くる事に成りて、今の世までも如此し、

光臺一覽　一　大嘗會と申は、御即位の後之初ての新嘗會之事也と心得べし、翌年よりは常の新嘗會なり、〔伊藤某歿年未詳〕

大祀

令義解　二神祇令　凡天皇即位、惣祭天神地祇、謂即位之後仲冬乃祭、下條所謂大嘗者、每世一年國司行事、是也、散齋一月、謂仲冬之月、自朔至晦、(中略)

凡一月齋爲大祀、謂上條云散齋一月、即此條稱齋者、皆散齋也、唯於一日齋、更無散齋、其致齋者、皆在散齋限內也、

延喜式　一神祇四時祭上　凡踐祚大嘗祭爲大祀

後法興院記　文正元年十二月十四日辛亥、是日亥刻(後土御門)天皇幸太政官廳、爲被行大祀也、

續神皇正統記　第九十九代崇光院、諱は興仁、(中略)天武(四十代)天皇白鳳よりこのかたは、綿々として于今不絕、一代一度の重事これを大祀といふ、神國無雙の大事は大嘗會也、

新論　下長計　夫天子祭天神地祇、其敬祭天祖、所以報天尊祖也、(中略)祀典之目、踐祚大嘗爲大祀、天皇即位、大報天祖、最宜致敬也、(中略)新嘗義如大嘗、而歲行之、以上諸祭皆爲中祀、所以養萬民、安國家、報天神者、亦宜敬也、

大嘗祭の起原

二　日本書紀　二神代下　一書曰、(中略)天照大神手持寶鏡、授天忍穗耳尊而祝之曰、吾兒

視此寶鏡當猶視吾、可與同床共殿、以爲齋鏡、(中略)又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒、

一書曰、(中略)時神(證證祈禱紀)吾田鹿葦津姬以卜定田、號曰狹名田、以其田稻釀天甜酒嘗之(ニハナヒス)、又用淳浪田稻爲飯嘗之(ニハナヒス)、

台記別記　一　康治元年十一月十六日甲辰、(中略)祭主大中臣朝臣清親本正四位上、今度叙從位、三着小忌縫腋、淺履、巡方不附魚袋云云、先例次可尋、賢木幷壽詞文取副笏、昇龍尾道東階、經公卿列前着壽詞版、(註略)跪捧笏差賢木於地、披壽詞書讀之、其音不高不微、聞堂上之程也、中臣跪時公卿又起、中臣退出、(中略)

中臣壽詞

現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇　御前仁、天神乃壽詞遠稱辭定(完カ)奉良久止申須、

高天原仁神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天、八百萬乃神等遠集倍賜天、皇孫尊波高天原仁事始天、豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天、天都日嗣乃天都高御座仁御坐天、天都御膳遠長御膳乃遠御膳止、千秋乃五百秋仁、瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉旦、天降坐之後仁、中臣乃遠都祖天兒屋根尊(命イ)、皇御孫尊乃御前仁奉仕旦、天忍雲根神遠天乃二上仁奉上旦、神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁、皇御孫尊乃御膳都水波、宇都志國乃水戶天都水遠立奉牟止申遠里、事教給志仁依旦、天忍雲根神天乃浮雲仁乘旦、天乃二上仁上坐旦、神漏岐神漏美命乃前仁申世波、天乃玉櫛遠事依奉旦、此玉櫛遠刺立旦、自夕日至朝日照万旦、天都詔戶乃太詔刀言遠以旦告禮、如此告波麻知波弱韮仁由都五百篁生出牟、自其下天乃八井出牟、此遠持旦、天都水止所聞食止事依奉支、如此依奉志任任仁所聞食須由庭乃瑞穗遠、四國卜部等太兆仁卜事遠持旦奉仕留悠紀仁近江國野洲郡主基仁丹波國氷上郡遠齋定旦、物部乃人等、酒造兒、酒波、粉走、灰燒、薪採、相候(作カ)稻實公等、大嘗會乃齋場仁持齋波利志理持、恐美恐美毛清麻(油イ)波利仁奉仕利、月內仁日時遠撰定旦、獻留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠、大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳仁遠御膳止、汁仁毛實仁毛、赤丹乃穗仁毛所聞食旦、豐明仁明御坐旦、天都神乃壽詞遠稱辭定(完カ)奉留、皇神等母千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利、堅盤常盤仁齋奉利旦、伊賀志御世仁榮志女奉利、自康治元年始旦、與天地月日共照志明良志御坐事仁、本末不傾茂槍乃中執持旦奉仕留中臣祭主正四位上行神祇大副大中臣朝臣清親、壽詞遠稱辭定(完カ)奉久止申、又申久、天皇朝廷仁奉仕留親王諸

王等、諸臣百官人等、天下四方國乃百姓諸々集侍已、見食倍尊食倍歡食倍聞食倍、天皇朝庭仁茂世仁、八桑枝乃立榮奉仕留倍禱乎所聞食止、恐美恐美毛申給波久止申、
多女都物解文、悠紀主基國司所付二通進上之、件事様不分明候、如悠紀解文者、以一方解文可申候歟、兩國付之由所見候也、又月日下雜掌判署不候、書下可候歟、就尋常版取(所カ)令奏候也、以此旨可令洩給候、朝隆申、恐々謹言、

十一月廿六日權右中辨在判

法令全書　明治四年

神祇省

第二　十一月

大嘗會ニ付先般太政官御布告有之候處、左之通重キ御趣意ニ付、此旨地方末々ニ至迄無洩深切可申諭候事、

告諭

大嘗會之儀ハ、天孫瓊々杵尊(ニニギノミコト)降臨ノ時、天祖天照大御神詔シテ、豐葦原瑞穗國(トヨアシハラミヅホノクニ)ハ吾御子(アガミコ)ノ所知(シラサムクニ)ト封シ玉ヒ、乃齋庭(ユニハ)ノ穗ヲ授ケ玉ヒシヨリ、天孫日向高千穗宮(ヒムカノタカチホノミヤ)ニ天降(アマクダリ)マシマシ、始テ其稻種ヲ播(マキ)テ新穀ヲ聞食(キコシメ)ス、是レ大嘗新嘗ノ起原也、是ヨリ御歷代年々ノ新嘗祭アリ、殊ニ御卽位繼體ノ初ニ於テ、大嘗ノ大義ヲ行ヒ玉フ所以ノ御大禮ニシテ、國家第一ノ重事タリ、其義本月卯日、宸儀食(メ)シ、天祖ノ封ヲ受玉フ所以ノ御大禮ヲ饗祀マシ〳〵、辰日高御座ニ御シテ新穀ノ饗饌ヲ聞食シ、卽酒饌ヲ百官群臣ニ賜フ、是ヲ豐明節會(トヨノアカリノセチエ)ト云フ、夫穀ハ天祖ノ授與シ玉フ所、生靈億兆ノ命ヲ保ツ所ノモノニシテ、天皇斯(コノ)生民ヲ鞠育シ、以テ其恩賴ヲ報シ、天職ヲ奉シ玉フ斯ノ如シ、然則此大嘗會ニ於ケルヤ、天下萬民謹テ御趣旨ヲ奉戴シ、當日人民休業、各其地方ノ產土神(ウブスナ)ヲ參拜シ、天祖ノ德澤ヲ仰キ、隆盛ノ洪福ヲ祝セスンハアルヘカラサル也、

三

日本書紀　十五　清寧天皇　元年(庚申)春正月戊戌朔壬子(十五日)、命有司、設壇場於磐余甕栗陟天皇位、卽

日本書紀　十五　顯宗天皇　白髮(清寧)天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、(下略)

楯、於赤石郡親辨新嘗供物、一云、巡行郡縣收斂田租也、

日本書紀通證　二十　清寧天皇　大嘗、天武紀訓於保辛倍、又訓於保爾倍、(中略)蓋大嘗之目、始出于此、而古者不必別大嘗新嘗、故顯宗紀作新嘗、

卽位の後大嘗祭を行ひたまふ

大嘗祭と新嘗祭とをひたまへる初例　天武天皇の大嘗祭　大嘗祭の次第

日本書紀　二十一　用明天皇　（敏達天皇）（乙巳）十四年九月甲寅朔戊午（五日）、天皇卽天皇位、

（丁未）二年夏四月乙巳朔丙午（二日）、御新嘗於磐余河上、

日本書紀　二十四　皇極天皇　（壬寅）元年春正月丁巳朔辛未（十五日）、皇后卽天皇位、十一月丁卯（十六日）、天皇御新嘗、

四　日本書紀　二十九　天武天皇

（癸酉）二年二月丁巳朔癸未（二十七日）、天皇命有司、設壇場、卽帝位於飛鳥淨御原宮、十二月壬午朔丙戌（五日）、侍奉大嘗中臣忌部及神官人等、幷播磨丹波二國郡司、亦以下人夫等悉賜祿、

（丙子）五年十一月乙丑朔、以新嘗事不告朔、

（戊寅）六年十一月己卯（二十一日）、新嘗、

扶桑略記　五　天武天皇　二年癸酉二月廿七日癸未、天皇卽位、（中略）十一月、大嘗會、丹波、播磨供奉其事、

年中行事祕抄　大嘗會叙位例

仁和書曰、國家大嘗會起自天武天皇御代、于時供奉神官幷國司等賜祿有差、

五　儀式　二踐祚大嘗祭儀上

天皇卽位之年、（註略）大臣奉敕召神祇官、密封令卜定悠紀

主基國郡、奏畫訖卽下知其國、（中略）次應行多毎物之狀下符兩國、（中略）八月、（中略）下旬、（中略）發遣奉天神地祇幣使、（大神宮諸王五位已上一人、中臣長一人、齋部一人、山城大和泉一人、河內和泉一人、七道各一人、中臣齋部二氏相半差之、）（中略）神祇官卜定拔穗使申官發遣、（中略）九月、（中略）是月、拔穗使在國率國郡司物部人擔夫三百人、就水淸而解除、訖至御田拔取御稻、造酒童女先之、稻實公次之、酒波次之、物部男女次之、擔夫次之、惣拔得御稻若干束、（以四把爲束、）乾之齋院、就中以先拔四束、（別納高所負稻也、）自餘爲白黑二酒料、

儀式　三踐祚大嘗祭儀中

十一月、（中略）卯日、（中略）戌刻鑾輿御廻立殿、主殿寮供浴湯、卽著祭服御大嘗宮、（中略）既御悠紀正殿、（中略）亥一刻供御膳、四刻撤之、其次第也膳夫伴造一人執火炬前行、（提盆、撰灰炭、）次采女朝臣二人左右分列、次宮主卜部一人著鬘襷執竹杖在道中央、水取一人執海老鰒盥槽次之、水部一人執多志良加次之、典水二人（一人執巾筥、一人執刀子）次之、采女八人各執供神幷供御雜物等次之、內膳司高橋朝臣一人執鰒汁漬次之、安曇宿禰一人執海藻汁漬次之、膳部六人各執供神幷供御雜物等次之、酒部四人（二人舁酒案、）次之、鷹享已畢、撤亦如之、子一刻神祇官率內膳膳部等遷於主基膳屋、料理供神饌、宸儀還御廻立殿、其儀如初、主殿寮供浴湯、訖易御服、遷御主基正殿、其儀一如悠紀、（中略）寅

一刻供主基御膳、進退亦如悠紀、

儀式　四　踐祚大嘗祭儀下　辰日、(十一月)(中略)辰二刻車駕幸於豐樂院、須臾留清暑堂、乃御悠紀帳、所司開豐樂儀鸞兩門、皇太子入自東北掖門、(待親王以下就版乃入、)親王已下五位以上左右相分、入自儀鸞門東西戸各就版、六位以下相續參入、立定、神祇官中臣捧賢木、入自儀鸞門東戸就版、跪奏天神之壽詞、(群臣共跪、)忌部奉神璽之鏡劍、共退出、親王已下共起、次辨大夫入自同門就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、(中略)巳一刻供御膳、次賜五位已上饌、(小齋悠紀國給之、大齋所司給之、)次辨官班給兩國多米都物於諸司、(中略)訖皇帝御清暑堂、未御主基帳前、皇太子以下參議以上、殿下經階下度西方、宸儀出御之後、大臣昇自西階就座、次皇太子已下亦就座、並如悠紀儀、次參議已上參入自右近陣西頭謝座酒就座、(小齋四位以下度馳道、共謝座謝酒、)訖諸仗居、次供御膳、賜群臣饌、奏國風、獻別貢物幷御挿頭等事一同悠紀、(中略)訖御清暑堂、巳日辰刻御悠紀帳、其儀一同辰日、群臣一兩巡後、悠紀人入自儀鸞門、就中庭左幄奏和舞、(十人共舞、)訖退出、次雅樂寮率樂人亦入、就同幄奏樂、未刻御主基帳、其儀同上、卽國獻物韓櫃列于殿前庭、次供御膳、次主基人等入、就中庭右幄奏田舞、(十人共舞、)訖退出、次薦御膳、次雅樂寮奏樂退出、酉刻賜祿、同辰日儀、亥刻御清暑堂、午日、(中略)時刻皇帝出自清暑堂遷御豐樂殿高御座、(中略)大臣宣、侍座依列、稱唯謝座酒就座、(中略)訖宣命大夫下殿就版、宣制云、天皇我詔旨良末止宣不大命乎衆聞食閇止宣、皇太子以下稱唯再拜、更宣云、今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食日爾在、故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食惠良岐罷止爲氐奈毛常毛賜御物賜久止宣、以次稱唯俱拜舞、(中略)乘輿還宮、

大嘗祭の神殿

六　儀式　三　踐祚大嘗祭儀中　先祭七日鎭大嘗宮齋殿地、其儀也、神祇官中臣忌部官人、(中略)入自朝堂院南掖門、(中略)到龍尾道南庭第二堂間少時跪侍、(悠紀在左、主基在右、)(中略)其宮地東西廿一丈四尺、南北十五丈、中分之東爲悠紀院、西爲主基院、

代始和抄　大嘗會事　大嘗宮は悠紀、主基各別也、大極殿の龍尾道の前にこれを造立す、これはまさしく神膳を供せらるゝ所也、

持統天皇の大嘗祭

七　日本書紀　三十　持統天皇　四年(庚寅)春正月戊寅朔、(中略)皇后卽天皇位、

五年(辛卯)十一月戊辰朔、辛卯(二十四日)、大嘗、神祇伯中臣朝臣大島讀天神壽詞、乙未(二十八日)、饗公卿以下至主典、幷賜絹等各有差、丁酉(三十日)、饗神祇官長上以下至神部等、及供奉播磨國因幡國郡司以下至百姓男女、幷賜絹等各有差、

文武天皇の大嘗祭

續日本紀　一　文武天皇　八月(元年)甲子朔、受禪卽位、庚辰(十七日)、詔曰、〔二一頁參照〕

元明天皇の大嘗祭

元正天皇の大嘗祭

聖武天皇の大嘗祭

孝謙天皇の大嘗祭

南藥園に於いて行ひたまふ

淳仁天皇の大嘗祭

乾政官院に於いて行ひたまふ

稱德天皇（孝謙天皇重祚）の大嘗祭

二年十一月己卯（二十三日）、大嘗、直廣肆榎井朝臣倭麻呂竪大楯、直廣肆大伴宿禰手拍竪楯桙、賜神祇官人及供事尾張美濃二國郡司百姓等物各有差、

續日本紀　四　元明天皇　四年（慶雲）六月、豐祖父（文武天皇）天皇崩、秋七月壬子（十七日）、天皇卽位於大極殿、和銅元年十一月己卯（二十一日）、大嘗、遠江但馬二國供奉其事、

續日本紀　七　元正天皇　九月庚辰（靈龜元年）（二日）、受禪卽位于大極殿、（靈龜）二年十一月辛卯（十九日）、大嘗、親王已下及百官人等賜祿有差、由機（ユキ）遠江、須機（スキ）但馬、國郡司二人進位一階、

續日本紀　九　聖武天皇　二月甲午（養老八年）（四日）、受禪卽位於大極殿、（養老八年）神龜元年十一月己卯（二十三日）、大嘗、備前國爲由機、播磨國爲須機、

續日本紀　十七　聖武天皇　秋七月甲午（天平感寶元年）（二日）、皇太子（孝謙天皇）受禪卽位於大極殿、十一月乙卯（天平勝寶元年）（二十五日）、於南藥園新宮大嘗、以因幡爲由機國、美濃爲須岐國、

續日本紀　二十一　淳仁天皇　天平寶字二年八月庚子朔、是日皇太子（淳仁天皇）受禪卽天皇位於大極殿、十一月辛卯（二十三日）、御乾政官院行大嘗之事、丹波國爲由機、播磨國爲須岐、

續日本紀　二十五　淳仁天皇　天平寶字八年冬十月壬申（九日）、高野（稱德）天皇遣兵部卿和氣王、左兵衛督山村王、外衛大將百濟王敬福等、（中略）山村王宣詔曰、掛末毛久畏朕我天先帝乃御命以天、朕仁勅之久、天下方朕子伊末之仁授給、事乎之云方、王乎奴止成止毛、奴乎王止云止毛、汝乃爲牟末仁末仁、假令後仁帝止立天在人伊、立乃後仁、汝乃多米仁無禮之氐、不從奈米久在牟人乎方、帝乃位仁置許止方不得、（中略）帝位乎方退賜天親王乃位賜天、淡路國乃公止退賜止勅御命乎聞食止宣、

光仁天皇の大嘗祭

太政官院に於いて行ひたまふ

桓武天皇の大嘗祭

太政官院に於いて行ひたまふ

續日本紀　二十六　稱德天皇　天平神護元年十一月癸酉（十六日）、先是、廢帝（淳仁天皇）既遷淡路、天皇重臨萬機、於是更行大嘗之事、以美濃國爲由機、越前國爲須伎、庚辰（二十三日）、（中略）又詔曰、今勅久、今日方大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日仁在、

皇年代私記　稱德天皇　天平寶字八年甲辰十月、重祚、四十七、九年乙巳正月一日、卽位、四十八、禪位後七年、同十一月己卯（二十二日）、更大嘗會、美濃、越前、

續日本紀　三十一　光仁天皇　寶龜元年冬十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、二年十一月癸卯（二十一日）、御太政官院行大嘗之事、參河國爲由機、因幡國爲須岐、

續日本紀　三十六　光仁天皇　天應元年夏四月辛卯（三日）、（中略）是日皇太子受禪卽位、癸卯（十五日）、天皇（桓武）御大極殿、詔曰、〔二四頁參照〕十一月丁卯（十三日）、御太政官院行大嘗之事、以越前國爲由機、備前國爲

平城天皇の大嘗祭

諒闇

兵亂に依り延引す

朝堂院に於いて行ひたまふ

嵯峨天皇の大嘗祭

朝堂院に於いて行ひたまふ

須機、

日本紀略　平城天皇　大同元年三月辛巳(十七日)(桓武)、天皇崩、璽幷劍櫃奉東宮、五月辛巳(十八日)、卽位大極殿云々、

二年正月庚寅朔、上不受朝、諒闇也、二月辛酉(三日)、將有大嘗之事、伊勢國爲由貴、備前國爲須貴、十月辛巳(二十七日)、蔭子藤原宗成勸中務卿三品伊豫親王潛謀不軌、大納言藤原雄友聞之、告右大臣藤原內麿、於是親王遽奏宗成勸己反之狀、卽繫宗成於左近府、壬午(二十八日)、車駕禊葛野川、依大嘗會也、癸未(二十九日)、繫宗成於左衞士府、按驗反事、宗成云、首謀叛逆、是親王也、遣左近中將安倍兄雄、左兵衞督巨勢野足等、率兵百五十人圍親王第、十一月乙酉(二日)、停大嘗事、亂故也、

三年十一月辛卯(十四日)、奉幣帛於伊勢大神宮、以大嘗事也、是夜御朝堂院行大嘗事

日本紀略　嵯峨天皇　大同四年四月戊子(十三日)、受禪卽位於大極殿、詔曰云々、辛丑(二十六日)、參河國爲悠紀、美作國爲主基、五月甲戌(二十九日)、勅、今年停大嘗會、

弘仁元年十一月乙卯(十九日)、行大嘗於朝堂院、

園太曆　貞和五年閏六月廿五日、今日依召春宮(洞院實夏)大夫參院、及晚退出云、御卽位事此間種々有御思惟、所詮今年大嘗會尙難被行歟、然者承平例勿論之由思食、今年無大祀者、御卽位忩被行、徒大祀及翌年例無之歟、然者延引之由可被仰武家、如此仰詞、先々勸修寺前大納言注進也、(中略)

諒闇外大祀延引例、七月以前卽位年、

嵯峨天皇

大同四年四月十三日卽位

去一日踐祚

今年十一月大嘗會無沙汰

依太上天皇命、擬遷平城都、人心騷動云々、仍無沙汰歟、

弘仁元年十一月大嘗會

遷都に關し人心騷動に依り延引す

淳和天皇の大嘗祭

騷亂に依り大嘗祭の裝飾を淸素にす

日本紀略　淳和天皇　弘仁十四年四月辛亥(二十七日)、(中略)皇帝卽位、十一月癸亥(十三日)、是日右大臣藤原朝臣冬嗣、大納言藤原朝臣緒嗣等口奏曰、聖王相續、大嘗頻御、天下騷動、人民多弊、然神態不得已、須此度大嘗會、停餝省幣、天皇勅答、元不好餝、唯事神態耳者、卽大臣奏云、請令大納言緒嗣檢挍其事者、勅、依請、便以治部省廳爲行事所、唯齋院依卜筮定之、以宮內省爲悠紀所、以中務省爲主基所、作借屋用之、但齋場依例定北野、一切不用玩好金銀刻鏤等

仁明天皇の大嘗祭
八省院に於いて行ひたまふ
文徳天皇の大嘗祭
諒闇

之餝、唯標者以榊造之、用橘幷木綿等餝之、即書悠紀主基字、以着樹末、凡以清素供神態畢、
(二十日)庚午、(中略)天皇我大命良麻止云々、悠紀主基二國乃國司郡司、百姓及司々人止毛番上已上
爾御物賜布、又悠紀國乃去年言上未納、主基國乃當年庸物免賜布、又卜食流二郡司爾波特
御物加賜波止宣、

皇年代略記　淳和天皇　弘仁十四年四月廿八日(七)辛亥、即位、大極殿、(中略)同十一月(十)丁卯、(七日)大嘗會、美濃、丹波、

續日本後紀　一　仁明天皇　天長十年三月癸巳(六日)、天皇即位於大極殿、己酉(二十二日)卜定大嘗會事、以近江高嶋郡爲悠紀、備中國下道郡爲主基、

續日本後紀　二　仁明天皇　天長十年十一月丁卯(十五日)天皇御八省院修禋祀之禮、

文徳實錄　一　嘉祥三年三月己亥(二十一日)、仁明皇帝崩於清涼殿、于時皇太子下殿、御宜陽殿東庭休廬、左右大臣率諸卿及少納言左右近衛少將等、獻天子神璽寶劒符節鈴印等、夏四月甲子(十七日)、帝即位於大極殿、

文徳實錄　二　嘉祥三年十一月辛卯(十八日)、帝以諒闇故、不親祭事、所司齋潔、祇奉舊章、

文徳實錄　三　仁壽元年夏四月癸丑(十一日)、定悠紀主基等國、伊勢國爲悠紀、播磨國爲主基、

朝堂院に於いて行ひたまふ
陽成天皇の大嘗祭
豐樂院に於いて行ひたまふ
光孝天皇の大嘗祭
朝堂院に於いて行ひたまふ

並卜之所食也、十一月辛卯(二十三日)、帝有事於八省院、緣大嘗祭也、

三代實錄　一　清和天皇　天安二年十一月七日甲子、天皇即位於大極殿、

三代實錄　二　清和天皇　貞觀元年四月十五日庚子、(中略)是日神祇官卜以參河國播豆郡爲悠紀、美作國英多郡爲主基、

三代實錄　三　清和天皇　貞觀元年十一月十六日丁卯、車駕幸朝堂院齋殿、親奉大嘗祭、

三代實錄　三　陽成天皇　元慶元年(貞觀十九)春正月癸酉朔、三日乙亥、天皇即位於豐樂殿(大極殿未作、故用豐樂殿云云、)

三代實錄　三十一　陽成天皇　元慶元年夏四月十九日庚寅、卜定大嘗會國郡、悠紀美濃國席田郡、主基備中國都宇郡、並卜食、

三代實錄　三十二　陽成天皇　元慶元年十一月十八日乙卯、夜天皇御豐樂院、自供大嘗祭、王公畢會、百官供奉如式、

三代實錄　四十五　光孝天皇　元慶八年二月廿三日甲寅、天皇即位於大極殿、三月廿二日癸未、(中略)定大嘗會國、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡、並卜食、

三代實錄　四十六　光孝天皇　元慶八年十一月廿二日己卯、天皇御朝堂院齋殿、親奉大嘗會

宇多天皇の大嘗祭

醍醐天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

朱雀天皇の大嘗祭

宇多法皇の崩御に依り延引す

祭、先御悠紀殿、後御主基殿、

日本紀略　宇多天皇　仁和三年十一月十七日丙戌、（中略）天皇卽位於大極殿、

四年十一月廿二日乙卯、大嘗會、悠紀近江、主基播磨、（西一剋、）

日本紀略　醍醐天皇　寬平九年七月十三日丙戌、天皇卽位於大極殿、（春秋十三、）十四日丁亥、（中略）今日政也、以近江國依智郡爲悠紀、丹波國多紀郡爲主基、十一月廿日辛卯、天皇御八省院、依大嘗祭也、

日本紀略　朱雀天皇　延長八年十一月廿一日、天皇卽位於大極殿、（春秋六、）

承平元年七月十九日甲辰、戊時宇多院太上法皇崩於仁和寺御室、（春秋十五、）八月七日壬戌、被定行大嘗會事、十日乙丑、停大嘗會、

二年十一月十三日辛卯、大嘗會、（近江國、丹波國、）

北山抄　四拾遺雜抄下　上皇皇后崩事　法皇　承平元年七月、（宇多）法皇崩、依五月御心喪、被停大嘗會、

園太曆　貞和五年閏六月二十五日、今日依召春宮大夫參院、及晚退出云、御卽位事、此間種々有御思惟、所詮今年大嘗會尙難被行歟、然者承平例勿論之由思食、今年無大祀者、御卽位忩被行、徒大祀及翌年例無之歟、然者延引之由可被仰武家、如此仰詞、先々勤修寺

村上天皇の大嘗祭

冷泉天皇の大嘗祭

前大納言注進也、（中略）

兩御代大嘗會延引否沙汰事

朱雀院

延長八年九月廿二日受禪、十一月廿一日御卽位、承平二年十一月十三日大嘗會、

今案、承平元年七月十九日、宇多法皇御事、（子時帝御祖父、）件年八月七日、左右大臣以下諸卿參著仗座、被定行大嘗會今年可延引之由、是依法皇御事也、

白河院、（下略）

貞信公記抄　天慶九年四月廿八日戊子、幸八省院（村上天皇）卽位、

十一月十六日、大嘗祭、

大嘗會御禊部類記　公爵九條道秀氏所藏　式部卿（重明親王）親王記

天慶九年五月十三日、被定大嘗會、悠（紀）記、近江國神崎郡、主基備中國下道郡云云、

日本紀略　冷泉天皇　康保四年十月十一日丙寅、天皇於紫宸殿卽位、依不豫不御大極殿、

安和元年三月八日辛卯、大嘗會國郡卜定、去二日大略定兩國、今日被卜定郡、近江國野洲、

播磨國舘磨、十一月廿四日癸卯、戊剋天皇遷御八省院、依大嘗會也、

日本紀略　圓融天皇　安和二年九月廿三日丁卯、天皇卽位於大極殿、
天祿元年十一月十七日乙卯、大嘗會、仍天皇幸八省院、悠紀近江、主基丹波、

日本紀略　花山天皇　永觀二年十月十日丙戌、天皇卽位於大極殿、
寬和元年二月三日戊寅、大嘗會國郡被定之、悠紀近江、主基丹波、十一月廿日庚寅、於大極殿大嘗會、依豐樂院破壞也、

歷代編年集成　十七　花山天皇　永觀三年十一月廿一日辛卯、大嘗會、悠紀近江國高島郡、主基丹波國天田郡、御屛風佐理書之、

皇年代略記　華山院　永觀二年甲申十月十日、卽位、大極殿（中略）
寬和元年十一月廿一日辛卯、於大極殿豐樂院破壞、院大嘗會、近江、丹波、

日本紀略　一條天皇　寬和二年七月廿二日戊子、天皇卽位於大極殿、十一月十六日庚辰、於豐樂院大嘗會、近江國野洲郡、備中國下道郡、

一代要記　丁　一條院　寬和二年七月二十二日、卽位于大極殿、（中略）十一月十五日、大嘗會、近江、備中、

一條天皇の大嘗祭　豐樂院に於いて行ひたまふ

一條天皇の大嘗祭　大極殿に於いて行ひたまふ

八省院に於いて行ひたまふ

圓融天皇の大嘗祭　八省院に於いて行ひたまふ

花山天皇の大嘗祭

日本紀略　三條天皇　寬弘八年六月十二日乙卯、一條院天皇逃位於新皇（三條天皇）、春秋三十二、八月十三日甲寅、大嘗會國郡卜定、近江國坂田郡、丹波國矢田郡、十月十六日乙卯、天皇（三條）卽位於大極殿、廿四日癸亥、戊刻冷泉院太上皇崩于南院、春秋六十二、廿八日丁卯、（中略）於朱雀門大祓、依停大嘗會也、十一月十六日乙酉、戊刻天皇於倚廬著御服、殿上侍臣皆著之、天下諒闇、廿二日辛卯、大嘗會停止之、

大鏡　一　冷泉院　寬弘八年辛亥十月廿四日、御歳六十にてかくれおはしましけるを、（寬弘九）長和元年十月十二日丙午、諒闇了、大祓、十一月廿二日乙卯、依大嘗會、天皇行幸八省院、悠紀近江國、主基丹波國、
三條院位につかせ給としにて、大嘗會などのののびけるをぞ、（を）おりあしとよの人申ける、

日本紀略　後一條天皇　長和五年二月七日壬午、天皇卽位於大極殿、十一月十五日乙卯、大嘗會、入御自陽明門、左右（道長、顯光）大臣以下諸卿步行、近江、備中供其事、

扶桑略記　二十八　後朱雀天皇　長元九年丙子七月十四日（行）丙戌、卽位大極殿、十一月十七日、大嘗會、近江、丹波供奉其事、

寬德二年乙酉正月十六日癸酉、天皇讓位於皇太子親仁（後冷泉天皇）親王、十八日、太上天皇（後朱雀）春秋卅七、

三條天皇の大嘗祭

冷泉上皇の崩御に依り延引す

八省院に於いて行ひたまふ

後一條天皇の大嘗祭

後朱雀天皇の大嘗祭

後冷泉天皇の大嘗祭

後朱雀法皇の崩御

於東三條第崩、

扶桑略記　二十九　後冷泉天皇　寬德二年乙酉四月八日甲午、天皇卽位於大極殿、

寬德（永承元）三年丙戌十一月十五日辛卯、大嘗會、近江、備中供奉悠紀主基、

後三條天皇の大嘗祭

扶桑略記　二十九　後三條天皇　治曆四年戊申七月廿一日辛卯、行幸太政官、未二剋天皇卽位官廳、大極殿未造故也、十一月廿二日辛卯、大嘗會、近江國愛智郡、備中國英賀郡供奉悠紀主基、

白河天皇の大嘗祭

扶桑略記　三十　白河天皇　延久四年壬子十二月廿九日癸卯、卽位大極殿、

後三條法皇の崩御に依り延引す

延久五年癸丑五月七日庚戌、太上天皇（後三條）春秋四十崩、

大極殿に於いて行ひたまふ

延久六年（承保元）甲寅十一月廿一日乙卯、大嘗會、近江、丹波供奉、

百錬抄　五　白河院　承保元年十一月、大嘗會、於大極殿被行之、豐樂院未作之間、於官廳可被行歟之由有議定、遂於大極殿所行之、

園太曆　貞和五年閏六月二十五日、今日依召春宮大夫參院、及晚退出云、御卽位事、此間種々有御思惟、所詮今年大嘗會尙難被行歟、然者承平例勿論之由思食、今年無大祀者、御卽位念被行、徒大祀及翌年例無之歟、然者延引之由可被仰武家、如此仰詞、先々勸修寺

前大納言注進也、（中略）

兩御代大嘗會延引否沙汰事

朱雀院、（中略）

白河院

延久四年十二月八日受禪、同廿九日御卽位、承保元年十一月（衍カ）卅日御禊、十一月廿一日大嘗會、

今案、承保元年十月三日、上東門院御事、（于時帝御曾祖母、）今年大嘗會御禊延否間事、及諸道勘文遂被行之、

私勘

白河院

延久四年十二月廿九日卽位、（去踐祚、八日）同五年五月七日、後三條院崩、

依此事今年不被行大禮

承保元年十月三日上東門院崩、同十一月大嘗會也、愚推三箇年大祀延引不可然之由若及沙汰歟、

堀河天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

鳥羽天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

崇德天皇の大嘗祭

扶桑略記　三十堀河天皇　應德三年丙寅十二月十九日辛卯、天皇年始八歲、卽位於大極殿、

應德（寬治元）四年丁卯十一月十九日丁卯、大嘗會、近江、備中供奉其事、

本朝世紀　寬治元年十一月十九日丁卯、大嘗會也、戌刻天皇從堀川院御八省、

中右記　嘉承二年十二月一日壬午、今上（鳥羽）御卽位也、

天仁元年十一月廿一日卯、（中略）戌四點行幸成、鳳輦出自建禮門入自昭訓門、於龍尾道上、當東石階程也、移駕腰輿也、（中略）亥一刻令入悠紀神殿給、（中略）入御主基神殿、供神物如式、如初、

皇年代略記　鳥羽院　嘉承二年十二月一日壬午、卽位、大極殿、（中略）天仁元年十一月廿一日丁卯、大嘗會、近江、丹波、

中右記　保安四年二月十九日癸卯、御卽位（崇德天皇）也、

玉蘂　建曆二年十月廿日壬辰、（中略）

大嘗會以前入月行幸例、（中略）

保安四年十一月十八日、大嘗會、

近衛天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

後白河天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

皇年代略記　崇德院　保安四年二月廿九日（十）癸卯、卽位、大極殿、（中略）十一月十八日丁卯、大嘗會、近江、備中、

百錬抄　七近衛院　近衛天皇、諱體仁、十四年、

鳥羽院第六皇子、（中略）永治元年十二月廿七日、卽位、三歲、

本朝世紀　康治元年七月廿七日戊午、左大臣（源有仁）、權大納言源雅定卿、（中略）參仗座、卜定大嘗會國郡、悠紀近江國野洲郡、主基丹波國氷上郡、

十一月十五日癸卯、大嘗祭也、（中略）戌刻天皇自一本御書所、臨幸八省大嘗宮、

兵範記　久壽二年八月廿日乙未、（中略）入夜權大納言宗能、公敎、已上直衣、左衛門督重通、衣冠、右衛門督公能、右大辨朝隆、以上束帶、參會御直廬、殿下（藤原忠通）御坐簾中、有御卽位等議定、任式文、依七月受禪、十月廿六日庚子、御卽位（後白河天皇）、同廿九日癸卯、御禊、十一月、大嘗會云々、頭辨存僉議旨、參鳥羽殿奏院了云々、

十月廿六日庚子、今日有御卽位事、于時御一本御書所、豫爲此儀、去廿日所遷幸也、

十一月廿三日丁卯、（中略）秉燭天皇幸大嘗會、鳳輦、（中略）乘輿入御昭訓門、於龍尾壇移御腰輿、入御廻立殿、次供浴、（中略）次著御祭服、入御悠紀神殿、（中略）改召祭服、入御主基

二條天皇の大嘗祭

六條天皇の大嘗祭

神殿、

爲親記　久壽二年十一月廿三日丁卯、今日引大嘗會標山、（中略）今日及午剋先引標山相竝引也、東悠紀近江、西主基丹波、

兵範記　保元三年十二月二十日丙午、今日有御卽位（二條天皇）事、（中略）

玉藻　建暦二年十月廿日壬辰、（中略）大嘗會以前入月行幸例、（中略）

平治元年十一月廿三日、大嘗會也、

皇年代略記　二條院　保元三年十二月廿日丙午、卽位、大極殿、（中略）平治元年十一月廿三日癸卯、大嘗會、近江、丹波、

山槐記　永萬元年七月廿七日甲戌、（中略）今日有御卽位（六條天皇）、

兵範記　仁安元年十一月十五日乙卯、有童女御覽事、

十六日丙辰、（中略）今夜節會、兩國供奉大極殿御裝束、其儀、（中略）兩國標曳立龍尾道庭中、兩國多米都物昇立昌福延林兩堂前庭中、

十七日丁巳、亥剋主上出御大極殿、（中略）次出御悠紀帳中、（中略）次出御主基帳、（卽入御云々、）

高倉天皇の大嘗祭

八省院に於いて行ひたまふ

安德天皇の大嘗祭

高倉上皇の崩御に依り延引す

皇年代略記　六條院　永萬元年七月廿七日甲戌、卽位、大極殿、（高倉天皇）仁安元年十一月十五日乙卯、大嘗會、近江、丹波、

兵範記目錄　仁安三年三月廿日、於大極殿卽位、（高倉天皇）

兵範記　仁安三年四月廿八日己未、大嘗會國郡卜定、

悠紀　近江國甲賀郡、卜乙下合、

主基　備中國賀夜郡、卜乙下合、

十一月廿二日己卯、（中略）次大嘗宮儀、（中略）次行幸、（中略）著御八省東廊、（中略）留久禮都古入御昭訓門、於龍尾道東階壇上敷筵、其上並居御輿、移駕腰輿、（中略）亥一剋入御悠紀神殿、（中略）次渡御主基神殿、次第如初、

百錬抄　八　高倉院　治承四年四月廿二日、天皇（安德）卽位紫震（宸）殿、（中略）六月二日、行幸攝津國福原、法皇（後白河）（高倉）新院同以臨幸、貴賤上下出平安舊城、赴攝州新都、今日著御寺江頓宮、翌日乘御船著御福原、世專號之遷都、八月十二日、於新院被定今年大嘗會延否幷方忌等事、

百錬抄　九　安德天皇　養和元年辛丑正月十四日、太上天皇崩于六波羅賴盛卿亭、御年廿一、號高倉院、

遷都に依り延引す

壽永元年十一月廿四日、大嘗會也、去年空不被行之、今年所被遂行也、

歷代編年集成　二十二　安德天皇　養和元年辛丑、（中略）去年遷都、今年諒闇、大嘗會不及沙汰、凡踐祚大嘗、七月以前卽位者當年行事、八月以後者、明年行事、二年延引無例云々、壽永元年壬寅十一月、大嘗會、悠紀近江國野洲郡、主基丹波國氷上郡、御屏風朝方、今（伊）經書之、

玉葉　治承四年六月十五日丙申、早旦大夫史隆職來、談遷都之間事、（中略）

一、大嘗會事、

右依式文、今年可被行之處、期日以前、宮城若難出來者、於何處可被行乎、遷都云、大嘗云、彼是共大營也、同時被遂行者、諸國煩多、民力定疲歟、何樣可被進退哉、

以前條々殊加斟酌、可令計言上給者、依新院御氣色言上如件、以此旨可令申上給、經房恐惶頓首謹言、

申云、謂大祀、謂遷都、共是國家重事也、相並被行者、國費多歟、暫還御舊都、被遂大嘗會之後、一向有遷都之沙汰尤宜歟、且是表神事之不輕、欲遷都之無煩之故也、但遷都事、必可被念行者、又以勿論雖須延行大祀、撰式以來曾無此例、仍新宮之造營、併難終其功者、猶可備禮儀之所々、成不日之功、可被果遂歟、其條不可叶者、縱雖無例、延引之外又如何、

經房云、外記勘申云、七月以前卽位之主、明年被行大嘗會之例、大同、弘仁是也云々、

申云、若是撰式以前事也、不足爲例者歟、

又云、於離宮被行大嘗會如何、是新都造營難叶、仍當時御在所等少々造加舍屋被行如何云々、

申云、於離宮被行大祀之條、縱雖有古昔之例、事難遵行歟、

八月八日戊子、（中略）酉刻頭辨經房朝臣送札云、來十二日以前可參入福原、新院御氣色者、禮紙云、大嘗會事可被豫議云々、申依疾重不耐參入之狀、傳聞、去朔日、爲時忠卿奉行召經房朝臣、大嘗會猶今年可被行、於當時御在所福原可被行、可申沙汰之由被仰下云々、而經房朝臣依申可被問人々之由、可及衆議云々、（藤原經宗）左大臣及堀川納言等被召、是在京之輩之內也、實定、在福原、自餘之輩强不可預衆議歟云々、

十一日辛卯、左衞門權佐光長來、日來候福原、去六日入洛云々、呼簾前問不審等、先大禮事、一定於福原可被行云々、余問云、彼地可爲帝都之由被仰歟、將又於離宮可被行大嘗會歟、

其條專不可然歟、還御古京不可叶ハ、以福原被定都地之後、可被行此禮歟如何、申云、此條無申出之人、只如承者、如形營造里內可被遂行歟、凡其間事可被問人々云々、又方角事爲被尋、召在京之陰陽師等云々、

十四日甲午、（中略）邦綱卿送札云、大嘗會猶延引之由被仰之了、明年可被行云々、是期日近々、造作不可叶之故也、人々所定申如此云々、

廿九日己酉、未剋頭辨經房朝臣來、（中略）先（藤原兼實）余示所勞子細、經房大有驚之氣色、又問遷都事、答云、福原如只今者離宮也、明後年可被造八省云々、今年五節以前可被造皇居、是禪門（平清盛）私造作也、彼人移徙之後、可被借召之儀云々、卽件離宮之傍、占置八省之地、幷可立要須之所司、此離宮卽可用內裏、於大內者不可移建云々、件指圖、源納言造進之、堀川納言又加潤色云々、凡此儀不能左右、非言語之所及歟、大嘗會事、先度有沙汰延引、今又俄有此儀、又延引之子細如何之由問之、答云、先今月朔比、以別當時忠卿被仰下云、於御前仰之、猶今年可被行大嘗會也、仍可被造營內裏、其間事、早々可令申沙汰者、爰經房乍恐申子細云、大禮今年被遂、是正禮也、而先日有沙汰延引、今迫期日之後忽有此儀、恐神事懈怠之因緣歟、何況造內裏之條、方角禁忌如何、延曆十三年自長岡京被遷平安城之時、被犯王相方、十月有遷都、而此京當北方、仍

謂之、犯以此例不可有方忌之由有儀（議）定歟、倩見沙汰次第、頗背違彼例、故何者、彼者自延曆十二年有其沙汰、內裏造畢、人家過半移住、同十三年十月遷幸之後、公事併於新都被行之、偏是遷都之儀也、於今度者、六月二日辛爾遷幸、彼時不被仰遷都之由、是一、其後雖有可被遷都之議、其地度々未定、當時御所未被定仰可爲帝都之由、已似離宮、是二、舊都人屋一人未移住、諸公事併於彼都行之、是三、以此等之儀比延曆例、聊以不符合、至不被避方忌之一事、被准用件例、道理不叶歟、加之、彼延曆例者移徙也、不可同犯土歟、自長岡京當北之條、未被打丈尺、旁貽疑殆者也、且被尋問陰陽道輩、且被仰合有職卿相尤宜歟、其議一決之後可被仰一定歟、言上子細雖有甚恐、爲後沙汰所執奏也者、時忠云、不可有方忌之由、賴業眞人所申也云々、爰新院御定云、周公營洛邑、無方忌之由令稱申云々、忽以漢家攝籙之例、難比本朝帝王之儀歟、經房申旨、一々有其謂、早以此等之趣可相觸攝政（藤原基通）者、卽參攝政第申此旨、被申可被問人々之由、歸參奏此趣、左大臣（藤原經宗）閤下、左大將（藤原實定）、都督（藤原隆季）、堀川納言等許可召之、不可及廣云々、仍各催申之處、閤下無御參、自餘四人參入、去十二日於院殿上衆議、先是去八日於脇陣、召陰陽師奉親朝臣、季弘朝臣等也、在憲遲參、幷兩大外記、大夫史等內々尋問此事、先方角事問泰親、泰親申云、先日議定之時不參會、雖不承子細、於犯土作事者、尤可被忌勿論事也、但爲禪門之沙汰被造

可然之舍屋、彼人移徙之後、被借召被用皇居可宜、公家之沙汰一切不可然者、以此趣問季弘、定時、（先日議定時、申不可有憚之由者也、）季弘申云、移徙犯土可同之由存之、而延曆已有移徙、今度犯土何事之有哉旨所存也云々、妥泰親大怒作色云、汝受誰人訓說仕公（候イ）哉、太奇怪也云々、季弘卷舌無申旨、只申可從父申狀之由、初爲諛時議、以詐僞奏君、今被糺決之日、變詞從父命、誠是謀計之由、不忠之臣也、人以謂可取召怠狀、衆庶莫不惡季弘云々、次問齋場所事於泰親、申云、忌正方也、仍不可有憚、次問大嘗會之事、又申云、先例不忌方角也者、次問大禮事於兩大外記、大夫史等、先賴業申云、大事不再擧、先度有延引之沙汰、更又有此議、非無事之憚、猶可被延引者、師尙申云、孝謙天皇於離宮有大嘗會、任彼例、今年於離宮被行、何事之有哉、隆職申云、期日已迫、次第神事可遲々歟、今年被遂行者、爲守式文也、而日來無沙汰、今月以後有沙汰者、還違式文歟、猶於今者、明年可宜者、同九日、在憲朝臣參上、申云、泰親申牒狀尤不可有異議、抑福原者、自舊都當申方角、仍非正方、無妨于造齋場所云々、兼又先日議定之場、於方角事者、一切不可有沙汰之由、別當卿有其仰、仍卷舌退出了、以季弘申狀被據用之間、成恐之處、今又有此議、素勿論不足言事也云々、以此等之趣、去十二日被仰人々、忠親卿發語云、方角事、陰陽之兩儒申旨無異、餘人不能加詞、大祀事於離宮被行、何事之有哉、但皇居爲禪門之沙汰雖可被造、其所未出來、遮大嘗會事有沙汰之條如何、被造齋場所、又以不可然、此條何樣可然哉云々、隆季云、已爲朝家大事、難申左右、可在勅定、（人以謂有頗惡氣歟、樣）左大將同忠親卿、左大臣申云、次第神事懈怠有不法之事歟、於今者延引可宜、若必今年可被遂之由有靈告者、非此限云々、奏此趣之處、可延引之由被仰下了、次第如此云々、餘雖不候愈議之場、事爲重事、仍以奉行職事御狀具注之、爲備後鑒也、

壽永元年七月十三日辛巳、（中略）申刻前大將宗盛以使者示送云、今年大嘗會年也、而追討可有憚哉否、密々可計示者、答、今年偏營大禮、被罷征伐、可謂正道、但若可及大事者、又非此限者、

十一月廿二日己丑、隆職、送今度大嘗會式、左大臣造云々、紫宸殿儀委可被載歟、而不審甚多、

廿四日辛卯、（中略）此日廻立殿行幸也、

廿五日壬辰、此日大嘗會辰日也、（中略）紫宸殿大禮今度始之、後代之主偏取今例歟、八省之造營、土木難被終功之故也、凡宴會之儀見新式、

山槐記　治承四年八月十日庚寅、（中略）出舊都參福原、一昨日亥刻爲頭辨經房朝臣

紫宸殿に於いて行ひたまふ

遷都に依り延引す

奉行、自新院有召、來十二日以前可參入云々、內々示送曰、今年猶可被行大嘗會歟之由可議定、

十二日壬辰、未刻著束帶參內、乘輿、次參新院、左大將實定、直衣、車、三條大納言實房、帶輿、東被祇候、頃之左府直衣、被參、相次帥大納言隆季、直衣、參入、良久頭辨經房朝臣參入、奉院宣仰左大臣意趣、內々書紙屋紙二通、一通者大臈權大夫泰親朝臣、掃部頭季弘朝臣、大外記頼業、大外記師尙、大夫史隆職等申狀、其後陰陽頭在憲朝臣、助濟憲朝臣參入、又後一通者、頭辨云、爲備忘各申狀粗注之、但見苦候歟、左府答何事之有哉之由被乞取、次第見下之、候座之人、左大臣、左大將、帥卿、（藤原忠親）予等也、（藤原兼實）右府依所勞不被參入、頭辨曰、非參議只各評定可申也者、然而左府猶被目予、仍予發語云、方忌事、在憲、泰親朝臣申旨一同也、尤可被憚大將軍方歟、但偏被棄舊都者、當時皇居可爲御本所、自其所可被立方忌之處、此地非遷都儀、只爲離宮云々、仍可有憚儀歟、抑禁忌方不遷本所忌之由申條、不審事也、延曆冬節遷御平安京、本所者遷忌方之條顯然也歟、然而今依右被定都、有御猶豫者、如內儀、（平清盛）入道太政大臣終土木功被新皇居、何事之有哉、但今年依可被行大嘗會、件造營之條首尾不相叶歟、其故今明雖被始造作、遂移徙之後、被罷內裏遷幸之條、今月中不可叶、而九月可被造齋場所、不被定皇居、先被定齋場所之條、不可然事也、雖似避禁忌、相待彼所造進、兼設齋場所、還有御自由之恐歟、今年新嘗會、節會以前終被造作、於大嘗會者、明年被行之可宜歟、弘仁欲有遷都、雖不被遂其事、猶大嘗會延引、今度雖非遷都儀、已被遷皇居、非無事之條、任彼吉例、明年可被行歟、於離宮被行大嘗會之條、師尙勘申例尤可相准之上、於舊都一切不可被行者、不可及議、大嘗會營無方忌沙汰之條先例也、至齋場所者、有方忌之時避正方例也、而在憲朝臣當申方之由申條、猶暗難決、委可被尋事歟者、帥卿申云、大嘗會國大祀也、神慮難測矣、左右可在勅定者、左大將申云、同予、左大臣申云、大略同予、今年强被行之條、還可有不法之恐、又齋場所幷引標之間、其地等可有沙汰者、頭辨參御所申定事趣、歸出仰云、定申旨尤可然、不可及異議、於今者各可罷出者、仍左府以下退出、頭辨送書云、定申趣尤神妙思給者、大外記師尙云、朝家大事議定、五六輩之內、應召人々有珍重之氣色、隨令定申之趣神妙、左相府、左將軍被奉同、不可申盡者、

吉記

壽永元年八月十九日丁巳、參內、殿下令參給、臨夕人々參入、謁左司郎談世事、大嘗會一切難叶、上無許容、下不應動、何況追討使下向者、近江國々勤彌難叶歟、

廿二日庚申、（中略）大嘗會延否可有議、可被遣追討使之故云々、未辨可否、近日公事、遂日

難成之由人々談之、悲哉々々、

廿五日癸亥、大嘗會不可延引、又追討使一定可發向、共可被雙鼻之由、事切了之旨、藏人辨示之、

園太暦　貞和五年閏六月廿五日、今日依召春宮大夫參院、及晩退出云、御卽位事、此間種々有御思惟、所詮今年大嘗會尙難被行歟、然者承平例勿論之由思食、今年無大祀者、御卽位念被行、徒大祀及翌年例無之歟、然者延引之由可被仰武家、如此仰詞、先々勸修寺前大納言注進也、（中略）

諒闇外大祀延引例（七月以前卽位年、中略）

安德天皇、高倉院皇子、

治承四年四月廿二日、卽位、

去二月廿一日、踐祚、

今年六月、遷都、十一月、遷幸、

依此事大嘗會無沙汰

養和元年同五年正月十四日、高倉院御事、

後鳥羽天皇の大嘗祭

土御門天皇の大嘗祭

順德天皇の大嘗祭

春花門院の崩御に依り延引す

養和二
壽永元年十一月廿四日、大嘗會、

百錬抄　十　後鳥羽院　元暦元年七月廿八日甲寅、御卽位也、任治暦例、於太政官廳始行之、八月十日丙寅、大嘗會國郡卜定也、近江甲賀郡、丹波多紀郡、（中略）十一月十八日癸卯、大嘗會也、

玉葉　元暦元年十一月十八日癸卯、此日踐祚大嘗祭也、（中略）今夜依保安例無同輿、於龍尾壇遷駕腰輿云々、先幸廻立殿着小忌座、遷御悠紀大嘗宮之後、（下略）

百錬抄　十一　土御門院　土御門院、諱爲仁、爲十二年、

後鳥羽院第一皇子、（中略）建久九年三月三日於官廳卽位、（中略）同十一月廿二日大嘗會、

皇年代略記　土御門院　建久九年三月三日庚子、卽位、太政官廳、（中略）同十一月廿二日乙卯、大嘗會、近江、備中、

百錬抄　十一　土御門院　承元四年十二月廿八日、於太政官廳有御卽位（順德天皇）事、

百錬抄　十二　佐渡院　建暦元年八月十一日、卜定大嘗會國郡、近江、丹波、（中略）十一月十六日被奏前春花門院遺令、今夕主上（順德）著御錫紵、被宣下諸社祭可停止之由、同大嘗會被停止、同二年十一月十三日、大嘗會、仍天皇行幸廻立殿、

後堀河天皇の大嘗祭

仲資王記　承元五年（建暦元）十一月八日丙辰、女院（春花門院）辰刻一定御閉眼云々、

十七日乙丑、五節、大嘗會等延引、可有明年云々、來十二月可被行之由有其沙汰、然而依無其例、猶被延引歟、

廿五日癸酉、大嘗會幷諸社祭延引云々、

園太暦　貞和五年閏六月廿五日、今日依召春宮大夫參院、及晩退出云、御卽位事、此間種々有御思惟、所詮今年大嘗會尚難被行歟、然者承平例勿論之由思食、今年無大祀者、御卽位忩被行、徒大祀及翌年例無之歟、然者延引之由可被仰武家、如此仰詞、先々勸修寺前大納言注進也、（中略）

諒闇外大祀延引例、七月以前卽位年、（中略）

定卿名別所見候也　順徳院

承元四年十二月廿八日、卽位、

去月廿五日、踐祚、

建暦元年十一月八日、春花門院御事、仍大禮延引、建暦二年十一月、大嘗會、

百錬抄　十三　後堀河院　後堀河天皇、諱茂仁、十一年、

四條天皇の大嘗祭

藻壁門院の崩御に依り延引す

後堀河上皇の崩御に依り延引す

昭訓門廊代幄に於いて行ひたまふ

高倉院御孫、後高倉院御子、（中略）承久三年十二月一日、卽位于太政官廳、（中略）貞應元年十一月廿三日、大嘗會、

承久三年四年日次記　承久四年四月十六日甲午、卜定大嘗會國郡、近江（野洲郡、）備中（下道郡、）

百錬抄　十四　四條院　貞永元年十二月五日庚辰、於太政官廳卽位儀也、

天福元年四月十六日庚寅、大嘗會國郡卜定也、近江（坂田、丹波（氷上、（中略）九月十八日己未、御産氣日來連々、今曉殊物忩之間、寅刻皇子降誕、万人悦豫之處、皇子有御事云々、及晝有女院（藻壁門院）崩御云々、御年廿五、（中略）十九日庚申、大嘗會延引了、廿四日乙丑、（中略）又諒闇儀也、

文暦元年七月五日壬寅、大嘗會行事所始也、（中略）八月六日壬申、（後堀河上皇）院御所法花供結願也、（中略）然間晝方仙洞物忩、或云、去夜御絶入、今朝又有此事、及酉刻已御事切給、春秋廿三、（中略）女院諒闇事、一巷未滿、萬人含悲、（中略）九月三日己亥、無御燈御禊、依諒闇也、（中略）

十一日丁未、例幣延引、大嘗會又以延引、於建禮門前被行大祓、

嘉禎元年六月十九日庚辰、今日被始行大嘗會事、廿五日丙戌、大嘗會行事所始也、（中略）

十一月廿日己卯、今夜大嘗會也、母后（藤原鎭子）同輿、神饌事幼主如成人、（中略）於昭訓門廊代幄被

後嵯峨天皇の大嘗祭

行之、長元例也、

歷代編年集成　二十四　四條院　貞永元年十二月五日庚辰、卽位、

天福元年九月十八日、國母藻璧門院（四條天皇母后藻子）依御流產崩、廿五、仍大嘗會延引、

（天福二）文曆元年八月六日、戊時太上天皇崩御、春秋廿三、號後堀河院、仍大嘗會又以延引、

（文曆二）嘉禎元年十一月廿日、大嘗會、悠紀近江國愛智郡、主基丹波國多紀郡、

增鏡　三ふぢ衣　（貞永元年）十二月五日、（四條天皇）御そくゐは、（藻璧門院）宮の御はてだにすぎず、又とりかさねてりやうあんの三とせまでにな りぬ、（中略）こと（嘉禎元年）しぞ御色どもあらたまりぬれば、冬に いとゞのびぬ、たゞこゝもかしこも、たかきもくだれるも、みやこもとをきも嶋々も、涙 にうきたゞみてぞすぐし給ひける、（中略）四月廿六日戊寅、大嘗會國郡卜定也、近江野洲、備中下道、（中略）十一月十三日辛卯、大 嘗會祭也、主基標損輪、修理之間暫遲々、入夜臨幸、龍尾道東階事、今度聊有相違云々、兩方神殿儀次第不 なりて御禊、大嘗會おこなはる、

百錬抄　十五　後嵯峨院　仁治三年三月十八日庚子、巳刻行幸太政官廳、依御卽位也、（中

後深草天皇の大嘗祭

亀山天皇の大嘗祭

後宇多天皇の大嘗祭

伏見天皇の大嘗祭

後伏見天皇の大嘗祭

違、每事神妙、

百錬抄　十五　後嵯峨院　寬元四年三月十一日庚子、（後深草）主上御卽位也、四月廿三日壬午、大嘗會國郡卜定也、近江、丹波、十一月廿四日己卯、大嘗會也、悠紀行事左少辨時繼、主基行事權右中辨親賴卿、己下供奉、廻立殿行幸也、

一代要記　壬　亀山天皇　正元元年十二月二十八日丙寅、卽位官廳、（中略）文應元年十一月十六日己卯、大嘗會、近江、備中、

文永代始公事抄　文永十一年三月二十六日癸卯、（後宇多）天皇卽位于太政官廳、四月二十八日甲戌、（花山院師繼）內大臣參入被卜定大嘗會國郡、近江甲賀、丹波多紀、十一月十九日辛卯、大嘗祭也、

伏見院御記　（弘安十一）正應元年三月十四日己亥、明日（伏見天皇）卽位之儀、吉時可爲巳刻、十一月廿二日癸卯、兩國引標山、及昏黑、殿上淵醉、次覽童女、今夜走廻立殿、其儀見別記、及巳刻神供了還廻立殿、卽歸後房、

歷代編年集成　二十七　伏見院　正應元年三月十五日、天皇於太政官廳卽位、

十一月廿二日、大嘗會、悠紀近江國甲賀郡、主基備中國英賀郡、

歷代編年集成　二十七　後伏見院　永仁六年戊戌十月十三日、卽位太政官廳、

十一月廿日、大嘗會、悠紀近江國甲賀郡、主基丹波國氷上郡、

後二條天皇の大嘗祭

正安三年御卽位記　正安三年三月廿四日甲子、今日天皇（後二條）春秋十七歲、御卽位也、

萬一記　正安三年四月廿五日、早旦參院、（中略）仍可被行國郡卜定之由被仰下之、（中略）

合

近江國

野洲郡

備中國

英賀郡

正安三年四月廿五日

花園天皇の大嘗祭

實躬卿記　正安三年十一月廿日乙卯、今夜廻立殿行幸也、（中略）丑剋行幸、（中略）於瀧尾（龍カ）道移御要輿（腰カ）、經廻立殿西裏、自南面鳥居入御、

後伏見天皇御記　延慶元年十一月十六日庚子、今日皇帝（花園）爲卽位行幸于太政官廳、二年十一月廿四日癸卯、今日爲標山御見物、御幸朱雀門、尒可候御車後、（中略）半時許程行幸、主上帛御裝束、（中略）行幸御路、出御官東門、經官東北等、至龍尾道乘御腰輿、歟、過御之後還御、

後醍醐天皇の大嘗祭

皇年代略記　華園院（延慶元）德治三年戊申十一月十六日庚子、卽位、大（太）政官廳、（中略）延慶二年十一月廿四日癸卯、大嘗會、近江、丹波、

皇年代略記　後醍醐院　文保二年戊午三月廿九日庚寅、卽位、大（太）政官廳、（中略）十一月廿二日己卯、大嘗會、近江、備中、

稱光天皇の大嘗祭

滿濟准后日記　應永廿一年十二月十九日戊子、御卽位（稱光天皇）節會、酉末刻始云々、

經嗣公記　抑大嘗會は、一代一度の大神事なり、（中略）うらばみの國、悠紀はいつも近江、主基は丹波、備中、かわり〳〵なり、此度（應永廿二年）は近江のやすのこほり、備中の下道のこほり也、（中略）應永廿二年十一月廿一日、よべより雨ふりていまだやまず、けふは卯の日にて大嘗會也、（中略）夜に入て廻立殿の行幸なり、（中略）さて大極殿のあと龍尾道の壇上にて鳳輦をかきすへて腰輿にめしうつる、（中略）廻立殿へなりつきて、南面の中央の間に御輿をよす、はやく下御ありて、（中略）主上しばらく西の第一の間の帖（關白の座也、）に御座あり、（中略）關白申されて大床子につかせ奉り給ふ、（中略）次に出御ありて

後花園天皇の大嘗祭

悠紀の殿へならせ給ふ、

師郷記　正長（永享元）二年十二月廿七日己亥、御卽位（後花園天皇）也、

永享二年四月廿三日癸巳、今日大嘗會國郡卜定也、

十一月十八日乙卯、廻立殿行幸也、

薩戒記　永享二年四月廿三日癸巳、今夜有大嘗會國郡卜定事、（中略）

卜國文書樣

合

悠紀

近江國

野州（洲）郡

主基

丹波國

多紀郡

永享二年四月廿三日

後土御門天皇の大嘗祭

觸穢に依り延引す

康富記　永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、（中略）戌剋天皇出御、（中略）入御昭訓門代、古跡也、但不打門、（中略）於龍尾道東階改駕輿、（中略）當廻立殿北行、北面幔外、入西向幔門、於廻立殿南面中央間有下御（二條持基）攝政殿、室町（足利義教）殿令參入殿內給、

砂巖　外記注記　寬正六年十二月廿七日、御卽位（後土御門天皇）也、〔柳原紀光　寬政十二年薨〕

後法興院記　寬正（文正元）七年四月廿二日癸亥、（中略）是日被行國郡卜定、

廿三日甲子、傳聞、昨日卜定之國群（郡カ）、近江坂田、備中下道、

十月十八日丙辰、（中略）抑去廿八日室町殿之局女房、入江殿之比丘尼（尼脫カ）御所、セイシヤウニテ子ヲウミナカシテソノマヽ棄置畢云々、人不知之、今月十三日セイシヤウ掃除之時、人夫見出之云々、件女房去廿八日ニ聊怪子細共アリシ間、不審之處今果如此云々、依是至來月十三日天下觸穢也、御禊行幸延引來月云々、當年事可有延引之由被仰武家之處、猶當年中可被宥行由被申云々、延引次年之例、太不快御例也、

廿日戊午、（中略）及秉燭右中辨廣光來、有勅問事、殿有御對面、仰詞如此、注折帋如常、

大嘗會延引、十二月幷翌年被行之事、局中勘例如此、兩端之間宜被計申矣、

局中勘例兩二（三カ）輩皆同

大嘗會十二月例

天武天皇白鳳元、十二、

國郡卜定以後延引翌年例

朱雀 承平元　三條 寬弘八　安德 治承四　順德 建暦元　四條 天福元

不被行例

崇光 觀應元

御申詞明旦可被進之由被申之

大嘗會延引事勘例事、今日相尋清三位入道處、少々有注進、依諒闇延引例今度不注申云々、平城、順德等不及注申云々、存故實歟、

廿一日己未、勅問之御申詞、今朝付奉行辨被奏聞、

御申詞如此、被注折帋、

大嘗會延引十二月幷翌年可被行之哉否事、雖爲幽玄、有其例之上者、當年中可被遂行條、不可有豫儀候、此上事宜在時宜矣、

十二月十八日乙卯、（中略）今夜廻立殿行幸也、威儀嚴重云々、今夜御出之御時鳳輿ニ乘御、於廻立殿近邊改鳳輿乘御葱花、然而入御廻立殿云々、

皇年代略記　後土御門院　寬正六年乙酉十二月廿七日、卽位、（中略）文正元年月日、

大嘗會國郡卜定、（中略）十二月十八日乙卯、大嘗會、近江、丹波、（備中）十二月大嘗會、上古已來初例延引者難被行、仍无力被遂行之、鮫然而觸穢無力之上、京中已及兵亂令

季連宿禰記　貞享四年四月廿八日乙亥、（中略）今日御卽位（東山天皇）已剋許被始行、未剋許事畢、

八月廿三日己巳、今日大嘗會國郡卜定也、（中略）

合　悠紀　近江國滋賀郡

主基　丹波國桑田郡

貞享四年八月廿三日

十一月三日戊寅、自今日大嘗宮悠紀主基殿被造始之由風聞、其所南殿（紫宸殿）前庭云々、

十六日辛卯、（中略）今日大嘗會也、八省院無其蹤跡、仍南殿前庭立悠紀主基二院、長橋南方立廻立殿被行之、

永貞卿記　貞享四年四月廿八日、辰刻御卽位、

十一月三日、辰刻大嘗宮造立始ル、紫宸殿南庭悠紀兩殿立、同殿東庭ニ廻立殿立、指圖別ニ記、御殿樣子、皮付ノ柱、竹檜、屋上茅葺也、

十六日、大嘗會、

基熙公記　貞享四年八月廿三日己巳、抑此大嘗會事、去年被仰合關東之時、諸司代相模守下行之儀有無之事度々窺申之處、雖一粒不可有御無心之由被仰之間、相模守令許容申入、關東事濟、其後、當年卽位讓位下行、恆例中二千七百石、白銀廿貫拔出之、爲被用大嘗會下行故也、仍被減恆例下行、諸司困窮難儀之體也、以此謂、從武家密々攝政竝武家兩傳奏迄、大嘗會之儀被停條可然歟、恆例下行減少之由尤不可然、其上大嘗會斷絕大禮御再興之事、於非法者神慮之儀有恐、異他公事被改過停止之條、可叶關東時儀之由、及兩三度申入了云々、雖然仙洞（靈元上皇）無御許容、攝政武傳奏强不加諫之、今日旣及卜定國郡者也、是非愚昧身難辨、武士之申條有謂者歟、知不知今度御再興一等不甘心、巷說種々、歎有餘、子細參差難記、當時之體不及言語者也、

九月十二日丁亥、兼連朝臣來所對面談云、去十日被招攝政亭、被命云、今度大嘗會御禊行幸之事、被仰遣關東之處無許容之間、無御禊被行大嘗會祭先例無之間、可爲新嘗會之由被仰出之間、無所存歟之由也云々、仍不及發之、只屈了云々、言語道斷之由、互嗟歎了、大嘗會御再興先以無益之義、定而不叶神慮者歟、

十三日戊子、兼連朝臣來、被招攝政亭之間行向之處、被命云、今度之義大嘗之中ヲ略、又新嘗會ヨリハ嚴儀ニトノヨシ也、兎角不及發て退出云々、先日與今日又相違、所詮言語道斷之次第、不及是非、哀哉、

大嘗會記錄　凡大嘗會ハ、百四代後土御門院文正元年十一月十三日（十二月十八日カ）卯時被行、其後中絕ス、二百廿三年ニ及ベリ、百十四代東山院貞享四年丁卯、主上今上十三歲、叡慮大嘗會ノ事ヲ減ジ、其形義ヲ執行也、攝籙ハ一條右府多經公、

八槐記　享保二十年十一月三日戊戌、（中略）次宸儀進行、（中略）次天皇（櫻町）於後階第一級脫御々屨、（中略）內侍自帳外及手置劍璽於案上、次天皇卽高御座給、

元文二年四月十一日己巳、傳聞、上皇（中御門）御不豫有御變、頗逼危急給之由也、仍馳參彼御所伺御氣色、烏丸前大納言（光榮）被談云、御病氣强差登、旣欲絕御息、仙壽院法印供熊膽聊雖被得御氣力、猶御苦痛甚之由也、（中略）又上御病氣今度供熊膽其外良藥、仙壽院雖盡祕術無其驗、迫御大夏之由也、人々絕語言縮眉、雖祇候无詮歟、仍退出參內、候主上御氣色、（中略）又

大嘗祭の再興

櫻町天皇の大嘗祭

中御門上皇の崩御

歸參院中之處、御所中物靜人々哭泣、無可問答人、其體難忍與及涕泣、痛哉々々、春秋僅三十七而崩給、

三年六月廿五日丙午、傳聞、當年可被行踐祚大嘗祭、自來年可被行新嘗會被仰下云々、卽參內賀申之、

八月廿八日戊申、（中略）

合　悠紀　近江國滋賀郡

　　主基　丹波國桑田郡

元文三年八月廿八日

十一月十九日丁卯、今夜踐祚大嘗祭也、

賴言卿記　享保二十年十一月三日戊戌、御卽位、

元文三年十一月十九日丁卯、（中略）

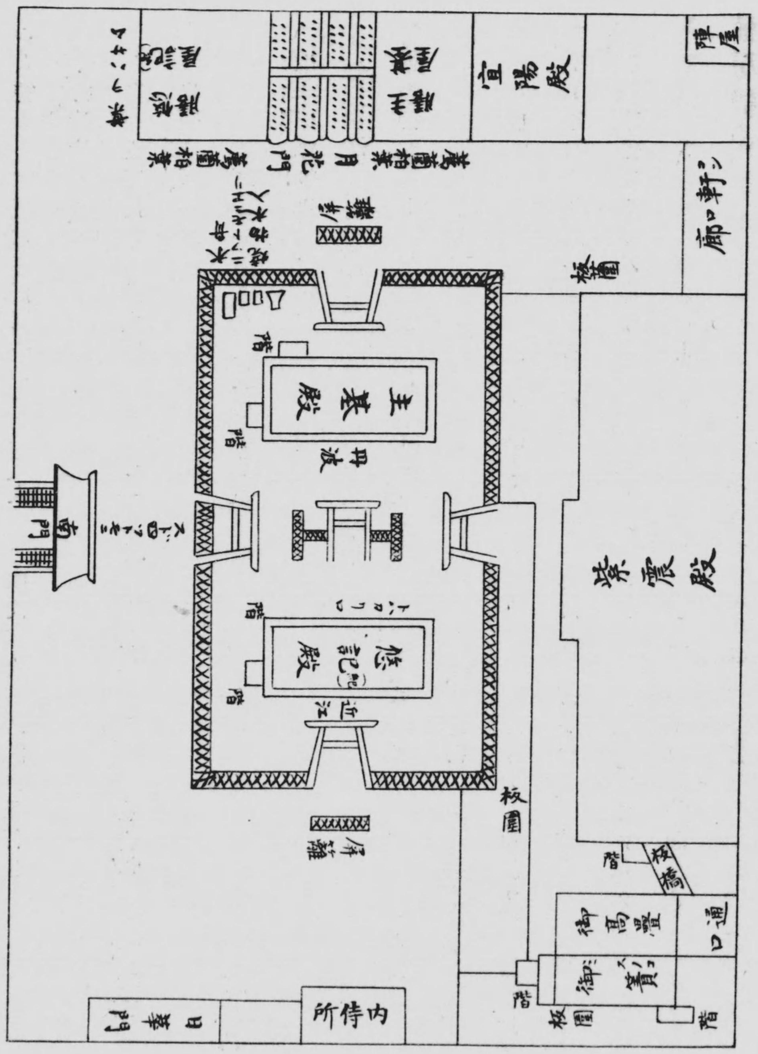
大嘗會被念候間、未刻御參可被成候也、十一月十九日　內藏頭殿承候、

未刻令束帶參、

稙房卿記　元文三年十一月朔日己酉、巳刻大嘗宮造立始候事、

元文大嘗會記

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ



∴大嘗會　文正元年丙辰十一月三日、人皇百四代後土御門院御執行也、（元文二年ニテ二百七十四年ニナル）其後二百廿三年御沙汰ナシ、

人皇百十四代東山院貞享四年丁卯十一月十六日御執行也、其後御孫人皇百十五代中御門院皇子、今上皇帝昭仁（テルヒト）、

元文三年戊午十一月十九日御執行、役人當今日故實濫觴次第等、（享保十三年六月太子御受禪、同十一月三日御卽位、享立、同廿年三月廿一日）

大嘗會儀式具釋　一　元文三年大嘗會

新帝の御卽位七月以前なれば、其年に大嘗會を行はれ、八月以後なれば明年行はるゝ例にて、後花園院永享二年庚戌までは行はれ來りしを、後土御門院の御宇の初、兵革の半なりしに由りてにや行はれず、爾來中絶して、中間二百五十六年を經て、東山院貞享四年丁卯に至りて再興せらる、然るに先帝中御門院の御宇の初、又故ありて行はれず、（櫻町）當今も享保二十年乙卯十一月に卽位したまひたれば、翌元文元年丙辰に行はるべき例なれども、行はれ難きことありて延べられたる內、二年丁巳は諒闇たりしに由りて、三年戊午、貞享より中間五十一年にて復再興せらる、抑〻貞觀、延喜の比に行はれたる大嘗會は、其儀宏大にして、今の世模す可らず、江次第などに載せたる所と、貞享に行はれしと、今度の儀式とは大略同じ、但今度の儀は江次第よりは略にして、貞享よりは少しき嚴なり、

櫻町天皇大嘗祭を復興したまふ

有德院殿御實紀　四十八　元文三年十一月廿六日、この十九日、京にて大嘗會行はれしをもて、宿老少老賀し奉る、こは貞享四年よりこのかた五十一年中絶したるを、こたびこなたよりの御沙汰にて御再興ありしなり、（年錄、日記、）

八槐記　延享四年九月廿一日戊申、此日天皇（桃園）昇壇卽位之日也、

寬延元年八月廿五日丁丑、（中略）此日大嘗會國郡卜定也、（中略）仰可令卜國郡之由、內（二條家基）大臣書、國郡、近江國滋賀郡、蒲生郡、丹波國桑田郡、氷上郡、

十一月十七日丁卯、卯剋過退朝、祭主鎭祭殿門畢之後也、齋浴著衣冠單、巳剋參內、今夜踐祚大嘗祭也、（中略）次渡御廻立殿、其路令經長橋、南殿、北簀子、東庇等給、（二條道香）攝政參御傍被奉扶之、先之於鬼間（後櫻町）令著小忌給、

八槐記　寶曆十三年十一月廿七日庚辰、卯一點參內、著宿衣、今日天皇昇壇卽位日也、

明和元年八月廿四日癸卯、參內、大嘗會國郡卜定也、（中略）

大嘗祭の再興は幕府の進言に因る

桃園天皇の大嘗祭

紫宸殿南庭に於いて行ひたまふ後櫻町天皇の大嘗祭

合　悠紀　近江國滋賀郡